[illegible]湖古集　上

911.3
シ

掌中附合集

東都　禾木園校輯

ちのしも文字より夕くれの萩　梅室
流れ雲に消残る月　宋人
鶉なき穂を見せて来る人　室
海に飢し影の移ぬき　人
始まるゝ庵も春待春構　室
構ふる音の宗なき山猿　人
秋来りの座よりあるく浪の形　室
君妻からけに惜きいはれ　人
茶を汲て羨む翁に鴉の糞　室
棒て日のめも出ぬ地しめり　人
菜畑の猪ぞ男生き捕り　室
旅てし様しもあの真麦哉　人
軒の月に今は淵水の春寒　室
風情引かるゝ廣称之七　人

壬寅新刻

掌中附合集

菁莪堂

掌中附合集

東都　禾木園校輯

ちのしく文起よりくゝり秋の萩　梅室
深け夜に消残る月　宗人
鶉なは香を焚せて寝る人　室
悔ミ飢し秋の稼なき　人
越しくる庵も春待寒梅　室
構ふる音の宗ある山桜　人
春来りの庵より多き旅の花　室
吾妻かゝけに憎きやらん　人
茶を汲て菊入盆に鶴の葉　室
棒て〻夕の雨もやる地志めり　人
菜圃の佐吉男生き残り　室
遊て桜しよ秋の花変なを　人
秋の月乞ふ附水の香寒く　室
風情引しらん膚新三七　人

きぬも打干鞋も新門の石　宜
謎にかけて息子あらさむ　人
むつ露るくまし旅路の轎まち次　宜
寛露き鐘の鳴やし　人
蝉子ろ裏子鉄くろかんさ　、
納禅して借み歩ろ圀　宜
のこ明き錦繡乍やせあき　人
斎折いとしつも雑談　宜
又長の客もつくれぬ廊下に　人
丁子湯沸る初室の牀　宜
総藏せしきほの芒く枯て　人
ち役に何れあるも鞭遠　宜
露つめとやうて粗忽なる仕　人
跡請つ案この二三斗もへる　宜
西辻の脂炭中な肉汁　人
数寄屋革履子秋のくれかむ　宜
むさくとかいある紅葉掃さら　人
児の塔婆子貝をと手向る　宜
鋤鍬をかくぬたさくぬ鳥林宜　人
さんか古きさき鶏か見られ　宜
風呂なねくふ見補ふ去遠　人
池の南へをかけ迴る雉子　宜

ちるかとて見てても残る桜一葉　涛風
秋の志やく子鳴そめる虫　貫桃
夢清其月の膝付も断て　、
手紙の様にいひくしても無　風
船もなくは炭壷ちつて掘起　、
古呆本団師匠の手律　桃
惜茶もみ解集てよ住深つ込　、
招京金つかさきゆかる縁談　風
内にに陶役の事も済て居る　桃
いやこ水ゝ画のあり過愁数　風
おもく桃香は麻疹のさゝ古過　桃
稲刈上ことあるをとり川　風
荒ひなくはよきに月見の上手者　、

篆の仕の什を伝切よきく　桃

京くをいやめかし稲あけ　風

合点の中の妇儀さん　桃

むのゝ木曲実の煙のなかる立　風

妻ハ世間むくちまある猫　桃

笠縫の澹井の暖いひきゝかく　風

おちら膝方ハ信屋の道芝　桃

古字素性の忘けく嫦く朝　風

光の咄しも何か細声　桃

痩さかんて荏麻一本俣五合　風

かくりく夜ハ傑すゝ屋店　桃

他國出の清なくもつひゆうこ　、

子供等高くの本形なき夜　風

幸速の何む嘉ニ揺らい　桃

罠の狐を鉄く出する　風

煮ハやつく粉ニ葛の遅い自　桃

踊崩の中まのまゆる、　風

秋空をさて稚をむとくこれ悪い　、

まきうやりもなかしぬ番茶子　風

神代の付け持ちひとを田畑　桃

ゆつられすねハ箱一幅　風

何山さむの麸向をまあるう　桃

ちつとはやまぬ雨の嘯　風

蠅の泉ハ満もりて足天の川　獲物

霞に咲ちる草の棲　宜葉

菸の虫よ花ハ折とりりたる　物

旅人の世をゞ姿ゞ放ゝ月　葉

御旅院の減り達ける茱漁　物

掃除次第に儲に張せる　葉

時雨もたちぬ稚の岩菜て　物

のゝくせを存く菜昏　葉

引焼てそうとも好く浸豆腐芭　物

妄住のくちまきい何の大寺　葉

柳ハ瀧ハそこたえてもまき一里　物

二百十日をも嘯ろう浜燥　葉

月のさすとこに栗種を切仕舞　物
秘めは角力幕もと洩る宝　業
見逢まで隔て旅人の近に有り　物
鏡を研ぐ流を掃出し　業
云とよんで居ても行ぬ世の雲　物
暮の汁ぶくぶく腹のくへ　業
焼棄に貯し愚を吹落　、
硯をも出して子供通りかね　物
蘆綿に人捕らゆる葉隠り　業
いつのまにきなれ葉での寓さり　物
律儀さは雲の如くに愧出て　業
兵くも落る大師講の粥　物
又来て買のかはる二幅箸　業
こゝもこゝも草の花くず擂　物
西に有る娃なんよく吹つのり　業
降とも飛ぶ子に嗅く菊花　物
唐変月を見出に家建て　業
湛へと超へ行けのて来る様　物
掌へ吹荒ちらく船の中　業
秋宵草の陰の作る襦　物
家の子はいく足も尾の屋敷町　業
蓬餅つく船色の音　物
赤とくと家本の色は吸換え　業
煙の舞葉藻に轄かゝる　物

出違ふて表門で宵秋　天遊
赤ら鵜とも恙進め一瞬　欽武
絹で来る鏡をはてる節有て　遊
夫以覚の水は吸さまき　武
分有くらう節をつける菊の苗　遊
雲おふる夕は計つてきれ　武
雇はれ雲雀の借烏帽子　遊
赤らすも学び流を追ふ孫　武
井戸端に雀供有り嫁の来　遊
閑しさゝて障子に雪の空　武
一継子出てゝ移せる無妓　遊

掛ケし強ゐる化粧椀乃蓋　武
あくさこの浴室の痒き心の躰くらく　遊
手斧始音の顔しくまる　武
水除にはかく吞で吞る水川　遊
数化ゆる声ハ重ちまさんれる　武
あやまのなまゐ四日月の影　遊
名残の岸の声も吉原く　武
出代に人を物もさ振るを縫ひ　ヽ
上の廟をさらへしてかまし　遊
家計のまゝ此く所く物ほき　武
よく呼び付て来さか中　遊
開帳の日にそらくに寝まう　武
よ居の悔て数寄有り薔錦　遊
藤ちの演むけに管の躰出り　武
世帯を持て見るか遊くは　遊
ゆるする堂の始年のはゞ霰物　武
夷のくまそくか業泻のつき　遊
月よあるはかに來るの両も雨　武
寝ものくさり啼子猫の擽痒　遊
継やけうつひ来る秋の渡舟　武
旅てたかりや力さしくゐか　遊
先似や小紫来ぬ小唄の流行出し　武
家く仙陽のきみし年の日　遊
鉢坊のむりまきて來りより　武
いろりを寒く曇ゑ家て老　遊
交りや始一ッの月夜の　伯遠
はしめて宮き山原の秋　禾木
盃を隣子そらし法橋掛て　遠
白ひの日うき古傘を焚　木
新らしくちらし数子呼程　遠
吉く成くちる狗滑け落　木
踊から藻ん出さ候く壬生川　遠
見てくまさあぬ焼酎の酵　木
女房をたよりてかる縫袋　遠
うきさ点料もらぬ狂哥体　木

東崎の灯の色ゝふかき暑　遠
筆藪への宿ゝうちわひたる　木
十倍に借出した家の寄進札　遠
法花の果に美しき月　木
宮斜に明て篝炷なりの露　遠
こん粉摘来て江戸傳を賣　木
松葉やら乱世々に降あらき　遠
畑や明ても涌る澤川　木
暑遣き百萬屋人の抑鉦ゝ　ゝ
丁児の俤を懸念にきくる　遠
さらりと湯つけかき込音せて　木
産所に一味な仰ぎは讀な　遠
天鵞絨の華やぐ以て表を積　木
此植のやゝ若さか宿られ　遠
そこいらへ扱て返さきた人多る　木
きやう結ぶれはおくれ柱の木　遠
路光は明地の月傳る閑乃宿　木
京都は櫻を赤以移頭　遠
山一時まく澄てのる秋の月　木
崩道繕ふ築地さし升　遠
山稼へかよふ大工の打つれて　木
粉挽のわめかよ無点と先ふ　遠
汁の実に擂返する豆腐　木
菱は菜に横明とされ　遠
壱町の東に黒吠え渡以る　木
一くきまうに焼くおむ藪の芽　遠

やさこのゝ一時雨まさる出帆の新　雨楚
此とこのしまくら表見物来兎　東枝
足を寄に錢の主客もたちの一て　乃善
涼しく水子の片る夜も社　楚
かや着に芋のくずし月の秋　枝
風敷のちん〳〵出先をとく吟　善
淀川て乗起くれさん出船　楚
やり違ひぬる旅の襲詰　枝
吉野洗の雲に隠れる新國　善

東路の灯の色ハかゝき墨　遠

筆藪ゝのやゝくらひある　本

十倍ニ出しゝ宮の寄進札　遠

陸奥の果ニ美しき月　本

宮餅ニ次て年經る酒の肴　遠

こんぶ摘末ニ江戸海を賣　本

松葉やら出世し落て降者きか　遠

畑やゆかしき酒る麻川　本

罵遠き百姓屋人の抑紙、　、

丁児の佗を慈念ニ出る　遠

さらりと隔つけかき遠音哉て　本

産所ニ一味な仏法讀本　遠

天鵞絨の華やくばて表を積　本

水指のやゝはさかゝ重くれ　遠

そこいゝ拾て遊きちん宿　本

きゆう結ばれおくれ板子木　遠

路先ニ路地の乃備る闇乃宿　本

うかれ小拵き赤い騒縁　遠

破れ扇を箱に帳よけ　埜
笠干のへる蚤をおろぬく窓の内　抜
きさんのよききに指まて出る　菩
す咲ハてとてちりし庭の萩　埜
水に浴りて蔭さき秋の月　抜
姥山ハ江てらちかある萩の跡　菩
すゝく拾うてくれ袖の焼飯　埜
数ふるに錢のかさもゝてゆと　抜
折ゝのぞくる営の経　菩
めつけの番屋ハ出はなも通れ　抜
文いの低き人裡ヲ見かろ　埜
旅結とあらて出たのまり早れ　菩
四五冊読て本の端帰　抜
餅配るかゝさし綿面のはき　埜
他所の小歩へてまつ江戸役　菩
深川ハ山やきゆし海舟の出　抜
すく虫溜つもけら村面　埜
生て居る国石碑も望ゝ無　菩
縁日のかなめもちらひささき　抜
十六夜も同じの雪に落つり　埜
手ならきあなて宿蕎麦のかく枕　菩
蔵宮も年ゆくに争しの所　抜
不断に若ても人目ゝの縁のゝ　埜
酒壺の一度つても文さなゝと　菩
揚ちちあひハ生涯それけり　抜
風のそる雪の木抜静りて　埜
雨ハ新たなり曇る麦の秋　菩

麦蒔やきいつ泉ゝ渡さ通ひ　思推
急ぐ行くこのぼり山の頂　碩山
昨夜茶のようも守ゝあそん　推
呼しあひ合羽を焼て野犬のゝ　山
目の旅を押しさ落ちきさ　推
清逃き世よハ気の晩やら　山
桜狩の路に古ゝかる寵石　推
出水の引て瞑き原　山

破れ扇を箱に帳よけ　埜

笑ひ入る壺をおろぬく燗の酒　抜

きくんのよきに摘まで出る　菩

手燭ハてらし庭の萩　埜

水を掬つて雁き影有　抜

嵯山ハ江戸ちかき葛の路　菩

すゝきうられ袖の焼紋　埜

数ふ手に銭のかきもくつれと　抜

折りくる蛍の経　菩

なかつけの善居に出る宮の内　抜

文ハの低き人桂もの　埜

雛祭とかさて嘉左のきし隠れ　菩

四五冊読く本の端帰　抜

餅配るからくと経画の花　埜

能のハ生きてまり役下役　菩

隅田川ハいつとさかりの海の曲　抜

また雪満ちも出ける村雨　埜

生て居る石碑も望む虫　菩

縁台のかゝめちらひさき　抜

十六夜も同じ月に籠り　埜

手をさきあてゝ待暮の枕　菩

菰屋も年坊の事しるの　抜

不断は花を只見つ暮のゝ　埜

酒宴のもたつて文さかる　菩

揚屋はあひし出産それ行　抜

四方にたる雲のもと静かに　埜

雨ハぬれし里ある春の秋　菩

青麻や赤い実のもゝ垂ひ　巣推

冬枯のこの谷の山の頂　碣山

拝筏祭のよるもあつまらん　推

ひとゝめ合羽ともに見人の　山

追付て見れは古き女ハ足遠き　椎
まさきに海さへのあまの姉許　山
三粒加て降ても帰ての泪すてく　椎
継の袴しハ絨られぬの子枕　山
むかしのあまり盛備る緋の衣　椎
寓妓さけハ宿をとりすまし　山
むかしの庵月のすゝハ高き　椎
昼さへ霞きく秋ハ婦きく　山
まめくと峰ハらの苫の風　椎
嫁けふつく天か無ぬと久　山
送君せよと差ても葉せる田地持　丶
ゆり起されて茶肉の芽初　椎
吹青て巨蜂ぞんしと焦息　山
松葉のふて兎縛らむ　椎
餅を落るせうしと肩ま場嬉　山
大伴をつゝむ精衣の袖　椎
丸山へ嫁味甚と持出て　山
人なき庭をせくさゝやく　椎
蚊柱のいく度となく立のほり　山
泊なれ付さき宿の秋の月　椎
引捨し燈車ハ高新　山
此程来ハ若書の名所　椎
老路てゝ三十ハかへしそうき　山
行西折くる看板をよまむ　椎
雛かさる格子取くて取せて　山
蓬の袖を見くく風になぬ　椎
意地悪の猫もなまぬくひきめ　山
かちも消てま春さく加の梅　椎
風の手に澄める十日月　禾木
手紙好んて背戸ゐの精子　祖以
閑俵きてく倒ら積上て　杜角
干物のかさま寒さまけり　濱丶
一面に蚊も子らは押流し　以
まく揚子の赤い井戸端　木
桐先ま小口持いぬ猿の来　濱

逢ふとも見えし浅さの終なる　乙
散る春雨柳かりのゝ花川のみて　木
比良高ねにみとめきか新訴　几
十才かりの晩く朱鷺の侭にけり　乙
古の畑をかける角力場　済
僅なる人を寄せて十五夜の月　几
馬にもあらぬものはけりけり持込　木
苦いやうとも素ゝ庭石によせて　済
菖蒲のる金出して出る　乙
一本の花を小桶に花を置屋　木
初雷に芦は少くなりぬ　几
よ風と峰橋見渡遊磨風　乙
夏の昨日を陰を寄け丁児　済
組子のせいと鉢に灯の揺り　几
儀ふ婚とらしつる家出　木
いとむ畳をかえて山をとり手する　済
者なる里山手の塔もあるなり　乙
掃の時る松に参る手茶屋　木
蜻蛉飛ぶたらんと焼の灸丸　几
誰やらの花粉様に二階に　乙
さゝやく時の声も定めなる　済
月影を突きこぼしゝ鴨縄で　几
お庭にようは芽は化猫　木
菜種のおとの咲いて書傍　済
寒鳥つけて階に卸皆　乙
二度ニ夜出とさきは恐れ　木
暮の自ひは多のるともなし　几
祈る心の閑居帰りへ恋とあれ　乙
祝ふ事は君を祈る妊始　済

暑さなをもはや行く法の涼　英丸
ゆくゆく素ち賑ふ　寒松
蝶の羽ふ翁に旭織をそれなきて　丸
つゞらひさ好き筆の定幸　松
名歓の宿に見る秋の月　丸
縁のきる晩て澤の風る　松

[illegible]迄かさの[illegible]　丸
旅の土産の杉楊枝とくる　松
袖[illegible]母の名を[illegible]　丸
家の風とて[illegible]つきぬ　松
[illegible]の[illegible]て　丸
[illegible]便り[illegible]　松
十老の[illegible]のまゝの杯合せる　丸
松の実[illegible]花の日　松
月影下な花の[illegible]て　丸
露に[illegible]　松
名を[illegible]植[illegible]菊の色　丸
[illegible]の筋ハ花[illegible]　松
[illegible]の[illegible]雪[illegible]　、
[illegible]のやんて咲のる梅　丸
[illegible]のる出[illegible]　松
利[illegible]　丸
[illegible]の[illegible]　松
入梅の[illegible]空　丸
国[illegible]の神の剣も[illegible]　松
[illegible]刀村[illegible]　丸
流井の[illegible]　松
菜の種[illegible]月　丸
[illegible]の[illegible]秋[illegible]　松
[illegible]のまて[illegible]　丸
[illegible]の[illegible]　松
[illegible]毎[illegible]　丸
[illegible]の木口[illegible]細[illegible]　松
[illegible]の[illegible]の　丸
[illegible]　松
[illegible]田[illegible]　丸

山下[illegible]　紫山
[illegible]枸杞[illegible]　宜朗
[illegible]の[illegible]　山
[illegible]の[illegible]　朗
[illegible]の[illegible]の[illegible]　山

月のうしろからしけくる臨本　木
秋のつきり泣く泥亀俵の流　室
葎こそありし中宿の谷下り築　木
厩からやよ葛水の菅薦　室
不届な奴への江戸にこそ事　木
癖をかくして女の髪の毛　室
南方のつれなき村の萩の枝　木
かけと雲のやんで月の出　室
船なくて雑兵桶を小手桃　木
稽の葦の薪くおもうりと　室
生薪のけぶる釜の下　木
かかり東につける明樒　室
棗柿の花の一本気きゝり　木
枝ところする薙実の薬立　室
出代の裸にかたけり包枕　、
いきまぬふりの女房上品　木
居変て化粧盥の底ぬけ　室
五ッの丑ツ過ぐる占ひ　木
その為に文字堂法押るる　室
夕雨おちよく坂の下りは　木
秋風や残る猿の花ふく袖に雛　室
鍬脚様八幡所の祭い　木
ちくはの寺本字に訓ごして　室
近所へ冷き未だつき合　木
秋の月ゆちくりて花里に　室
りく萩花の丁度咲かれ　木
蓖麻や百磨て空に座臣　室
人の性の又さへ座する　木
湯殿に洗濯住居と投込　室
七ツの鐘と入舟にさとつく　木
一両の氷まで渉つて塔の先　室
生ぬるさうにうゆる漆川　木

去年董海の府に繕ぬり　得芳
松のいきり法風のわかり　菫蕙
蔦遅き大工光りの汁粧て　蕎

一本かゝる笄もかしこし　嵐

蛛よりの角も色付舟出て　蕉

絵のくもりて露時雨の秋　嵐

隠居家の椛をそめるひくされ　蕉

ちよみつの旅も去ゆ跡なく　嵐

こゝろさへ並へ立る玉苔　蕉

田舎祝りは何をするやらぬ　嵐

年頃は今々八眉も似たる哉　蕉

髪にさゝしうきき櫛借さる　嵐

霧ふ立渡の名くふふ赤穂堤　蕉

諏訪へ立る間内は皆留主　嵐

庭鳥のしる用延ける月の秋　蕉

生りてそのえ遊ぶまのさゝ　嵐

むつ袋は舟の芦刈し猪垂る　蕉

四ツも宋め鞘は静　嵐

妖きを出家出しけり升酒屋　、

娘もつ者に奉る法渡　蕉

君に合借る傘の面の晴上り　嵐

雪は断く鳥柵の八さうは　蕉

春もおや花札の手にて薪雑　嵐

種の餅なる蕎子さへ峯　蕉

新雛子の名は足も雷ひつく　嵐

剃さ頭を小袖臭もる　蕉

綱渡の芸もやさし漏けり　嵐

古る世し池の魚もまよふく　蕉

併せたる旅種の肩はた近く　嵐

思ひ通りは紫のしるひる　蕉

ゆらん寺の内は柚子その住ふくさく　嵐

はしる小猫の落を見玉　蕉

菁勘も見え出午寺も広下　嵐

蝋汁は赤る妻の板内　蕉

続しむも乗ひ旅しまく　嵐

垂の里はさゝもあきかの　蕉

花もさ村々帰度寺々の妻の名　雅叙

行れまし梅は無し山里　以兄

一本かゝる傘もかしくゝ　雲

蝶よりの肩も色け母出入　蕪

鮎のくゝみの詩文かく秋　画

隠居家の欄にそめるひくれ　蕪

ちよろくの旅も長の路なく　画

こゝろもと並へ立てる玉菖　蕪

田舎訛り紛そ月出しぬ　画

年酒は八十八眉も老て成　蕪

夏にさへしてうき帰る傍なる　画

霧子虚伝のくゝ木穂境　蕪

諏訪へ立まで囚に請留主　画

居宜の月遊ける月の秋　蕪

生りてくめのこそ浮すまのさくら　画

七夕祭に家の志りし祢り祭　蕪

四ツも星めかゝ戦ゐ粉　画

鍬きき浮に流れ出しゝ升価巻　、

娘もつれて来る法治　蕪

為さ合法な傘の目の晴上り　画

見付の掛網おろせは夏祓へ　嵐
船のかゝゝく旅の衣借　兄
いつよりも雨ふる中に出し宵の月　嵐
芭蕉すかゞり風ほそく吹　兄
抹額ちの棧敷におるゝきて　嵐
曲橋出しのうつき井のけしき　兄
面白う見しあつ子綵延り　嵐
朝の汲て辻の恋物いひ　兄
秋も暮て庵も又暮時雨　嵐
清水のよむ連歌はなく菱笠　兄
卅の月かさねて秋の立時分　嵐
稲の穂のおれてね處さくなき　兄
さらに淀稗田の縁なし富帳て　嵐
猪はよのをおに東山立　兄
七ツ去手に鐘鳴むかし　嵐
俗雯そ雪の寒き付けり　兄
足軽く京都近よる鳥の声　、
白きカリ八瑞金扇に貫ふ　嵐
鳥は長袋つむ鉢にはなれさて　兄
魚を喰はしくゆくせね逢肴　嵐
送り居に明て志れし風呂桶　兄
腸て狭きる絶境の花の中　嵐
齢よくれ掃除婦人の第九　兄
底もちよ寺の霜枯　嵐
物にはもな枝の庭乃蚊帳　兄
人に乗かる籬の株もち　嵐
忘れらくハ三千へゆゆの身の雪　兄
手拭の縁せ哉味かしくも寄る　嵐
若きものなき揺ゐる人もあらき　兄
子にひき寄てよい料理ふ　嵐
都起をならんで座るは煙ま　兄
女歩開して拂ふ霜候　嵐
隣も世ふ六四のむ揃て候て　兄
ますさぬ月の夢の帰　嵐
東武中川の向ふの羽子の音　葉部

ねられきつかくの咲揃ふ梅　山舟
来るとよりも早き茶の葉に待て　鶴
小桶へうけるみそのにほひけ　舟
掃き縁へ場吹寄に秋の月　鶴
雨たしてゝ跡多く秋さき　舟
一きれ笑出は留まても払ひかす　鶴
白き延さぬぬ縁のとけ払ひ　舟
ちよんくも悪ぞ傍字兎まつかうき　鶴
帰しの渡の向うむかうつく　舟
あそひろて標なくさき恵の先　鶴
小借ねまみのく塀立　舟
咲くる菜の帰りゆき起　鶴
宗し丸へいとい咲ぬ月うけ　舟
香料に野のて岩の清の海　鶴
芸して吹る絹は足袋　舟
咲むに旅の支度の乞ひ　鶴
病しく安むかし不膏の暖　舟
丞恵も海苔のとむかも同所　、
人生はいくとも倦まぬ御事　鶴
むかしよりの句の内の手折れ　舟
ちよつとへの月も地蔵は熱　鶴
笑のむとや稲来て足す障　舟
寒き其の片岸の蜻　鶴
業深き保守出て上る　舟
後園にてゆきる家の業の　鶴
方角はさぬ窓の車の目之堂　舟
先せてへかれと薄ねいり栗　鶴
継ぎを根られてる月の秋　舟
垂洗濯の日御しのさしおく　鶴
鈎花と入りとまく横障子　舟
戸袖の蓑結う車通さぬ　鶴
かくて行なる径直のまで庭　舟
あとなきぬふる虹の出すちる　鶴
就むふの股は木々の咲の丸　舟
霍の行ひる当代乃くる　鶴

拵らへてみれはしら髪　透　閑

參信しの雪に入る宿　遷　流

さゝ中やる刀寧割る新たに付て　閑

杖て家借る影の似く　流

石蕗の葉を折る月のきせる　閑

大滝に消る山路霞の霜　流

四方に布を干すや秋の露　閑

縫ハ被れる時ハたゝ無　流

出生の秘を秘すも世ぬ雪　閑

恋もとのこてくる酒と来糖　流

雪の旅は人会更つまる世て　閑

篇呼ふみの宛ならてのしぬ　流

初いあさき盲土屋の盃の月　閑

つけ紙をある粒の蓮の実　流

嫁姑の尻の座いも生れ付　閑

側のゝ乾く床偏の色衣　流

閨とみ様義子遅い初桜　閑

法源近く急る雀子　流

盃の流れにとけりハ面男時　、

中時きくり瘦せてしぬ　閑

思ハ同志人の底よ打かて　流

急度使ハ行か初瀬の氏条　閑

参詣の業をさてと知れ亮　流

樵の苑をへつらう此楼　閑

五六代孫も拂ハぬ涼しき　流

今度の花か十分の精　閑

船場之納の末永を出世　流

霧るまむせてハ第の人増　閑

藥山をふ糖子肉の灯れハ作　流

雉さまさ當来し婦雅子　閑

六人して様子知るも秋の風　流

濃の匂ひ話いならぬ新氷　閑

世代あさて富くる大學図　流

物滑芬く釜のゝ出は　閑

まうしと出吹ある流れ打　流

一つくさる子粒もしりく都か　閑

静ふるへ人のけはし　玄笑　透　潤
参侍しの雪に入る唐　遷　流
古ゝ中なる力辛割る新兵衛て　潤
枝て家ぬる新の似く　流
石蕗花粟ろに小月のさし出　潤
大鍋の消る山のほ霜霰　流
四阿る布袋湖の秋の宿　潤
鐘ハ被きても時ハたつ無　流
去年の秋を秋とせぬ雲　潤
底ますのつくる酒と床焼　流
雲の飛ひ人生下つかり付て　潤
届けみの荒れ乍ら立のしぬ　流
知ら若き盲古屋の香の月　潤
つ行ぬきる雑の蓮の実　流
情らの尻の擂ハ今生小付　潤
側のし轆く岸鳩の色衣　流
関けみ稀義不遅い初桜　潤
内藤近く来る豊子　流
雨の流しつ仕ると面白男哉　、
生時まつり療出しぬ　潤
奥の間忍んの底ぬ新内さ　流
急度清へ御初瀬の氏糸　潤
届徐の業を走して与九兵衛　流
粽の売ありへてくつ〳〵楼　潤
五六代縁を辨いぬ深与　流
今度の岩下ふ十かの精　潤
船場之内の未ぬるを出世　流
霧のまむせれい弟の人数　潤
築山きと小楯子肉の松乃柱　流
雑さまさ当業し踊稚子　潤
六人一寸儀子教くよし秋の風　流
漬の白ひ狭い定ま新米　潤
世代のおき寄てる大官司　流

湊川も賑めきたつ春の月　大梅
蛙の中に交る蝶の音　秋是
縁伝のかのりもよゝ楼船て　信州
手綱のゆるく江戸へ掴よくうす　梅
椎子ハ我家つゝ宿の浪　是
雇ふ舟の飯も嘉ては有る　学
此町の宵は宿より舞はしゆ　梅
鳴物や初て遊ぶ座をさそる　是
世話も止て長く彼し水鶏の里　学
やゝ痩せ若ても乳のよい　梅
外も甘き肉のつる麦は雲て花　是
あまいさ水に持ちそひのうす　学
月の秋ハある下も稀もつる晒　梅
賢くも露餅子は程の撰り無　是
露霜にまうろ人の宵に相くる　学
報読しゑて俸もへゐそつ　梅
三里よりはさし四里せい近いつもし　是
帝く花都も下夜咲てゐ　梅
立花方にさく藤から壬生編　学
男の解子鼓凄くなりり　梅
口先の云ひのまに庭のふとく然　是
手和え出ても付ろ花の秋　学
諸持ち儀子済はとるを待て　梅
延して重ね落れ抜上　是
立春さ之ちかの病病の手を濯　学
赤飯読し圓本詠状　梅
志ひ皆嫌とへいみ田舎そ度　是
嘆ひ節ともに森伴方の色　学
収ら生る唯ことくと蔵氷　梅
暮ぬる秋ら十分な月　沐
其向の買物売る役付かり　学
羽織の裡の新しくなる　梅
行司の伍嘆の他の打ちかゆ　是
焦る由との京き焼みて　学
京ゆの下は長持の声山の色　梅

湊川も渚めきたり春の月　大梅

蛙の中に交る蝶の音　秋之

猿沢のかのりのへ之へ棲付て　讃州

手桶のくゞりに江戸棚よくらす　梅

帷子ハ紺染て宙の後　之

雇くみの嫁るも暮もとる　学

此町の宵は扇より舞そめて　梅

鳴物やめて迎座もとせる　来

世語に迎てもくれし水の聲の里　学

雪に櫻其あし雪気のよに　梅

外に世ね肉いのして変は雲て花　蓬

[illegible]水に楼見てひのるう　学

月の秋ハ今も[illegible]　梅

買く寒[illegible]　来

霞雲[illegible]人の[illegible]　学

[illegible]　梅

三里[illegible]四里[illegible]　蓬

ひくしさ種ゟ書も須ゟ　去

入口のくやいつ比の中屋敷　英泉

箒とらへてちり取る娘の子　邦泉

黒ぬりに仕立る籍の溜ちぎれ　英

さがしくをりうら縒る鼻紙　邦

閏とて井ゑへてこしらへた月　英

秋仕入まつて書こる店みせ　邦

兎飼は田舎へ戻りて宅桃　、

水のころはつこしまつる精霊　英

はくれぬ旅籠は安くて苅荒　、

雲に寄ても人いちむ爪勝　邦

注文の竹垣をまてゝ作るゝあ　、

上へつゝうと鉢の摺底　英

家勤の大店つゝかふ月の夜　、

出判の其て小雀山雀　邦

落葉は老の住みに掃きて　、

淀一とらくや畑六反　英

鳴くゆる姫瓜の葉うらむしさうり　、

楊柳の塚をさの流れかくさし　邦

何ごゝろ仕業も飛して来落て　、

村雨の跣まくり粉りかり　英

籠き拾ゐよて風呂敷を絶　、

三ケ月に物まてつかぬ襟断　邦

彩色は琉球屋図の未ぬ写　、

あさくて飛き有らの口　英

初ちりも十九出羽に降るゝ　、

生業のいつもまりし捌る　邦

附郎花雑葉しぬ二才ある　、

名残一字おもし菩薩　英

我佛は離は金の月見行　、

鵜の新潟で居まいて世見　邦

蜀作り医者の下手にすゝめ花　、

跣て居小と後いはしたるけぬ　英

彩布も津保ど来わでしけ　、

京の飛脚の肖ちまず　邦

ひくしき稽古まも須な　兵
入口の名やいつ比の中屋敷　英泉
箒ふみつゝちらる椽の子　邦泉
馬ねの乃仕立る籍に凝らせ　英
さかうく頼うら繕ふ鼻紙　邦
閏ふけなくてこてんぬこの月　英
秋仕入まつてきうてなみおと　邦
東鋼に田男かひらりもを空砲　、
水のさゝめうこまゝ野濱　英
晦くいぬ六葉ほ定ゝとゝ荒　、
雲に名る宿しくいるむ、氏瞬　邦
禅文の籠氏たてゝ低くあ　、
上へつらまる鉄の掛底　英
宗勤の大名つくふ肉の言　、
手引のまゝる小雀山雀　邦
落葉ハ老人の仕事に掃きて　、
後一ゝゝ十四六反　英

手出てはちらりかゝとむめさゝ　、
丁度水口祭る甲子　英
時なくして積りの夜や寒月宵　楳翁
子子持くく裏待蒲川　紫酔
木候衣をかへて旅立夜　虫立
嗅ひ出るゝ小出行を待　岳遊
雪洞の灯を西へ向く月の陰　酔
茶の花を育る凄き村宿　翁
袖垣を見越す萩の頃越道　遊
燈ゆらちらちら木をすかさぬ　立
聲口のみそてふ自讃に添たき　翁
次第ふ国分巫女の神楽　酔
當傘を千筋へる庭羽町　立
わらわらと春梅咲ふ月　遊
瓦を無しけに上座て差す　酔
ふ用あかのよき文易に出す　翁
新家を乗たる見にふ入付　遊
東海道一ちひらけ道　立
時儀よりむかしのちかふて寺号　翁
ちよろつく水に狩の燎香　酔
出代は猫の恩を帰りして　遊
春雨に辞すのそく状箱　立
お櫃に焼の手が減やれ　酔
庭に苗を並る四五寸　翁
紫さへ道て大日も揚る牡丹　立
遠の橋を掛て和布鍋　遊
板依の洗濯のせさし落ひ　翁
行きつ戻りつ出以口上　酔
菩薩知ぬ宗府知ものの都合　遊
木賊も葉に露つけし之　立
出籠をさけて寒る内の人　酔
傍にまつ母を刻む摩南　翁
町会に花見させて萬西肌　立
茶雑掛の行ゐる梅のつみ　遊
侯見る歴々花ある海をその酒　翁

香合の内ハむかしのとをす　酔
印籠に戻りし花菖蒲の宮　路
座ても起ても雨なき春　立

泥足で拌きぬぐる田植れ　梅室
植のむしるつまんの細　喬人
汐荒れにけくお舟を繋ぎ　、
蚊やも刈納を肩の秋風　室
名ぞの月二階ハまだ素速　人
縫つゝあるも共越る山鴫　、
焼錆をうち礙しる糖の綿　室
きれちゝ併を思ふる勾当　人
豪物のこのみを下うる俄客　室
小ハむかれぬなきの空風　人
若髪を落して路の淋しまれ　室
庭の粉びのあるき経る堂　人
仕合になきとられぬ旅の月　室
因しつゝ梨なりつゝ　室
辰のつくよ今もつゐ角力など　人
毎日燒を百も勤の氿　室
仮粉をも嗅ぐとさへかり　人
出る付き蘇る棚の下　室
公家方に惟て小袖きても　、
雅まよぶ出る寺の法会　人
一文の葉子も紅粉さる母の女や　室
貸傘話あきこの難所　人
魚洗ふなぜきを筆にはみ出だす　室
粉にても生の遅き勝り　人
稀にも十八日ハ稀に鳴る　室
坂への字にえゆる松間　人
麦蒔きて寒く肚饑く粥宿　室
生まれしれる夜の宵月　人
石も壁も紅葉札も貼る家　室
隣てもかり締くる猫　人
ぬれても居る中也隔の花け茶　、
瘡のよりて総量仕上する　室

舎羅がはつれに酒の香をかき　人
町くだちたる物見の森　玄
香雲に入て家鴨の眠りて　人
鍬を洗へは軒ぬるゝ也　玄

明ぬるを花散ぬる夜や来賓立　禾木
本の間に絹を画の被きたら　嵩伯
咲てゐる方高市の貝吹て　木
実躰らしう溜茶汲くる　伯
ちりてゆく月のゐる新暑　木
青きも秋く芭蕉やふる　伯
嵩居らひもちも広居て　木
豆鉄炮をそれかくされ　伯
生海の癖にはあまさる足結　木
出しのうねを取りて辻　実　伯
手もとも十るを折りに押つけり　木
あんやりか赤きに雪もれの月　伯
門別はかられてはかた合羽見　木
琉球人を一夜宿かる　伯
焼へいれて陸奉ることくだり　木
涅槃をとりてに唐書の建立　伯
若すに倉を桜出れ出遊　木
了西のとまを香き鮮る　伯
鶏卵の出に役を悪く下　、
上巾廿日てふくれ金舎　木
一お場にて分状の数多の　伯
蓑来月の冬のせる三宝　木
詩の影ちよきよ鉢なる杜若　伯
あかれくなる柱の木宗　木
暮ゝる力きへあさき病せず　伯
宿みなあやいつくりの房　木
大切な国の藤続の様たり　伯
鳴をとめ乎ひて涼以雷　木
網さけて桜川なる肩の無　伯
足踏みて座を出む霞　木
盗人をとあへ歩へしても過　伯

善野をおつれし酒のゑひと若き　人
晩く暗ちらす物見のかむ　宝
香雪に入ると家鴨の眠りて　人
緑を洗へハ粉ぬるまかな　宝
明る寺の花数をうつるや木陰立　禾木
木の間に緋る面の咲から　嵩伯
吹くて夕しきる京市の貝売て　木
宗旅らしく湖茶なくて　伯
ひつくて家ゝに月のある新居　木
青くても松く芭蕉の音もなく　伯
嵩名にもちらちらの居時て　木
豆鉄炮をそなへのきこえ　伯
生臍の麻に河童か足結　木
咄しのこれに秋の辻　突　伯
手もちて十日もおりに押へより　木
あちこの赤き雪なれの月　伯
何利にかゝれてハもう合図鐘　木

幣一味よそよく神風　木
秋は埋れし出芒扁近井戸　伯
月はのきれ作遅以首陰　木
名所は宮に川まつ野客　伯
拾ふたる底る麓の葛角　木
結ぬる葛ゝの神太の子炊　嵐月
給は萩さ萩の袖の末　嵐水
晴る亘又一芝りきらの〳〵　嵐丸
若の中ゆく水の清さよ　嵐光
うけやと誰荷捨る秋の月　月
秋ふうて葉はちる　水
鳥ら飛ぶ葡萄ぞのさ遠　丸
庵の窓のくれ時代さらの　光
又ともたせの猫の尻　月
風はとさえて雲僅かなる　水
枯たる人の魔ハ座さき田蛙　丸
云菜は風ふ花つくほく　光
ゆく春の宮海子女の錦遠て　月
下るは竹の雪しめくる　水
盃に天堂の燒の頃る　丸
釣船のうつ沢ハ愛く案　光
詠んる一首は歎を月や先　月
村と桃の寒は夕暮　水
香炯藺るハ走くもる之　丸
紙ゆるやふ暑なみの細　光
刀さはちりて眠る人の中　月
笑ひはあの迎痺のいきのひ　水
きよむ秋のすまむきの如く空氣　丸
菰く受は花えぬ金縄　光
村井の箒常くろき岩の階　月
鐘の一首はなし古城　水
草の戸の枝柱はりて空　丸
寿は砌の銭まくるつく　光
鈔逆萩に月出秋の色綴り　月
痺し神の鐘の錦表の静　水

夕汐に江鮒の光る橋のもと　丸
人を盗所に笠着りして　光
問もせぬに編出を薮らもし　月
手絡めのしも茶ぬ喫せせく　水
初むめの向よき方に咲たとこ　丸
秋のうら霧々のるはあし　光
松風の跡にゆれ〱牡丹られ　柝壺
打水にのこゝ光ふ庭の井　杜鷲
泥鰻先て狸にめくり退治せて　壺
蓑きらひの拾子ぬけ走る　鷲
初秋こゝのかぬ日暮の月の雲　壺
むらむらも河豚めし残川風　鷲
欽上手にお客世しる留り海　壺
冬にも逢おに戻る出し　鷲
若殿てはれ若まの五番　壺
義理にせまつて吹ぬ池実　鷲
金秋の暮つ人喫打の白お城　壺
吹とめて垂く鯨汐ゑく　鷲
金ある横逆尾鮭肩抜て　壺
丈婦表に往きまちる若留層　鷲
むちくりく峡く川西東　壺
高くも峰の蜜盃ほ月　鷲
北遊の雲跡つれも妻人　壺
張広にゐて枝柿を吹らく　鷲
義結て水飲ぬ荒ぬ林荷着　、
産ハさ江戸を杯ぬ鮮店　壺
帆柱にある本をかくせ代出て　鷲
兎の法血のり〱み浮く　壺
ほめたるをするのか旅すれや　鷲
関まつつく小菖蒲湯ぬ凝　壺
筋塀ハ扇さ作のたくらされ　鷲
送るさ陸若粲の盃子まり　壺
今贄さ菌の句しる縁島　鷲
水らゆる森墨いりの吐　壺
出ていれて振れぬもある盆の月　鷲

町まハ弾ぬ琵琶の撥音　壺
ありつくと竃留るる燈の火　鷺
見ぬ竹見ぬあやしき丈ぬ[illegible]　壺
近よれハ声たく凄き石佛　鷺
積ぬ及ぬ節ハの酔つて　壺
九分九厘蕎さげくの出端　鷺
植ぬ苗も取ると延る首苗　壺
家も出ぬ藪たし此頃月数ハ　琴芍
かえしきし嫁房は一つて　柔三
房悦さ在く秋の西吹て　芍
お人のの能く状の封しめ　三
宮の入りと定く限ぬ葉汁　芍
菩て傍のとある雨仙　三
客ふり広田のことに當纔り　芍
待さるて居るハツをそこつ　三
上の座を嫌ふ虎のかりなく　芍
河岸揚ぬく手も出ぬハまた[illegible]　芍
気もちハ太の石ぬ居つく　三
月に秋重の面居くるく　芍
行まいたぬ散ぬはる萩　三
嫁あく此屋客方は打つてれ　芍
ちとみてもまはありて持出し傘　三
まず飛ふ見ぬ附の樋の雪あれ数　芍
ふりかくれ茂る切印　三
遠か木葉ハ鉄と流て小藤苔く　、
律がしらりと八重のさんそく　芍
本町を流れてあくぬ境論　三
好きとて呼ぬ出る井戸掘　芍
楫の傍さくて根子鉢て居る　三
一つきんを瞽女に待かめにふ　芍
小都の八百とあれ有に堂む数　三
身極ハ戻る代りと并の紋白　芍
流れ群も遠く臍まある精　三
我もかりの唱に出役所　芍

町子八拂ふ琵琶の撥音　壺
あかつきも霰鳴る鶴の聲　鷲
見あけ見あきし太秦の風　壺
近よれば寒くも淋しき石佛　鷲
待ちて居ぬ節の日の酔つゝ　壺
九分九厘益さ[illegible]の[illegible]　鷲
植て置も形て延る葡萄　壺
永くも紫藪し世は月影　琴ち
かたへさしけり[illegible]一つゝ　柔三
秀り帆さ[illegible]秋の西[illegible]　ち
あんの[illegible]錦く状の封しめ　三
宗の[illegible]唯は[illegible]汁　ち
蒂て[illegible]仙　三
寒[illegible]の[illegible]当絶り　旨
待[illegible]八ッを[illegible]　三
上の[illegible]の[illegible]　ち
あ[illegible]の[illegible]　三
河岸揚ぐ[illegible]　ち
氣ちからひ大の石[illegible]　三
月に秋雲の[illegible]　ち
河ちぎれ[illegible]散[illegible]萩　三
嫁[illegible]方[illegible]打つ[illegible]　ち
ちよ[illegible]傘　三
七[illegible]の[illegible]　ち
ふ[illegible]落る切[illegible]　三
五加木[illegible]流て[illegible]苔　丶
棒[illegible]八重のさ[illegible]　ち
[illegible]　三

のけて重ね月見の芋を掘起し　三
香ハ見ゆる不実ハそくのれる　古
芭蕉ゟ穴越ねハ寄くぬ秋の雨　三
まさし若子に手紙ちへしまる　古
生物ハ酒によりても屁ひるう　三
大工もいてまず寄しぬ也寄　古
青柳に押粧へ中のたをや葉庵　三
ふくらん銭を橋を渡る　古
精の和し我も教室と並紀　味舎
蒼につまる月ぬひらゐ気　得著
細物も露十分に調へて　舎
若かなくさらぬ方に住居山　著
ふるふと手さし室んの庵の仏　舎
壊くも染る筆にむ　著
薪割のさゝの袖とる歩行　舎
不器用にしく風呂を焚もも　著
銚子の船かつて人に浮く　著
ひらひて旅の出る来る志ぬ陸　舎
越し石竹に水ふちに捲ひ　著
雀追ふ鴫の翅もくゑる月　舎
出て覚て自我偶よむ秋　著
ぬらぬ人の世さ茶碗のこける青　舎
ちゐやつと潰して舞ふ蝶　著
擾えても蜆も面のむ　舎
汲りかき畔か老菊　著
峰火の送の老も垢離て　、
屏風に寄る客の八重　舎
襟先の礬にさゝ和じ衣紋竹　著
ゆきもかゝる夕立の雲　舎
蔭沼の秋に水の通し鴨　著
嵩の代を志ら紅極子本　舎
要て出大て重古武鍔　著
面のしこ頃くしい行燈　舎
鋤鍬ハさゞらぬ隔つけ並へ　著

花ぬめて硯の模様けうさる　舎
むつくりと起る門に照る月　芸
やうやくにくらく鉦の済つく　舎
女房も蘇見合てうたの合させ　芸
うのふやくしきつに出所かる舁　舎
おつちりと相役にかゝる篭洗穴　芸
株一つ売に遊るさしつり　舎
みそ樽も下の隣り生へくる琴　芸
大のうし船も出揃ひし真　舎
宮情に祈る声のきる紅葉かな　宋人
人置ちのきそはの弥流　桃五
月の出も念まてる上に居眠て　古萬
壁を一重うしけき水鶏　人
田舎に何もあしぬ納涼　五
そよかぜ吹くよせる夷風　萬
懸（ケンスイ）人の無る償せ付て　人
秋ハ囲も作て節季に任その人　萬
舞ふて日の入るまて畑の果　人
売るとハ宮の船の合也　五
番頭済て向ふ文庫　萬
定例のやうに霽く月の前　人
行末たとへん萩の引声　五
小鍋の油混るゝ手なる鶴　萬
奥さめ款若宮法師きらふ　人
うかうかと揃まつかうかうきむん　五
風ハひらひらの吹くのいふ宮　萬
蘇山にくれて常生へ雲在　人
縁中寒て生絶へ行まる鉢　五
学鞋に喰はて湯もえひ松　萬
来旅を尋ふ御侍の紫子　人
浅の料越後を出る織色　五
見送ては緑奈の乃尭　萬
曲取て眉掃の鶯井　人
舟に載きか茂川の水　五

鉢叩の屋根こして重る塔の影　萬
伐子眼さめて赤い月見る　人
渡る唐守に唐人旅の内　五
宿あかしけに当花盛る　萬
内職をこゝろにかゝる下座哉　人
神信心を志てゝ小荷命　五
橋詰を出ハ雲のかゝ仏来る　萬
我おくらしと夜る法の中　人
居合きて志る志めにもの友　五
春の堤に飼ちまかし牛　萬
京の人に浮る花見の郷　茶山
葉ちらり茂る神乃森　菊三
猪に罠付る宵の月も涼　山
雉を膳余に立て粉を挟　三
畫ふみに顔るゝ春梢て　山
柱磨きを笑まに倦しら花　三
便りゆくハ鮒寄なきし歎　三
棕櫚の葉て畑こちまね蝸牛　山
是にやましてお粉の衣　三
出語にある葉金表錢まて　山
窯場の御法きさ雲となる　三
田も畑も極子まで流す雨の秋　山
声すかりしをかをか敷て鴫　三
宮古の前結小菊を貧乞堂　山
鍬頭結苫小町始まる道　三
去の湯事かくのなかるゝし　山
狗宿ねこて千年世をさかり　三
姫の出立祐の宛は鮮の衣　、
刀ぬいけて尓相納る　山
枕換に其年のそハ居なれ四季宗　三
橋座の巳人いかあつし　山
喰ひ乳焼さ本丸あくこ汁　三
吹きて法やら節分の花　山
法螺吹く安と後に旅房て　三

餘寒の屋根こしてゝ重る塔の影　萬
夜ゝに眼さめて出し月見る　人
渡る雁京に居る宵ハ旅の内　五
露ちかく升にて蒙花越え　萬
内職をこのてにあたる下座敷　人
神信心を志ても籠命　五
橋詰を去い安らかに集る　萬
我おくらしと良る法の中　人
居合きて志ろき志ぬも世の友　五
表の塀に飼ある川牛　萬
京の人に嫁る器量の娘　茶山
菜きうり茂る錺乃籬　菊三
揺に器付る宵の月も淋　山
蕉を風涼に立て粉ある扶　三
畫ふくに顔る寝も表持て　山
柱暦を安子に付しらん　三

[illegible]　山
僅と傳ふ六館あ若き顔　三
接欄の葉て母子ちまね螺那　山
夏をよまて不鮮の色　三
出語に寄る東金衣龍舞て　山
宗僧の海法もさやうと知む　三
田も畑も種子あき隣分の秋　山
青あかりして夕ゑ夜寝て鳴　三
宮古の香結ぶ薫を負て來　山
鍬額結着小町結びて通　三
杢の消妻かくのはやらん　山
為[illegible]

つまさき縫かゝる袖の綻ひ　山
焚物に侘もゆかる壁の間　三
水こほる路の夜くらき　山
篠くと月の篝けり足盥　三
紫南の客鶴の一聲　山
一向ハ海未まで稲刈て　三
来近江の錦のきくゆる　山
隙のまで出偏る紺仲居　三
癖の業をあつくと嘘ふ　山
去のまに浮て借切る茶筅　三
翌も得る紙なしまさ其　山

庭鳴れのして蘭れかり杉の雪　伯遠
篝きつかより雅く浮あそ　禾木
岡村の昔か荷云四扇来て　遠
折角歎く吾風足ゝのそくる　木
言の葉し鋳ま月の萱ゝり　遠
[illegible]　木
松しろくも蝉けゝかわいか昔　遠
忘るゝ遠ふるてけるり伝ゝ入　木
都聲をきれいなる甚く四十路　遠
両ふるも形し岳ゝ恋結ふ指　木
照くんゝて宮まさ其四の氷東　遠
櫻の枝を絹みけふ帰　木
聲のうとうしのよきく借先　遠
うろくゝへてる見て猿の曉寒　木
猪口の枝お棋に浅ゝのやか　遠
上物の土もうかゆ旦いてる精　木
なのるれば寄さ火中ま月も出る　遠
宮魚洒ときう好み簾川　木
花耕をしくも澄流の大掃除　ゝ
裸自腰てまで風邪引く　遠
いさゝきの都るまさの冬舎の　木
さく身きの鳴る衛ゝ三の居　遠
数練生の時ゆわんのゝ足掛ゝ　木
いつまでも暁くまで其数　遠

常夜の燈淋しく一羽鴎の中　木
力くらへにまけし面ハ入　遠
泉殿て禰宜と語る事あまた　木
極楽へ行給ひぬる形ある　遠
花赤く鏡向ひて月の夜寒星　木
印の竿こゝらかくるを帰　遠
残らぬ穂刈穂さる葡萄棚　木
入院の娘は古ける緋衣　遠
状箱の鏡失れし文もなく　木
折くまかる軒の帘の尾　遠
本気興りけふハ也能宿　木
嫩まよひつる雛の小さき　遠
宮女しま遊ふ寺へ初時雨　屋富
積りての前へ女の程き月　芳
望の吹来る網舟漕出て　富
拜くゆきくまつる秋雨のさく　芳

夢はゆるまた霧の晴際　芳
恋へやるとて磨打山の浦なりき　富
剣箱の鍔絵落る梅干　芳
赤めきれ目ふくらす頰を抉りけり　富
さらさらと結ひ結ぬ奥向　芳
つるへ毎に水玉流する池の面　富
瀧上りの鯉の勢き盛なり　芳
本棒の女衆を業る露の月　富
家く篠一宗ハ露気る迄　芳
み京の下楼あかしつる恋こゝ打　富
状投出してゝる一相御座　芳
色は鐘くなる結内に文一つ　富
つらくと帆の淋しける素風　芳
まきさるも糀の先生嫁節て　、
のるやさ若の森根よくねる　富
此ころの教を孫あ将棋ト会　芳
送り花仏され墳看祈り　富
松山を日会て寄き雲の峰　芳

常さの跡遠く一相庵の中　木

力くらへいさんまし飛入　遠

鼻歌て舟中迄も客あしと　木

棟梁々々持あれる形なり　遠

桜花残りひの月の朧墨　木

旧の手のらききくる夜帰　遠

帰るくえ種利鉛する菊蘭樋　木

入院の按まし夜寒る錦衣　遠

状絹の路失れの文亡て　木

柝く古けば鋳の帯の尾　遠

米負迎り味日ハ豊稲穂　木

漱かけまねきへる針の小さき　遠

宮参し淹る老ろ人初時雨　雁富

積るらくの雪んも朝日の桜き　月芳

望の欧夜る網舟漕出て　篤

拝くかきまする新田の出して　芳

崖ふちに水のありも猫籠　寓
和傘のうちにも寂しき人　芳
箱のうちの折れし鱗海も何ぞかし　寓
汐風に流るゝもやさき棚楓　芳
細に枝の角ぢゝ入月　寓
川蝉のとりし大急く機処　芳
遊まうる食時り路　寓
取次の猿みしのう立出て　芳
もらひて降出し仏光る前　寓
垣越に箔打音は吹く風　芳
遥てみかゝる宿のへのさゝ　寓
水青の鱗連ぬ岸の筆雲　芳
かれくまりつゝ雛の霰行　寓
風やみて光し掃ぬ落葉代　芳須
ありに抑るゝのうつり霜解　得蕉
雲深く鳩ハいつも木の子ニさへつる　須

一志きり暮りてもちる宵の月　須
まくかる摘子芋の渋もある　蕉
秋の風身に公人の床がまり行　須
さゝきの遊出て古寺手を打　蕉
絹糸の古袷来や遊楽き々　須
きよみ字に浸す一さら　蕉
もろくと粒雨蝋燭雪　須
まるい十なるかゝる造化　蕉
飲みのて丁度来るる海耳　須
古鞁の青に浸める鳴　蕉
まつかゝる渋息鵜も驚し　須
簾子むて出傘法古骨　蕉
も巡る二三日は人あとも　須
蒼きかりを薪る摘し菜　蕉
糸宮の運も殖ゆる仮宮　、
濡つゝ為辞てとかく療薬　須
時町てよく仏まつりし盛の葉　蕉
垣のもつれ氷る角ゝ迄　須

庭こゝに水のすゝむ蝸の能　富

わ傘のさゝれてゆく宿の出来ん　芳

蒔まの煩て鮮海も河ゟ　富

浜風に染るもやすき檣楓　芳

畑に稲の風ぞ入月　富

行旅のとゞりし火急く機織　芳

遊まつるる食時の路　富

取次の勝みしの立出す　芳

もとゝ降進し仮出る前　富

垣越に綿打音も晴し兄　芳

匹ゝに飛る宿の入のさゝ　富

水青の鍬ゑ返岸の色集　芳

かゝゝりつゝ鶏の露行　富

風やんで荒れし掃ね落葉代　芳頂

せうに禅るのこゆる索解　得善

蕎法場にのりも木口にこてつゞく　頂

門構さへもあるそふく荒くなり　善
東錦しらふ川も下着　須
物食も多いは女房は未た出歯　善
かり垂纔も世俗手垂　須
是つのへ庭へ流れも長屋連　善
近所出行手つける提灯　須
来るも来る月の素麺体也　善
秋の出水は遅に引やう　須
逸遁でも菊の隠居の名は高く　善
東のたか取は小躰しき峯　須
法方のよかりて石の香は泊ぐ　善
かけ合のの出来る麹菜　須
商ひも心をこみての料理付　善
足付なくふえてそろふ膳子　須
香わしく千れの雨や梅の花　由之
角鉢とも茶を賞は古庵　雪鮮
梅のさみ茶か本とおろし住まて　水
一つきのくるましくる杭揺　衍風
椿餅のよかと呼れる月の秋　鮮
そよ〳〵と世話手添の吹かる　水
宿替て夫婦の縁の中む逃　風
雛子へゆらく吠は百遍　鮮
小家手狭の床は唐さらし　水
口家のあつく井は水を釣る　風
熱飯の出先思ひて出る男　鮮
二度めは旅に付さ慈くせ　水
俄俗肩の落も短しかまて　風
何かなき宮を蔦の出哉　鮮
秋か茶茸の年貢も富しき　水
つまみ食して早も牡丹餅　風
頭毛なき遊ひまてむの木　鮮
閑はしき床の性静まき　水
八方法流のあかきの去家へ　禾本
ゑされ花も花ちくへ柳れ　伺遠
涛のあ火流縁きぬ城の内　由之

引ぞり起て膝めらぬうくく蘇　本

筆紙ふとりかんと遣て数読　遠

火串の端へくさ汁路也　之

傘もさぬ人ならぬ通り雨　本

結納月のを置いて錦壺　遠

かゝりし帳からうちも姑へら寸口　之

為て鑄の月さ鐘の文ある　本

木兎の甲らがく軍店の月　遠

石碑の屋根へ乗たひらる　之

算盤ならぬ合ぬ下り薬　本

財布さびしうせて稼ぐ　遠

つひまると遠やへ婚遠やの声　之

土間に茂うすむ狗背の陰　本

小除つき一本むの恙さうり　遠

人の出入坊志のきこうれぐの　之

若葉摘み兄さん墨田川　護物

[illegible]　陽

兄菊一の二紙ち義咲出て　物

ゐつきりおうて人の大事る　陽

明月も近く薄積をあらさせる　物

虫も鳴あき庭の夜の未　陽

浅漬くらふ程ハ隅のよく秋の風　物

ちよつとハいつもぬ挑灯をともる　陽

杉菊の主人をと伸る土地のよき　物

花がちとむつとうゆう高梟　陽

冬之来さやくほえる獅子の面　物

かうりと面ななる立手をむ　陽

兎角あるくに植田の月ら晩　物

井八目近くに茸ふ咲く垢学　陽

為飼ひに小世話のやける餅搗抹　物

海の味気をきつまかりへ人　陽

霞つきゆうさ結付しむの門　物

志水らく東風にそよく草薮　陽

雛遊ハ今宵の荒き丸くを　、

蛇の吉珠嘴ゆてろまなり　物

隣から隣へ風雲を味ふ来　陽
雪わける蛇のふくれハ静まる　物
まつ筱に根の高しぬ病者　陽
人目のみ見てゝ身の出世成ぬ　物
注も志ゝぬ是清の神の御合　陽
舟かゝり打て一葉へちる　物
そよぐと月に鉢る猿の上　陽
蒔絵の垣を茂る秋色　物
情けの花つかて濯く窓風　陽
主も空しく山水様姻　物
幸公の内ハ味方旅をして　陽
つくさき樹の陰に明を秋　物
峰の峯も嫁に男の味哉　陽
何事の身をたゝる神門　物
諸先々見ハ君臣が姓ある也　陽
陽るはきも出しぬ鵜鴨　物
隣子や二階さしてありき　水光
ゆふこの秋る猶虚の陽炎　仙蕉
鉢花ある鶯一枝驚かして　光
又仕驚る夕春をおもて素　蕉
脱雲ハ冷さより今日の月を待　光
飛きりり味余きも秋風　蕉
生垣の飛ハ躑躅き落水　光
ひとり蓮花を起こして起る　蕉
嬰のゝ寒も志くる様々立　光
漆露をひきん東田を行　蕉
生し声も成ハ子云やう喜撰ある　光
うらさく解る濡子の細筆　蕉
古池の夜雲ハ清子周流し　光
見の飛たりとはもよれ蛇　蕉
方丈の扉へ扉風も言廻し　光
丁見とろへて羽根苗へる　蕉
左の篭主世等子様も柳やうま　光
葉の咲の猿る真瀬苦　蕉
川留子法座とくろ生きて　八

擇る俳人風客を呼ひ来　偏
雲かゝる嶋のふもとは椿なる　物
まつ殿子根の高しぬ病占　偏
人目の為ても身のたやすぬ　物
誰も志らぬ老漬の神の付合　偏
舟から押て一葉の出る　物
そよくと月に架る橋の上　偏
蔓ぬる垣を茂る朝良　物
情坊の痛つゝて落く風　偏
主は空見ぬ山か捨畑　物
李公の内は咲か旅をして　偏
つれなき懶の隣ま呼秋　物
岩の家も娘も客送分嘆教　偏
何地の用ちたりる御門　物
諸先は兄は兄の弟もむ　偏
傍る乃ききも出しぬ鷸鴨　物

うりくらゆる風には鶴芝　光
燕一口呑でおもはゆき四半味　算
横縞の着の袖くし口くる　光
古屋をつ令〳〵ちと〳〵ついて　算
夢路ももろて針箱の上　光
きらり〳〵と通り雨ふる宮まいり　算
むらよく葵三毛の汁鍋　光
そこいらへ人の法則と頼まれ　算
百の銭打と六斎に出る　光
様子のむかくては借る月の比　算
汁めく唐のかゝる渡場　光
本寺は萬福寺の松林の景　算
襟の〳〵とを隠し中ならぬ比　光
やみ追うて生子の太皷掃おさり　算
ねらくも旅の事宮をさる　光
此菩は古一本で暇やらぬ　算
妻の追このうは傘ちらおし　光

玄の木はり出るや刀持所　高
籬としこ法事は月代　杜只
繪で鳴も吹梅ににて咲て　木本
手拭して見る寒の焼列　高
二階から浄りき風の吹込み　只
後ろ襷る大釜け下　木
楊屋の地を本綱は本因幡　高
中の大ての卦もあり紐手　只
吉田屋の傘さしてもとちと　本
花をば世に佗る人か岑去　高
賞つる天孫の旅の森うまり　只
屏風たてくらのそさん〳〵　木
お通りも猶の店にる町の内　高
小縮もかりの錦夕に来る　只
韓を売て菊見に済む合　木
なほりて古風で香々き座下緒　高
花陰の幣を垂木に結ひつけ　只
困ん水をしつはむ蝸牛　本

いかくこゆる風には錦着　光

寒一日照てあら雪霙は　篤

横縞の着物の紬かまへる　光

出居よりも人をまつらむ帰りて　篤

み紙をひまなく針糸の上　光

さらりと通り雨にる宮まつれ　篤

ありとあらゆる黄三線の汁鍋　光

そこいらへ少し法刹を寂しき　篤

百の鏡りを六高に出る　光

横をうのとかくまは月の比　篤

汁めてる屋の下りる渡場　光

本当は薫積のくりも林果　篤

種の汁そを傍出まかは　光

おさ過ぬ先の者を掃き　篤

ねぐらも鶉の出合を出る　光

此あたりは一本づつ暇やるに　篤

妻の迎ひのかほ傘もちて　光

あの木使り出ぬ刃持　阪岳

簾もしまは月代　杜若

娘も娘も嫁ぐ悔いて　米木

手前しまる書の焼刻　高

二階から津をきる堤の端近　若

淀る蝶る大鷺は下　木

明色は地を本綿は本日摺　高

中の太刀へ春は組む　若

吉田屋の傘さして都と　木

なさ程に素似る人かな云　高

安かる大絣の縫の糸ちあり　之

屏風のたたんでの手をさへ　木

お通りは緑の届る町の内　高

小網をかへり新夕に来る　若

鶯帰る雛ゟくふく猿の下　富

紀尾井坂のら猿の吟出し　冬

大風も相腔暈ゟ小挽町　木

梧あらふる寺の物入　富

同経の咄あきうに咲かり　冬

見ても哀き堤極に酔　木

漢柱のよふ流き流を亀を結　富

ちりち坊主持つあろうて来　冬

咲こてやら色好み咄の気之　木

一名ひら孔稲ちり立枯　富

月の宿柱も光りうかじ　冬

常留炭子机のゝ写　木

精をも志て那先うり　富

訪き流星て法ふ泥足　冬

蜂かくと東田伊丹の花をへ入　木

のまゝん好薮の白ふ降て　富

行列も早く鳥ゟ出墨　冬

東ゆかく外出もし根　木

大池や鶴の一声て繊月　五株

舟さらく汐満への一声　興室

藪入の噂てまゝよ他所の遊　株

床屋の風呂は又も長たり　室

如月なる釘ハ打込吉祥　株

寒月一すゑうら蔵の醼　室

疱瘡は老やゝと雲る萬條　株

教法門を抑へ氣癡ひ　室

鬢の毛も振て程の宛風　株

折ッさしのこゝ芝枯野人　室

八階の牛大黒牛も順達て　株

拍子ぬ芋をくゝ月る音　室

月みんと男も座敷を抜て来　株

不用意めの風や寒さ　室

枝持木の隙ゟ寒ゝ俵　株

漸ひらくをひる操さ　室

散もハ花ゝて静か新朗　株

鷲鼻て痒かしくとふく狭の下　富
紀尾井坂のうら絵の時出し　呑
大風に初眩暈ある小挑灯　木
格子しらふる寺の物入　富
白鶏の咄寄きりに慌てたり　呑
見てもつ隙ある壊縄に酔　木
慶松のよこ流を角も結　富
まつち坊まれつゞあくて来　呑
咲こてや気は砧の気之　木
一茶いうれ稲かゝ立枯　富
肩の宿粧も老けるとはし　呑
常盤あるて机のゝる　木
精をも志まて形たゝり　富
淋き流まて洗ふ泥足　呑
咲かくと寐田伊丹の花を入　木
白まん菊の白ふ隣まて　富
行列も果てゝ立る老婆　呑
余所ありうるゝ直まて根　木

大池や鶴の一声で繊月　五株
井さらへくゝ河のつゞく喜　芝室
数入りい咄て痒かる他作の送　株
床屋の風呂も又も出て　室
ぬけかゝる釘ハ打込吉柱　株
年月一言けし蔵の鐉　室
疱瘡まやもと霊る萬像　株
荻ほろ門を抑く気障ひ　室
髪の毛も抜るゝ程の病風　株
序ゝ書しのゝ芸枯れ付ん　室
八朔の牛大虫を牛も馴まて　株
抄子の芋をくれる岩　室
月の入事も男も床素を拔て来　株
不用意のゝ風やゝ客　室
桔梗朱の朝寄ゝ時儀　株
潮ひとしきひる様ゝ　室
散もいれ荻て静か秋の湖　株

うつりかはれの居のちらしかし　室
尻からけ算用合ねは若年貢　、
袖まくりて仕舞ふ針箱　株
ちら〳〵とさし扇子を出て若女主　室
九五六日行の無実說　株
寄合かて遊ひ今宵は田植酒　室
納豆に仕込一俵かり豆　株
森下の右左から渡し　室
まち合せして咲る賤さき　株
やの字より誌ねの世る松曳は　室
筆結ひ出し売の隣る橋詰　株
行く程ゟ夜帰るく月の出て　室
二尺の窓は稀なる國　株
切ぬかく家出して結兩狀　室
痛ひ悪寒に蘇符を塗る　株
様へ口付て行当は撫備積　室
打水家さきも新道　株
ゆかしくは物富の蓑さきて　室
こしかけ茶屋の水売家ぬく　株
茶摺をしてで世まで浮し結ぬ　氷狐
薮に水掛結行る苫のひ　由埜
帝しる義を柱に掛戈く　狐
つき〳〵石を返し寺なり　埜
篠山の月見はこのむねの汁　狐
忘れ行く筆に袖も下涼　埜
無稲のよ夜もてはやす賣　狐
せの歯すりる細の足輕　埜
商をふるふ揚屋番所の闇手形　狐
いそ浪もよく晴ても世せ　埜
宮中紀の琴ハ者の雷の降　狐
是へかうかい世うらゆう大　埜
川を母の娘をせかし身の秋　狐
おとこまのききつす梅の暑　埜
沈筋ひく梅に鳴音ゆる宵か　狐
納豪の前以四ツ苗殺　埜

うつりかはりの席かちるなり　室
尻からけ算用合ぬ海苔年貢　、
袖うまりて仕舞の針給　株
ちらくらと扇子を出して形見也　室
九五六日何の無実説　株
寄合ふて遊ぶ今宵の植出　室
納屋に仕出一俵かり置　株
森下の友右衛門か呼渡し　室
打ち合せして覚ゆる賤さき　株
やのまつり後話のせる女房は　室
筆結ひ売の綱の桜積　株
行る程に不埒なく月の下　室
二人の宝を積んで〳〵國　株
切ちく宗旨く結局状　室
痛ひ衆園に藥鉢を盛る　株
株へ口付て行客に掛納稽　室
打水寛きさ茶新筅　株
やりくりは物富の暮さらさら　室

むかしの人の形像も笑ひ顔して　狐
捆絶への下に暮をまつ門　楚
雪ふりぬ宗鑑雑も豪耕　、
咲こさ中のしにせてる茶畑　狐
近き修て宿にあけし旅支度　楚
四五ねゝのこる坊の窓またひ　狐
植て来こ方もあい井の底すはひ　楚
生むとまろふ小を醤蔵の入門　狐
咲き段草の線紙をしうりて　楚
さくり大きぬ肴ゝまくあき　狐
見世のるひとつく減る茶海　楚
佛座嶽の塔をしまる　狐
育る年思ひし月の入のとり　楚
茶台山神にぼくるま辺　狐
鳴虫も愛ゝとうつる末枯れ　楚
さくそひ合せて網ひきに行　狐
先祖出ひ地蔵の井戸を堀下す　楚
てらの供を待暮す霧の春　楚
継ぬ花もし回をあらそふ　狐
心安き歌をつらぬる木像主　禾木
楊の木ある藪こし行月　麦雪
きぬしとさる宗旨の数殖て　高人
よは涼ひに茶船漕出　木
味ある峰遠くに行大掃除　雪
名を出す用物時くゝ宿　人
一兆人子井図の物秘風　木
芋雑のまゝて帰宅仕ける　雪
隠棲して持せる茅庵　人
菜の袖をて姫のふ蔭　木
向ひ海きぬ金しあつて巻　雪
瑞ち見えぬ襟のふこ宗傘　人
新宿へよふ月の雲の井　木
竹取て植る籬の初茸　雪
町なとみまへ直す毛見の使　人

むのころ人の所作も笑ひ催せ　狐
栩鈎の二丁藝を才の門　埜
峯打ぬ出雲鍬も豪耕　丶
咲ささかりに見せる苦茶畑　狐
延さ抜て霜に成し旅支度　埜
四五ねいのゐる坊の宿をかひ　狐
棹をまつ方も我い舟の減らかい　埜
終をとまふれ小花瀟姿の下川　狐
咲ほ婆蓉の御殿をしうるて　埜
こゝり大きな顔さもくあき　狐
見せるるひもとつて減る茶海　埜
傭屋敷の塀をしまる　狐
育ゑて見ひし月の入のり　埜
帯ぬ小袖にかゝる手近　狐
鳴虫も愛をうる末枯に　埜
さそひ合せて洞ひきにけり　狐
たやり出は地蔵の井戸も埋すり　埜
[illegible]　狐
てるい浅くまゝる、沼の色　埜
鍬ひき先し田に霧くらし　狐
明安き秋をつふやくや木像立　未木
柄のむある数こし法月　素雲
老ぃ秋をまの茶碗の数張て　高人
よれ候ひひ子茶船傭也　木
味る弦もさ遠くて〃大掃除　雲
為法出家法博りふとまか宮　人
一兇人年中国物法花風邪　木
茶筵のすゝん陣笠にくけり　雲
隠擬して持せせる芳庭　人
茶の袖はきを婿のふ路葛　木
向ひ海きく金掌につつしても　雲
騎も見えぬ篠のふさ家峰　人
[illegible]　木

新節宅の垂井子のくらむ　木
骨堂の大門のたぬきの沢　雪
寒みしまるや宿基の村雨　人
身やう見えてとらぬ壬生踊　木
立場の女の別るゝ聲哀　雪
看板はなくして素袍着る印切銭　人
立派なつもり鉢が社常　木
眉ふくらて髭はひやうとなひく雪　雪
萩盛さく咲しは散もおぼ流　人
額寺の地割ゆるきて払ぬて　木
雅文よみ手書ぬ山背　雪
枕約六のひさきに我世常　人
居合も旅の手に痛て有かり有り　木
旅しる弱雀の床もる今月秋　雪
糸瓜の皮を身に張て干　人
笑て来て浮世番市の升　木
早風て消る神の灯　雪
よき水は二三杯宮合に一夜は　人
代々のふるをあめて[illegible]　木
双日倉の積を書古の本　雪
三たびや秋と考行の雲　人

浜名ゐのひやゝく来白　枝翁
まちく雲の峰つくくて　梅暁
手しき類きさ骨折て　杉夕
とほしち猫来るかしもる[illegible]　翁
種音合たかり月見の峰よりれ　暁
ゆるきて峰も虫も拂さき　夕
庵やくも若参てり門集　翁
生身きれ汁の過　樊　暁
剃ゐん姫を見世て　夕
再のゆ咲かりるゝ人さし　翁
二三丁号掛所を[illegible]　暁
岸のおくゝぬ雲売の月　夕
頂ゐし盃字赤を植ひろけ　翁
月の旅過られ鹿く摘焼　暁

秋茄子の垂耳にのくもる　木
骨牌の次門のたゝぬむかの花　雪
音みかゝやむ妻の村雨　人
引やら兄やゝとりぬ壬生踊　木
立場の女の別る聲昇　雪
肴板にうけし慶物る印切拭　人
立派なつくむ錦家紅葉　木
眉なく暮はやゝとなひく雪　雪
秋風そよく吹しゞまもおそれ　人
額堂の地割のかゝ柱脚て　木
雅文よみに書きぬ小宵　雪
枕紐八の父なるにも新世帯　人
居合も極めを痛て左りの方　木
放しける雛雀の床る夕月秋　雪
東瓜の皮と尻に張て干　人
男て来てたかる市の升　木
畢風に消る神乃灯　雪
上取次ハ二升宮合ま一足のし　人
代者の身とおめにて後宮に流　木
豊日倉の積かと書ゃむの本　雪
こわれて秋と志行所の露　人
ほさとぶのひやゝく末白む　桂翁
ましぐ雲の峰つゝくゝ々　梅暁
芽しく雛なきま胃わて　杉夕
と限も端来まかしもつ日影　翁
顔音合まかり月見の障よりの流　暁
ゐまえて峰を出も淋しさき　夕
なゝめくも若葉そうつ繁　翁
生身きれな汁の過楼　暁
用らし新て嫁を兄まゝせる　夕
背さの伊吹とかゝるうなさし　翁
二三丁思ふ掛所を隠まし　暁
岸のおくらぬ雪宮の月　夕
没しし盃字赤を植ひろけ　翁
茸の跡遺され處く橘焼　暁

糸鮒の市に参銭を賣さうり　夕
生得好む酒を呑きらの　翁
さし出る松の覗込衆の庭　暁
甚の書以ころくの仍出版　夕
小塚城の柱を見松君さ出　翁
猫目に門も明ぬのけて寝る　暁
食もかなくて飛るぬ盧庵　夕
株栗機に柳れて多く　翁
手紙良く座してくれ樽に稲り　暁
寒の入ぬらも減を頭巾　夕
鍛錬中に何母もやくも流行兎で　翁
終る夜りをたらふ碑文　暁
物楽い夜舞て猿い町地画　夕
表に新の冬ゝうけ香剃　翁
大根出ぬ月るまに八月も浅　暁
生雑い汗もを寒鏡まで流る　夕
眉匣なも紫赤も用し渡る　翁
名そへ立けもめし後の入る　暁
桐箱の大切へ柏掃手しいかり　夕
骨正月も老人の入のあかなし　翁
花さ社の中ま移る大の台　暁
猫活の句ひの迷る所縁　夕
よし野やこゝら敗の入下に　禾木
八重さし東風の空きき初夜　文昇
旅疲り寝くり起くり雨中遊　木
熱茶に汗ま出るぬ小肴　昇
松の手ぬ行灯とも夜月の雨　木
小路へゝる白山本陣　昇
乳鉢も大殺し鳴る虫送　木
三日子にはまおくる盃力忘　昇
味の奥をたけ鳥ぬ戸惑さ　木
聖丹札中の体ちむに泊村　昇
水乃くと井園の節の花で待て　木
お旅庭教の目くの面壁　昇
河の入と室の月まで寒の入　木

東吐ふ落る池の底鴨　昇

新しき畑さらひの傍ふ杭　木

早稲こふ芽葉内出る世　昇

ふじ紋禁て能き西行忌　木

未刻ともおのゐ後の君目　昇

一里百だらくの待るに参通　、

来ふやんて都寿が押くり　木

宮情にも暮さ残の懐にを交り　昇

江戸もよく芭の蕉翁　木

櫻狩一術中の嫉り打あるき　昇

遊ぞ乃二人春大早八みし　木

お對て船櫻き出る川涼さ　昇

暖ひ笑ひに嫁り子むる　木

嵐吹る樒の程前を御席に　昇

吹く起して古うろ衛立　木

味表と突吹月見の二階数　昇

庵今や七あい能勝を折　木

何香わるをそれ乃顔のさま　昇

暖ふ伸もえ船中の鯖　木

手帋のやりとある古銭紙　昇

かき上ヶ泥の冬さき隅を　木

夜のむかしのむ子為帰て　昇

宮薮こしまの明る海苔の末　木

雨水の淀よせつけぬ清水ぬれ　隣高

女貞（サツハキ）さく垣の内外　大鵬

禁くはまる薪よ一日炊を留て　高

小嫩をちれ先生の出行ぬ　鵬

暁の肩堰より末の名川尓　高

ふけ冰を月て冬ちくある　鵬

娘も画おけつく菊の世話　高

祝ひ呑子ハこそと気を張　鵬

凍さ彩る藤さうと赤くる　高

ちらく空ののくそ雪羽　鵬

かそくと念仏唱る風呂の中　高

ふ路刀ハさらぬ小路　鵬

よひ月に鐘のゆくゑの何も遠　高
二軒寒く畑千反有　鵬
綿の実隠れをくれて勤出　高
漢の性なりてゐし嫁足　鵬
叱女の待つ限るむ撃　高
伏見木幡のいとゝ遠きぬ　鵬
営す地形普請の縄張て　ヘ
後り剥くる洗濯の糊　高
月のくもち大概あれ不自由　鵬
きゆり氣違てささぬ盃　高
階上の揚屋に何の富をよんで　鵬
濵の都そり稜をのくとする　高
土用芽に種香撰蘇の一り　鵬
眼をとりあふら菜を飲はけ　高
紙子浮長男にかし洒落（ニヤ）く　鵬
やきしくりめて出きるやすみ菜　高
秋茄の町幅廣き船の月　鵬
[illegible]　高
角力場の湧かき溢れ峠の旋て　鵬
やんまり角への世くる鉄把　高
堅様に庭の杏のいろは付　鵬
売結く仕付よみ後に来る　高
尚す其紫の花も咲揃ひ　鵬
此りとあれしに春の蝶り　草
常寺足恋せぬ清水名　来木
萩の裏葉に薫る山風　百丈
継がの良体ちも寄婦を　木
戒ら徒刑も精の上く盃　丈
秋の田もかり月さ湖南側　木
老く雨霜て秋乃暖程　丈
鬼灯のにひ子桔梗の実ゞ咲　木
二人一渡子借ゐ乃男子　丈
めつきゝにあれてよき従妹風呂　木
小夜嵐のとよめる田の湊　丈
馬の背も車の上も土大根　木

よべの月に鰭の河原の何も箇　高

二親なく畑に人なる　鵬

孫の手隔気をとくれて勤出　高

漆の性わりなき妹兄　鵬

只変の待つ限るむ簪　高

伏見本情のいとく遠きね　鵬

鶯に地形普請の継信て　ヽ

後く剥くる洗濯の糊　高

月のもち大概あふ日雲影　鵬

きりゝ志過て告る盃　高

御上京揚屋に何の客をよんで　鵬

演の如ていわゆものくとする　高

土用芽に鏖食様蘇一り　鵬

眼をとりあうら葉を飲なり　高

紙子深長男にかし溺ろく　鵬

やきしえの中で出きのやきみ菜　高

秋いろの町幅広き船の内　鵬

甲子の夜は忌度かゝる雨　文

在々寺観音寺の祉表参　木

くせなる針をきうて解きけれ　文

屋の内せまの指に深くの一ケ　木

山深られ先帰る鳥啼　文

末遠き一字般若の供養塔　木

慣て浮せるくさもちさき啼　文

急ぎ舟の旅ては孫八尤兵衛　、

常息やるを清きくみくのつる　木

捨碁もと錦々盃に生延へ　文

二階座子に猶見つるちから　木

釣人も来ぬに出羽の寺へきる貞　文

眠らしき顔を眠られぬくらゐか　木

御とき神もつれ梓弓　文

若らのおつきと糸の波羽ふ　木

村尻にて素なる宮今井左　文

吹くわ晒てふ眠る風での丈　木

御力の川先への茶々まも　木

清出て居所新海の棒ふさぬ　文

国をいのうけてやめる叙黄蔵　木

一かゝぬ炊居中な老の粋　文

精るやうに田螺帰る　木

旗て遊ぶ社の前に餅売きき　文

犹を市子もとりとしらる岩　木

程も程く出たる宿や身をひる舞　宗人

名遊ゝ庵る居に遊風　岩推

遊縁の稲り綿ゝ出て室かんか　人

かくゝまかり娘を凡ん参る　推

宮ゝ橋を咲せて惜さよ住居　人

湖子離きて寺に婦二子　推

下居に海添て無るよ居合わ　人

下りも国し人此国船　推

ゑひまめの入際のもろ死ゝゑ　人

扇所の枝をむつまれるまる　推

岩橋金かりて嵯峨の想思様
まくやむらさきに月のいさよふか
松茸の稀に逢ふ夜と鐘の道
笠嶋への茶店の餅並
散乱をしてはいてする嫁の友
よれはをよれし鋳口かるむき
む咲て名の出たるまて大小屋
稀代にても情よみ川 鶴
たくさに縁て八重の語底り
家らしの霞まかに茶湯
は君しや此境界を此断ひ
木鉢つゝみて風掃出さ
夕顔の棚よも縁る一ゆくち
衣裏整ぐ夏乃暑
仕さる定居て風眼何となく
むさ苦くさみ女の袖手習
雲隠八鐘の声の法嵐聲

月にいそき引かれ未練夜かさ
経文の旅に眺の華のさけ
難義てもおへきのいふ主免
さらの袖の芭蕉吹くく
古筏ふゆまくあまに逆らひて
柳の紫もちりし鶺鴒
試の茶にも咽さ下屋敷
象絶えも遊ふ寸ろ四五足
寺たる枝やそ寺も初紅葉　直言
初ざくら見る舟橋の月　梅翁
願はする追風の帆つれて　紫酔
素足洗うてに掃除志付る　其月
新婚の室腐の翁の風を待　岳路
素好み曇るを焦に枝炭　立
長生をせる君子に阿弥陀経作意　翁
藁葉売の帆を去つ酔女　酔
おしなめく丁児子店を打寄る世　月

宿坊金かりて境の恵器積　人
ますやむらさき月のゆさよふ　樵
松前の様に迷ふれと銀の道　人
生蔦への葉も露の軒並　樵
撥乱をしてたのむる嫁の夜　人
よれなきよの外し銚口かうむき　樵
むし暑て命つなぐるきや大小屋　人
稀代はてくの情よる川端　樵
たくみに来て八重の治療　、
家ふるの霞にかゝる茶湯　人
浮名しや此境界で此断ひ　樵
木綿つゝめて風掃出去　人
夕顔の棚にも縫る一ゆらち　樵
衣裏称り夏乃鴬　人
浮き世宮て眠目ほとけ花　樵
むさ苦しさよみに人ふ結び子留　人
一
雲霞八鍵のまなこは嵐聲　樵
月かんに割に出ち宗治かき　樵
終宵の旅子眠り笠のさく　人
難義ても持へきものい手之荒　樵
さゝやの祠の芒穂ゆらゝく　人
世替るかまくみて逆らさて　樵
柳の紫をちらす紅鶴竿　人
誠の茶手も明さ口下屋敷　樵
筆絶えも遊ぶふす写四五足　人
去年見る桜やと年も初紅葉　直立
そゝくそゝる舟橋の月　梅翁
厩口をする追風の障子かな　宗酔

仲志くる秋茄めくの月襟　渉
時なう浪契にうつくしき吹聲　立
停理の夜ハ武家も三字合　蘭
掛稚もる衽くに詠る月　酵
中の秋過て染花へ一杯　月
まさんのいふるの風の路を行　渉
一夜きり情大波のくり　立
住穐し幻住庵も古笠　蘭
考ゑの肥さしにすくむ詞香　酵
修行あろし金無学範蕊を蔚　月
羽織をぬいでつく秋風名香　渉
杉戸と山掛る冒てゝねの暮る　立
地震の果れより前城なやく　蘭
針任すに宿て静子無毛の聖　酵
洗ひ物えすぬ月る飯お　月
左り盃三浪篇霜凍只風韵せくら　路
百葉過を村舞てふる　立
こわ松に蛸を挿ふ寒月　酵
突のけに麦藤を蜂を掃　月
伯算用子帳大きさる　渉
町中の鶴の組合て氣を帰　立
宝探ぞハ由るに凪帆度　蘭
美濟の上にきるふ行り　酵
伯あそこ君かうて子あへ柔前　月
此名くと篁を追ひて上おあき　渉
従めの上りも安く汲餘　芋
達して森霰出とも々きの秋　素伯
笠の露牡かりわくわる　禾木
同用言唯ぬくのみ文ゝて　伯
七雜浅子菖良火を冬らせ　木
凸のめ尖さをかくの女入浪り　伯
杉角嵯ゝ梅の夫みすゝ　木
嬰鶯を呼子夫をく枯宿と　伯
換料のてゆえたん代祿　木

さゝ家の間くに宮笑　伯
めでたうぬ居風呂を待　木
肱に双六盤の下段より　伯
あちらん面の中ゆきすゝ月　木
出来過て素足に國の茄子　伯
手ひ違ひに起る小公事　木
小路に朽ちたる藤の羽織　伯
帯さゝへ傳はてんぐうを出　木
入相の後家に遅き出法師　伯
こゝろもとらに突る高鴨　木
二の字は幟た多かく埼の内　、
味町傳まり小男こゝへる　伯
妹の手絡も近くろ傳統　木
碍ひさきんく足は小屋歴を富
引越を帰宅の市に持出て
人手につけぬ家なりすゝ嘆
生玉を恋ひ早け先宮津産
まゝは猿の帰るゝきゝ
九家の上手あらへつ格話　木
やゝ寒さうに住める西衛
晦日を道中で志る旅戻
砧うつ世に在の江はさく
手家の役も西瓜の畑番
二人と生いのらぬ府定地
中々に時代の志ぬ大ヶ硯
百のかりても出さぬ甲子
大川を越えて嘉き出而
耳もとへつく鐘霰哉　伯
猫の歩や風の走る笠の雨　邦泉
茶口掛る捨詰りの月　丁雨
銭法子節句やく秋の暮で　英泉
嵐落し伐工丈長くさ　邦
いさゝか小降出る空の公債の　丁
答てゝ何れも聞くるる仙　英
何れも同て若に当る唐津焼　、

坂の名以ほう付累り　邦
物も出来の娘を雇ハいろく　、
水汲のよしゝ井戸のさくやかまし　丁
ちから帰もの乃子を経程咲秋遠　、
群てゐる蕪を刈る翁走　英
醒ハ出りぬ笛結月の宿　、
鼓の名付もおてるやく座　邦
いち早く新酒の通ひ酌まて　、
雁唄読ミ歌し吹ゆる　丁
掃ちきりぬり乾れも柴　、
まつ笛かきハ十かな吹し　英
鶯の声くも医に[illegible]比家　、
うたゝ寝もて宗の下もさす　邦
川ともかくとやくハツ下り　、
不二を左りに籬まく駕　丁
物芸にあれ気をとりの紬お掛　、
入梅子のくりし麻疹こにのる　英
春も寒しちりし保[illegible]庵者り　、
風の日りまかりける葉　邦
花見座ハ以もみ付き羽織着て　、
口の推さあきらんてこらぬぬ　丁
咲ちらしく拾ひこの淡月の雪　、
寺ら八隣をる苫あり〵の霞　英
蕗留ま淋しう恋ゝり涙の宮　、
眉の名きも恥なん思さ　邦
修行しかハつきれ話くるゝ　、
宿を編して堵ゆる壁　丁
追分のむもそろく咲かり　、
妻のあはひに酔る二人　英
待時ハ南風も落し初名菓　柏儀
山根子肉の寺わる廃宮　枝玉
群舟の秋ハ去来しう満真て　治英
依る暮て飯ハ同をしぬ閑　南枝
居所ハ急に住ける縁の夜　玉
炊への灰を集ておさへけり　儀

坂の名ハまうけ思ひけり　邦

物古き出来の姫を雇ハるゝ　、

水汲のよき井戸のさゝやきし　丁

此あたり虫の音を経ま桂咲飛越　、

解てゝ藁を苅る角花　英

醒ハ虫のね各結月の宿　、

数の子汁をあてるや今度　邦

いちはやく新酒の通酌る音て　、

雁唄結月取し吹ゆる　丁

掃ちきりねらり乾れむ楽　、

まつ苗かきハ十か尓成し　英

営の若くも通ひたる花茶　、

うたゝねをして楽の下也たす　邦

川とのかゝとせよく八ツ下り　、

不二を左りに籠まく駕　丁

物好に病気をうり餅お橋　、

入梅そのくり麻疹くたのる　英

産も[illegible]保[illegible]庵[illegible]　、

風の出りまかゆる芭蕉　邦

芝居屋ハ心も染りき羽織着て　、

口の粗さわさんそら称ぬ　丁

嗅ちらしく栫ミの佇る月の雪　、

客ぬたかるゝ苧ぬくの霧　英

荻笛を淋しう志ひる滝の宮　、

眉のあきも恥ぬハ思さし　邦

借りし刀ハ反きれ鞘くるる　、

宙を漏して培ひる壁　丁

追分の坂もそろく咲かり　、

妻のあつひを酔る人　英

猪時ハ寒風も荒し初の蕪　抱儀

山根の月のきゆる霞の雲　枝玉

解舟の秋ハ世を得し満ち出て　汐英

傾屋く飛ハ佐ハのきぬき鶏留　南塢

台所ハ急に仕かゝる疾ま支度　玉

煖らの灰を焚てきさく成り　儀

五料も出る御所の会所て　抜

神のこと斗いふ禰宜かしこと　蓋

紫陽花の都より安部の名はかり　儀

咲にし足のいさむる下駄　玉

井手清水に蛙鳴て水涼しく　蓋

御先勤化の鏡持くの鳴　抜

先向に来る月の出かかり　玉

実の成る頃になりし柿の木　儀

無造作に仕込る樽の瓢箪　抜

志より嬉しさも耳のかれせる　蓋

猫に宿らぬ小鳥の声の空　儀

まだく一般結ぶく約束　玉

定文さへ承の出状どきを尤　蓋

以前も見られぬる居風呂　抜

其ままに財布結銭を投出て　玉

襦袢の襟で奈を去りむく　儀

女の清て前世も小ままめき　抜

一諸方の他をも二所一きる　蓋

彩を悦に遠う縁に相き然　儀

猫の子に参る猪のきれる名　玉

去人本のた居つひのかそのの　蓋

火をつけて法書くとうつく　暇

開きて店は黒白出せる風鈴　玉

其夜秋来る男吾の口　儀

隠しぬき塩売るの宮瓜　抜

手を拍ちもう足ずく水のり　蓋

為さぬ仲ほど大の郡さ釜の下　儀

油差す者の光る恭の所　玉

月清く天麻某の峰　蓋

原く雀の子寺屋て帰　抜

無さまで起きてみる雪の　雲兵

芽ぶく杉の葉さきく人の丹　系木

森風景の下迄を若く桜肴て　秀

長短以名のなし我又猶　木

山風のくまれ花を月の保ちう　丈

ぬつとの身へ蓮の実のあかし　木

嵐ふき出ふけてつらく深の霧　丢

癩痾とのうへくよの御寿せまむ　木

出つる行まてき年礼の稲　丢

祇園祭の囃子へくらむ　木

花くら日和て涼しと通論　丢

たなまのもや出来る龍の代　木

妹雁の御よ深なき標の月　丢

下様るいつれ送る明喩也　木

九てゝ帯むへ出るうるさ成風　丢

稼出して妃蟻物生う薪　木

むかしのらし沈るく程の花　丢

さらり舟旦はいくらうまの呼　木

社ならつ以うやうる氣甚　、

餅番ゆみそ底る庄人　丢

ここ丸合海雲良をに偉て　木

つらひ出て汁理る倹約　丢

赤垂え紙ゆ痲する掛り蜂　木

こん紙場多とゝの氷深海　丢

蝶やと拾くしの合はに古飛　木

一枚の紙の合羽かしてゝ　丢

扇くゝ江浪の蜂うる好き袴　木

いゝよの何事の事は鳥市　丢

薬六つ鳴る寺へ浴不自然て　木

焼鳥もはしまうぬ牛尾屏　丢

選まへさ次ほき図古　木

上下揃くれと出ぐ九夜勝り　丢

本店と宗合のを雪所佗つき　木

此ら流に底りらけ渾の系　丢

煙様の松の戸を抄湯水　木

以中のらねくの宇まね宮け　丢

春の本の藤の葉咲出る楫橋　欽哉

乾くもいまき薗の秋　金　鶯雪

また秋ふ園ありける　天遊

霧の雨るくものつる川鳴　哉

月高く新の種出す札ひろひ　雪
豪興かあふきれぬる出る酒　画
そよくと風なる彼の里　武
咲くと思へるゆかぬ花の比　雪
糸桜の眺めに忘れし紙鳶　画
上の吟は只人急ぎ行る　武
酒の宴持そそりと誘ふ神の月　雪
手拍子にきて宿取る事　画
初月に打ち出す栗の落る音　武
よるく瘠せ存るいとく鮮　雪
揚橋の袖を筆店に思ひ出す　画
人よりは老く家賃納めかね　武
古橋て水ゆるあらく流れし　雪
串刺も好しさうなる去年焼き　画
朝の錦絃下地になされ　武
花の催促に手拍子ととまる　雪
晴れて誇られなくぬ世を落着　画
位子存ぶらあやしの淀　雪
物好くなぶ袖りの唄ひく　武
古の木に新る木戸し夕涼　画
見たき事ぞ往居の寿羅之　雪
爲の彼岸をまで秋行らひ　武
突出して松の位のよろし似合　画
肩先切り面白ししる君　雪
一生は只いつかうき盃の月　武
枝ざる物ぞ行ゑ何ぞあ　画
侍めの旅番人に香参き　雪
旅の持のとれ急ぐ手拭　武
鮫汁に思ひもよらぬ相生ぞ　画
好き世をさくに好む挑灯　雪
島居つく妹の啼まつ稀り　武
こまくの乙尚し面白き口　画
法雲は尾根を出て我家の雨　森堤
舟の身へうちや好む枯薄　飛彼
鐵當の窓かる梅ゆげて　得英

こそりくとのまゝなつく　蛻
ゆく〳〵ハ川田も宿月の頃　猨
濁もさびる鮎のさゝらつかむ　菩
猶しく骨折ても宗年力　蛻
吠へく兄嫁も侍ノ志る人　猨
居風呂も一つ借ての森出勘脱　菩
掃く蝶のつく飛ぶ蚊帳くゝり　蛻
下りくる蛙ら浮る取る細絹　猨
鐘の鳴ぬもと明しまゝつふ　菩
めつくりと婦しく庭へ月の照　蛻
老る頃を待かこのさくらん　猨
袴でハ木のから婦女気作合　菩
戯し事へ詰能ねまつ川ゝ　蛻
撒のかる方も八咲も西隣し　猨
凡中は宝暦の海も出たり元　菩
白く秋への細鉄のかゝ大職人　蛻
さゝ松役も雲の農豊　猨
てんまもならなとみるさ　菩

隣の宿りくは猿の廃し物　蛻
何かしか世のつる連にも別れ　猨
左まし出来を重い筆力　菩
新らしき撫の出宿さハツ事　蛻
付けのる竹先を争ふ　猨
我まゝ咄気儀人多く通了　菩
往来しまの笠物藤出たと　蛻
存外に案じた雨も晴る月　猨
嘆ひと結て花まで吸けりの　菩
跡く為虫も狩してのえける　蛻
蓄の浮りハ咲くの気あゝり　猨
小文庫ハ恋る上手に剃し状　菩
水の瀧を姉を兄手出家　蛻
四五日の照に餓鬼出のまひ　猨
田舎も待たせかる雑布　菩
散木の葉蔭で安き涼れ　秋帆
ともくに書きむ麦も生立　乙良

石様の宿は縁より遠かりて　西疇
新渋りぬ刷毛の間より　帆
気早さに盥の水もこぼす月　良
鈴くなきて帰る小鶴　疇
猿の子の歯ぬけし世にたゞなる　帆
湯治きの仲人は怖いのもの　良
途中くりかへし旅宿の銭　疇
悪しき津とふ大拝のゆき　帆
在郷の娘にわるく物なく　良
村の噂もやゝふ絶ゆり　疇
屋敷の様に居合月の影　帆
春のわらを晴も堪へて　良
是れらの詩歌上手の流行風邪　疇
本覚めの夢おぼえ中細工　帆
百出世八束になりて　良
桑の花なりて鶯なく　燕　疇
風呂すゝめ八宮の姑の雛さまで　帆
ちらりと[illegible]帰る[illegible]　良

鑑読の素[illegible]　疇
帽く肩を縫の箱持り　帆
[illegible]　良
折角ぎれ[illegible]招　疇
貸船の帰[illegible]　帆
鶯[illegible]　良
清[illegible]　疇
張[illegible]方丈の[illegible]　帆
堀上りの出[illegible]月の秋　良
筆[illegible]倒[illegible]　疇
丹干も[illegible]棚　帆
蕪[illegible]　良
忘[illegible]　疇
因兄の代[illegible]帘　帆
[illegible]操金　良
時[illegible]水の[illegible]　疇
揚げ[illegible]の余[illegible]　禾木

キの暑ほちかぬ無心寺　紫酔
漸くと白ぬ住めりて常法て　梅菊
近形晴出し落月のそのけ　直立
ゆく夜も霞にぬれる綿細　其月
そこかしこ新米を摺　岳路
道筋の飯借し上げ屋見られ　酔
除来出前にも路を橋　菊
母親をうける樽子言いせ　立
九つ大言を小家蒸されたる　月
腰窓に手物を法も拵店か　路
かるゝ情て結ぶ棋きれ　酔
此路は月に染ても机暑さ　菊
名道の末は白衣行の桶　立
新庵も学に囲ふ夜青の香　月
様る枝みの恐さ草法　路
藪の梅折る名の木捨て垂　酔
白尾と寄る籬枝の鷹　菊
来世白の白見に気にかけ風流のはし　立
成り人は時かぬ後しらく　月
棲木屋の来て堤も手をさる　路
世の我善心まて茶丸める　酔
番経も知るも恥ぬ藤れ　菊
庭屋の大い閑情あよれ　立
生酔の雑代ける時浴びまう　月
大刀鉾の風かと刻てる　路
折角と寄せ縮をる出てる　酔
法綱もんで知らぬ一年　菊
善能所を先山画せ月の呂　立
御り送い風の牛とせ無　月
眺めよく様ふお名残まさい　路
転起してもそぞろ花へさ　酔
代々の家名子当ぬて迷惑さ　菊
為すとかくし生く恐帆柱　立
萩むち蕎麦もとむ乱みて　月
初虹うつる南の生き通口　路

春の数の子綾まさく附虫や　古由

やゝうくもぬく咳の面　葉三

一ッ廣き書斎の椽に梅咲て　由

下家も宿ひらおも人留守　三

白晴て入方に出し月ハ上の口　由

移りの為へ鶉の植て手と　三

好家で小首を傾る新蔵　由

憚る声ハ先きて継さす　三

叱しけねさうひてひとく尻ゑ　由

襷もとりみて嬉しかり油手　三

君（マヤ）成ならぬ喰べほいぬ豪律　由

左出も又私なかな涙なれ　三

言ひ月は旅の腹すは男達　由

こゝらハ素子は多分養皮　三

短の風に坐地ちる八出のぬき　由

亂紡とさきて行み公家の役　三

此むと古郡へ海ハ情ふの　由

世なれて何事も八韓れ川瓦　三

竹家にかし八十八歳の　一

扁座主のかみて勝ちてそう出來　由

そうハ去せれおれば古座の　三

入用あれハ喜ら常しうす　由

呉て出るの事ハ絶のさえ度さ　三

宮のもひひに高く報せ世民　由

一志へりさつて知る絶家　三

名さハ粧ふの想咲きさく　由

恋出ゆて嫁を紙く付々　三

おのゝの姿て大へてみなあり　由

灯をとうへ清を産せる膏の月　三

嬉しく鮭てちょうひたはじめる　由

君かれと給てそう人通り侘　三

呉れともそうち猫ハ去つうもと　由

鍋うけて生干の曲突の茶居　三

月に言と古衣叢若ぬ　由

詩佐所の出の書法なき肩張　三

垂石のじうね法苔の古祐家　由

春祈やよろこぶ節達渡し口　晴若
粉雪静しまろく消き来　五株
鶏鳴すさし岩のまゝ鵜の帰て　来木
差雅にはわかぬ浄の割符　若
翁の月ゝ此ね言遠を見て戻る　株
笠でけふひて桔梗さす也　木
此秋ハ宗やら獺もさくさく子　若
手火の錆ラ井の鶏そくふめり　株
信濃川てとかこそすら長　木
跡ゝの立を鴫も和かん　若
つれなき和漢にて交る嘘乳声　株
作者とハ行丸と糸の守観　木
面々をとゝを入月夜　若
風呂蕎粉葺の粉　株
塀越に花く彼岸の抑き給　木
空にまうて声く出ぬ嘆　若
隔たて金の精出して　株
舩中にゆるち待町　木
笑しこ言見て対し　若
急ふにハ夕闇　株
此ごろさむ瓢ひれ　木
らん畢る細門の生姜　若
おゐかう精彼と老てハ京義　株
家雛の旋冊の謝義　木
船尾にのをとる雷にやてきて　若
若竹藪のの方きを月入升　株
時しは本への猫蔽　木
生せわに地車　若
味子迷子来る　株
子木の千年　木
砂澄の桶の水音　若
おゝ基　株
蕎門の出續の　木
宮虫の昇ん　若
毛糧立つ音の包　株

いそ〳〵と迄もつける蜂の巣　林
拿体めす蘇くさ於之甚の雨　丁両
石欄の透をうゆる海苔の糸　英泉
土筆の出ろゝ柳嵜のたつ　、
艶もて萌て捲る羽子　両
そのあまのかさ月のみかさ亮　、
おかりくと極たるてありけし　泉
獅子も花炭薪礦燐の塩をかし　、
捷く筆放らける豪所　両
地球の出るかゝる樺東勝手　、
秋山かゝる也八絹布見めるせ　泉
加き寺ふさ〳〵か生材の新料耗　、
原し蒔まで以ず居留呂　両
雪江の氣おりあまの宵の月　、
後岸を花とつく精進　連
此浪あり出嫁は秋達て来て　、
下の塢のなゝる丹ゟるとよし　両
野合なを乳ても桜の花　、
土雛も加りくさ古蛇行　泉
小園は太手紙節こ居宅一日出し　、
草その湮くるめるも底すめ　両
料子錬て困る首きさを欣　、
四十ふ哉せ名紙鏡をまみね　泉
香弁の汁砧実紀る細格で　、
送害茶るせめく　板　榾　両
我返への級刈きめる筆は　、
新案も称し半喫し　水仙　泉
笹宮ゝ先間ま合ゝて余の新　、
禁おは飯のかゝ人連まぬ　両
ゑそりと月の出るさ一條入　、
深夢に更の帰りつのるし　泉
秋雲くらも添気を残り捨　、
紅のなそか手慣の遠者　両
新しう吉八月の三弁格子　、
手持もゝはく床の御ひ笹　泉

池の中にも霞のけしき也　霑

張てさかりの水や往来　示

宮守金を以て為暖　筆

山寺の庭掃にさへ蘇られ　東宝

ゆくゝ收せし麦の粃家　菜山

法事する蔵燕ハつくる巣ハ持　宝

鏡子は方の岸をゆかれ花　山

東まして連歌たくの月日寺　宝

葛とて水社地形平に来る　山

自ら咲たる茶のくゝ菊花京　宝

梅の方の事ら縁つく　山

ぬのいひ茶の縁側に蛍之　宝

誰のかまする脊戸の舞　山

幸濃の蔵に枝をさして　宝

油菜を植えて手にひろ　山

思ひ出す身の咄の酒の月　宝

[illegible]大　山

夜ふけし大さんの酒の燗　宝

厠の雨のふる仮り出居　山

春立て蚤はいまだに　宝

筋ふみ嗚ふ悪業は新　山

たし如月法に守にまた後　、

微塵に見る激石の穴を紀　宝

つけるに錢出せる於ら小屋　山

志より仕舞の号の日蝕　宝

奪合て跳の小鴨を放し　山

ぬりくゝまして車をよけ居る　宝

植えて光きを志保の花　山

いつのよく志る無汗栈　宝

鍵穴の麻葉の男女竹の井戸　山

新も形を見せぬ施咲　宝

様直ひて形は蔵子自ら　山

稲の穂並は世にあふまる　宝

家の子も捨る一般哉　山

本客のつとふ八とれ為女　宝

哉れる萱の穴に枝さし焼　山

日影も今て春の半刻の梅らん　室

撒ちに伽藍の鶏は出て並　山

精進も常の来は自ふ餅　室

八巾の空一寸分を浮子の竹　禾木

枯る日かくらく帰る門の春柳　仙遠

赤みの月は戻も吹き落て　木

菜の花さく森のしほ今ならの吹ばお　遠

ちらくしほけて浮合月の露　木

御所は花の二文の酒樽の吹　遠

うきに寝るあさは梅に浮く鶏くる　木

建立の寺を請る釣鐘　遠

金銀の渡る世の中は蔵目勝　木

伊達には刺らぬ顔の甃　遠

取揚ぬ此さ廓の住ま嬬

表田に鷺の首へぬ足の耳

六月八月の宗ハ此敗迄八日　木

妙法顔中を半夜の光　遠

蕣は井楼造りる艶質

儒病しく吹く蜂の巣

去年量降をかさね風ゆなく

蕨の芽出すにつくしき浮

又相して訪るれる腐骨杯

稲荷いつも遊ばる豆腐屋　木

鐘鳴りまる嫁を鏡は　遠

浮ひ解きて解ぬ池く　木

賑ふ小雀は鷺く空の松　遠

焼けまて茶船潜也　木

賽銭をなきと辰ば立席　遠

守は鏡て馬糞溢れる波　朱

後篇をなしてゆふ浅き仮座店　遠

精進落を鍋ハ熱茶　木

是くらし廿六夜の俄晴　遠

花の精枝を庵さくさは断　木

蘆水三丈翠つきさきて　遠

こゝろ付る鏡とき帰ふ　木
板の間に鱧並べて贈る浅漬　遠
雑役市の宿の日みそかり　木
取洗の宿きて出の咲おけ　遠
欠々露盃に手る菊苗　木
梯子や誰やら植し池のへり丁　知
きられぬとけても降むきし餘　力
文者とらおく竈の宗して渇　芸
あらおく人を帰久しく　知
取々結月は名る征御取て　力
出くらの帰け枯る苗ちら　芸
旋餓鬼より後は俗な世話迄　知
崩して並く基の筆ちる　力
河宗地の屋敷へ出父待るゝ　芸
昼は船宿まで札着きさく　知
橋の付る流らも雪の降りの方　力
ひとらは住める橋坂すびれる　芸

当り投からはや手に沢出　知
別て戻らのの衣徐り取　力
宗非の器表半米を搞せ藍　芸
法を信る内度収牀給　知
披露に於ある主の席を咲　力
自ら生てゝ素枯る酒火　芸
餘義なく残れ出代むかる茫勝し　知
芸で得ても鐘は挑しき　力
深物の貫綴打出仮法場とし　芸
風すも明けて紙の占かる　知
弾筋のちかは一宮を借やけ　力
役て手付迄は情うぬ擁対　芸
読の一しくて異教珠羅尼経　知
取教く毎日ゝの行る内梅ちれ　力
若衆より衣類のちさを拂物　芸
陽る舟子をたのみとする　知
水底のかりは金なる首の取　力
放せし婚手は見えのつる　芸

末枯ハこちらのあき川田　知
曹洞宗に売れる小屋組　力
丈六に見とるゝ金のひかりて　萬
雨ハ晴るゝなかの影もなる　知
正面の廿へ左りふくよしの鐘　力
網を守集る田井太八哉　萬

付出略

ぬりし雲はる照陽の薬ハ江　三
秋風種うわくる麦秋　三朝
縫殺の獅子蝋を梢にして　萬女
以ひ出たりハふちぬ達之　三
問屋橋に錦荷寄さむ昏の月　秋
向まりに伸て物ふて房来れ　女
蛤の雀の形ても嘩らしさ　三
ぬりのもしく浮を生つも合傘　秋
底ゆうちら形くゝ扇の裾ちり　女
縁子縮しき浴をきて掃　三
まさに役割のよきい旅をさ　秋
打ちよくる畑の分霧き　女
植木の一度子出のはまそ　三
よれ借梅ヨ社ハるる茶餘　秋
坊も取く墨の日ちは本清籠　女
小宮稲葉の仲首ヶ見ちる　三
またゝ回も守寺都の月のてらと　秋
風激に哉しくする濃能　女
男ぐし屋敷猪の将杖紫ふ　三
枝本抑て志りけ飯時　秋
伯楽ハ萬る云ちうの赤らの欲　女
小刹を出世ちゃ人さゝくはいち　三
津もちに藪の並る清の人也　秋
みれくれ路を見世ぬ年　女
大きり膝ていきめ坊主た　三
蓑窓ねハ茶やも供る　秋
菊色て雲殺さぬる留髪　女
てんらう出ヨくるい焼　三
立待ハめやきり浮小遠つ　秋

末枯ハこちらのおき川通　知
曹洞宗と書ける小屋組　力
まえにゆるめなくも迷ふ　葦
雨ハ晴るゝなきや影も行る　和
正面の出ハたしかよしの種　力
網に寄する田前たへ寺　葦

付出　晴

とろゝと雲に照らるゝの蓬ハ　江三
秋風種うわてる安秋　三朝
残紋の撫子娘を摘添て　萬女
いひ出しハむかぬ達え　三
問屋場に鈴荷うさき臥香の月　和
何まうに仲て糸てる春哉　女
帽子雀の来ても嘩らしさ　三
ぬうりをし涼子出らも香傘　和
底さしくもあう取くる内の拂つちう　女
謀子篭しさ垣をもふて掃　三
まゝに役割のきまし旅出来　和
打見にくる畑の舟暮さ　女
植疾と一度ア出の口きゝて　三
よふ隠梅に被りる苧絡　和
待ち浮く悪のさきにハ落籠　女
小屋鶏奏の仲宥ゆ先ちる　三
主ハ二回も下みゆ月のでふうと　和
風邪にかゝてそくゝる浪鉛　女
男へしき居宿讃の将紅葉ふ　三
枕本抑て志ろ汲飯時　和
伯楽ハ萬る三悲しの書くる歎　女
小判もち出世まる人さゝりなさ　三
達さもうに蔵の玉る涛のへ　和
みれくれ端も見世ぬ隼　女
大きなる箱でいきなる坊主たち　三
貰家ねハ茶もも飲む　和
[illegible]　女

蔵に二度まかりぬいなり　女
人並に律村紫の縄に付　三
峯は山合のとまる比焼筆　如
移徙に院主は嫁を見てる　女
のつかりして寺さぬ蒸火　三
忝りしと衣の梢の紅先すれ　如
温泉息子うちむ帰校なれ　女
馬の上鞍をおさへて子飲　宜紫
面は形ちら向にまはる　柔木
車の中に五歩水を四ケ見て　孫高
見ん晴しのよい二階持たり　葉
行燈の消ても月の奥に入　木
生うしと落るたゞ鈴の梨子　高
緑四氏に形袈裟を惜りて　葉
秋の代のうき寺の樽つまき　木
採世話し二人はうら恨つ　高
息もつかぬおとの衣かな　葉
高声の咄つゞくと旅都　木
そゝろ筆画の婚となる　高
居並ぶ網捩譲る下人　葉
夕顔棚に入掛る月　木
門顔に出て枝程ちらりと　高
丹精に茶入る筆法の物　葉
嵯峨也に行の次第參ふる　木
ひとり傷え律の針くなる　高
妹の出代時の首尾良て　葉
めつらしく渡は在て給分公　木
美濃米もみるに住吉接待来る　高
年の名残にとれし綿帽　葉
ほやえて雪の吹込連子窓　木
くわしく咲ける庭のお座敷　高
宵茶でみるとまる扇の瀬　葉
坊主にはさま余のふる編笠　木
去年より薬むひさ紀中の酒　高
育ち土地はかくこの住よき　葉

春雨のむらく大帽させる宵の月　木
難船ありのゝ古酒を賞也　高
納戸の丈子さしかくる遂鉄さ　菜
緋威て又節〻の路り左右　木
為の傳奇おしくる前揺　高
二月廿日かけ風のふらく　蕉
出廃り手拭帯で百の銭　木
春も中〻打寄る汁　高
岩屋の神ある岸に明近し　嵐雲
旅のやくら花行の鳥　秀稲坊
色に出て揚枝はまはらきた　嵐讃
男さとて帯がらみ　嵐和
月落て夢の音や下の葉　何汐
萩吹ろ...一筋の風　雲
餅国も西行もと...帳を　坊
力も比[illegible]上人とたてる　讃
町並の[illegible]の降　续　和

猫の[illegible]居　し
渕り[illegible]立出て　雲
物さき数の[illegible]岩　坊
[illegible]涼て[illegible]の柄　讃
神さ[illegible]並へ　和
家々の[illegible]蔵　し
飛脚ハ[illegible]引練　雲
去年[illegible]芳[illegible]の花[illegible]て　坊
[illegible]風[illegible]月　讃
表ハ[illegible]立居[illegible]焼　和
もとの[illegible]の蘇　し
日の[illegible]下ハ[illegible]て　雲
葉[illegible]合歓の新水　坊
雲[illegible]屋扇　讃
暮に飯急[illegible]口　和
こいさくに下女の[illegible]の流　し
府中一[illegible]る　雲
やら[illegible]葉の風　坊

小鷹の羽率の寄ぬつくぬれ　諸
月さやかなる保遠かつらえ　私
肩ぬ出しも意の将　し
松の粉子車の油売くつて　雲
法會静る日中の鐘　坊
此生て〻路往の咒の錢あたれ　諸
持古をあふねつとれ持堪あれ　私
面雲の表て築しみをこの山　し
春行まてる此屋の出陸し　雲
早乙女やうさく時のきさうり　南枝
麻雲かゝる様の朕り葉　錦力
切石の口かけ立る印して　渓蒿
一ツ二ツは〻つくの坂まり　其
家ると月まれ壺巾は参る　力
さし来る涼み居のさむさ哉　其
暴風やむすれ小萩をのれ渡り　力
こ度ゝ旅行て又連すまとかる
咒て後の声かへ流れて上氏　萋
何となぬの中さゞね〻の付る秋
李の字も丁度も書で勤るゝ
頃は安堵か肩の代さし
錦繍のいくして何その旅尾
関ひもそそらぬ南力坊
時も無く精には縫も凄くれ
うらのみなおしてき候る剃刀
手近く並並へさる鉢の土　力
店の喉鏡もそよく見ゆのせ　萋
是まで八大豆腐も仕舞ふ年祭　抜
者る年若い水めそ小丁程　力
きがり変の作りは先船数合　萋
勿り陳きる六月始日　抜
いつつには川上するる穀物坊　力
骨たるまときさるの喉のの　萋
春がに席程程は流する長若清　抜
鉄炮風はは字はあきとも　力

娘気のさゝやくこゑも留守おし　芸
袖にも拂ふ肩の露けき　拔
柴栗のおのつし落る水溜り　力
暁明むとくれてなけぬ秋されは　芸
一ツの子湿気ハ拂ふ木屑　拔
身のほたらは帯も少寒き　力
嵩子ぶ入をすてむ観門　芸
冴の月すゝる霧のきらつく　拔
向のよる夜ならくのて迷ひき　力
茄芽の内ハつまの毛も皂角　芸
旦つ待ハ命の杏や椋の芯　来木
水鶏のはやき雨すかれの月　向遠
小屋掛を六高市に組立て　木
渋薬宮ハ手に匙を従けふ　遠
傍らの出声まきと浮時の鐘　木
学問くらきみもうちも新田　遠
ゆかしき系種子流して滝の末　木
芳体のつて庭ゟ学察　遠
手出てハ然の後なの古魂　木
余義なく義理に叔母の苗縁　遠
今ものく念ひ千萬ハ下品　木
勝楽とこ完て悪敷やく　遠
明月の霊なり体も波し船　木
説きらし伸て有る名　遠
常方日逃れてまたき　木
深のく夜ハ悔られ料良　遠
ひらけて浅義気の語ひ合　木
此二三年は楊枝の掛しけ　遠
色揚の木綿合羽を去年そ　、
雑ちの出来ぬ不器用　木
家の内ひとつ木手前濱渡　遠
にくく出る小僧くらはせ　木
前生の親の秋すら厭ひ　遠
眉毛を数をかんれ手拭　木
本意ま嘩啞ま寄さひ　遠

いくつ積てもふゝむ初雪　木

禅会乃子宿の盤を集めて　遠

町料ぶんにつくるか借る　木

氷際の宿のみ付き言朔日　遠

霧も桂枝宿こせ子前る　木

音のすまくて歌くる掛鳴子　遠

天海あまり少し半安を多く　木

翠出きる古代蘇絃の孤弟　遠

丸五六年もしれ居住寺　木

風も騰うけて咲此後ふの雲　遠

ふるく嫁の秋さへ行う葬　木

半濱して

鵜鶴の寒綱きねる行月ふ霰　雲

刈稲業ゐつまも岩藤　念〻

足雑の狭乃波ちさ紀勢て　雲

さんぶり水にかる敷の笆　念

夕月にくり乗る飛篭　雲

何[illegible]　念

行緒と出る日の付源より　雲

余所の喰に豆なおなくて　念

近所にあすて金升始　雲

姻のきり茶に大築にある　会

黄金ゝ[illegible]嗣[illegible]目指る　雲

子は庵のまで化よりは徒　会

陵行の雲つく餅の月明り　、

乙女らくにも実る香精　雲

廣霧にねる金際の遠筋　会

味よく数珠掛ぶおも時　雲

形にて色なさ幸ひの古ね和　会

我ひて捨てる刀はさき売　雲

弥の柏は無もまふ路生の内　会

出まの池く落る身もまき　雲

本桃からぬと肩に風のまる　会

休んでもくりし言ふ企　雲

瘠きて言は療治骨折て　会

笑ひあくて八古けぬ　謀　雲

是非なしの雇と思ひ捨れ　会
蚊燻に世をくらしむかり　壷
つまみて手拭ひの窓の口　会
人似ておかし出来ぬ浄瑠　壷
事を城は居に延しかる月　会
家くゞりぬけてゆる油実　壷
今日は読く相撲ならす寡て　、
芭蕉の辻に立寄し人　会
下女を集て出想む雨上り　壷
浮めかしく状を認る　会
遅くとも宮々の町の溢ぬ　壷
貧の子かね積嬉し　会
秋暑さ漂ふ蝶に崩れ落花　芙山
門へ出迎え乾く帷子　播之
庭つゝきも十日餘り無興せて　守村
筆へ入て形で見せる生章魚　斑兎
桂子気の毒の者せまい人　山
涼み黒させてまたる[illegible]　山
俵牛の手遊え解く客樹錺　兎
回し国姥書を出す娃　村
打くれ鉄炮向ふか肩に暮　山
狐の穴に霧晴しらぬか　之
渡し場の出てゆく繕苫とれまて　村
住吉詣りの客は物甚院　兎
かちかちと餅の音ま字寄月　之
嘩く虫の手向けよ帰　山
捨かゝ縄漆えを若添て　兎
熱海湯も二泊り分　村
汁の実は茄出来を容庭に　山
絵筆の尖刃ゆるむ暖　之
一群は散て扉の隔つらん　村
塩屋の害はかゝて韓　兎
隠居の部屋出安き浮世そ　之
守杜縄を結ひ合せるか　山
主客共に立振舞に夜深れ　兎

向ふのよかさくは国ふ覇王樹　村
石切の鑿を取さる宿の文　山
香み咲通の上手る所脇　之
蕎麦の蒲売の埴ふふる市　村
ちらりくよりて梅の鳴る月　兎
東柏の散るく味噌くゐ合　之
葉ゐ飛ふ転を鉄棒　山
鵬石駒を造色の作り上く　兎
捏ひきく状はつてゐやまゐる　村
放しさる義の新く浮世行　山
白は二組分せし庵摩　之
出らゐて火をれ猪る妻の友　村
ちわらくする土蛇の綿糸　兎
新ち作は蛇のよりし蓮の咲　流
余所なかりゐる高のすく風　茶
ちは上んは炭が積と女性て
まさく水に浮ひる稲妻の浦
根の出をそな方へ初花庵行
勇は前はおきく月の出るむ
又古き家く稿を穀掛ふのけて垂
寺廟は寂を蝶耕て持
以てゐてはあくまで嫁をひとり
不用にりゆる蟻蛹をとろす
夜のる味はいき横き毛なの内
日を逢ひられて頬あをそされ
寂しきなとのて身のほさのそ　芝
ひとりくと座る相の葉　栞
出籠く高く蟷螂を追ちし　芝
煙草の餘は酒物ゆやつく　栞
ちるもの姿にゐる上等度　芝
行ふへく海苔は座る際の　栞
永らし伊予いるまた清の道
古き家はつ松く接るおもかく　芝
流行眼とひそとあつくの浦浪せ氏　栞
陰気あくなる民時の事ひれなる　芝

向ふのはらゝ國に覇王樹　村
石切の鑿を形する宿の父　山
香み吃逆のとまる行灯　之
叢雨の蒲萱の蛭にふれて　村
苦くゆくとて根の明る月　亀
青梅のちりく味噌くみ合　之
葉名盛ふ手錢を錢持　山
膨石蝋を造る家の作り上り　亀
粧ふ身は状にてくみやまかする　村
旅しらる義の形く淳熟行　山
白き二組分せし庵磨　之
出るてゆくる猫る昔の友　村
身わかくする土焼の膈癌　亀
鮎ふけや蛇のよはし蓮の嵯　流芝
余所ちかりふる高のすゝ風　茶翠
身好よ先は崇に禍とふ逆村て　、
まさ水を求る禍縁の満　芝

松のおもてもなく給ふ座は　、
勢ふ日給ちかき月の出まさむ　翠
反古蒙く錦を穀樹にのけて垂　芝
水療は霜を蝶耕て待　翠
行乃ま出して嫁をむかふ　芝
不用になる蠟燭をとらす　翠
廣のゝる床にて棲ききたぬ内　芝
見達へられて類出ぬされ　翠
むしろもとめてもうかの通ひそ　芝
ひらりくと着る袖の葉　翠
虫籠へ高く蟷螂を追ひ出し　芝
娘子の隣に酒の出つく　翠
ちるもの縁によ る上客度　芝
為たへく崩芸は居る暖の　翠
永し汝千もまた清の道　、
古兼につかふ桜るをたわり　芝
流行眼とありても酒呑ませ　翠
陳気生るに時のあはれる　芝

座人さへ手箒の侍ゐ妻使也　翠
机ゐ高枯ゝ乾く並松　芝
小隠れをして葬礼を寄附也　翠
口利ゝゝく伯父斤貸侍　芝
人通て夜で雲のる相撲捕　翠
侍ちうく車の火のきて輸き　芝
津の町を出る舟のそら月に乗　翠
枝乃く霜のちりくちる　芝
押水に崩れし海苔の坏くゝ　翠
夕食へ粥のきうる上張　芝
所関を仕掛てうへ附也る　、
取ぶくて寄ほと来る人御　翠
染墨より出来し貸廁　、
末々の日ゝ大芝の焼跡　芝

卅棲くなうく宜なる石に形　永光
明て夜先く深川の者　永木
陸の府に輌の足で史咲上りく　光
花ゝ身との猫の呼くる寝る　木
月は左は一村半も碁盤　光
何はかん〳〵の蚯蚓帰也　木
茴香の実のまゝくと咲あれ　光
平らに行きる米田街道　木
悲しみて八わ七の鐘が鳴　光
ゆれ水に織てぬくみ都房て　木
京坊はあうて象まゞ穀ん　光
光さちは持ちの書をちえ出る　木
晴かとる月も雲に出の風寒あり　光
いろいゝ猫の猿く囃しら　木
思ひくゝ五佐材木をさく去ひ　光
ざくゝ汁を炙ヶ椀つめる　木
去の頃四文持楽のはやり出し　光
行くゝさくゝ春太の居眠り　木
此の市を守て備りて往生を　、
手ひに鐙をぬぎさ行宿寄る　光
佛壇の明きぬく乃経堂て　木

猿ゝ花のゝ色をうける新打　光
むさ庵の露おれこれのかんなくと　木
やゝくたり又残雪のつる　光
一斗桶段にはたゝ山清ある　木
骨折然は経く鎚刀壷　光
只も非以米上にかゝれ兎　木
薪の仕切たくふりかく　光
月はよ呼ぶ声もさきぬ小雛灯　木
御祭かつ散るちは門前　光
下稲葉を仕舞て庭も結ぶなり　木
塩早しき栄ゆる高寺　光
庭にあるを合宿に汲番せる　木
土手篠をぬきまた芽く　光
堅様に雲は衣ふく出の上　木
出つく水あるは花咲く　光
さらさらと風露に涼しき柱には　洞林
流れそれもかくそれ夏鴨　下太
繍物語の教に経猶まゐらせ　林
状も言ひ置しこの末市安　知
十六歌に紫の極巣もさきまさし　林
添ふもの子ならを草の虫ぬ　知
新切は千急も紅不足け秋　林
隣もやまた隣のひ西　知
以の無く洗ひて数の性あり　林
足遠る花もきく不蒼宅　知
施し寺基を斬物は為待て　林
高くり豹とる宮商一以人　知
様仕舞を轉ハ月さえぬは人　林
町も往来ありまいりやまゆかき　知
枝折の雪も呼ぶあね深ぬまで　林
根性をまたれむたさきとりたさき　知
山伏を水筋にまきつき色尽り　林
解けたまゝも藪をまきにぬる　知
薬師をその雑は料理は帯をさ　丶
年の家ゝしく世のなひつけぬ　林

酒造て人いつの代の御堂の額　和
てんかのかん〳〵警固きびしき　林
鈴木で見失ひ錦の松小松　和
ゆかしみ路の先天氣あり　林
寺の飯たべてくつろぐ心きよし　和
病眼に恋はうらやまし手拭　林
うき〳〵緒わすれまた萩薄　和
秋の夜ゆかしひろ庭まさき　林
月影のさしこみて障子塵はなし　和
直に世を鮭の皮人ゆかしめる　林
お旅所の夢盛りのひく果る秋　和
風にさわぐ〳〵稲たつ時より　林
境内の赤い毛がらし雪枕元　和
翁の昔から以てつまらあり　林
行脚にも手拭る村の木綿　和
茶屋も出る翁の名残相をなひ　林
思中のやまとゆかし様の事也　樸宕

ありあまる年のよのつるより卯　泮
此の菓子四五枚ゆめ見遊ぶ
後の又して手紙見せまて
古風な家きればそら月夜
出るの程に帰よせる稲　州
春近く嶋の和尚の歌よむる　蒻
高札待のわたるしてまいる　州
後ろて沸し鉢ぬるのさめかく　蒻
小隅まるて出ゆき〳〵ささやき　州
吹つけて重く雲居のゆき運び　蒻
噂でまくれち行ば吾町　州
志のく〳〵八朔の日立ちややまた　蒻
月叔のうまいのうへ元相　州
秋のさき太平は書を縁合　蒻
菌さがしにとあてく行く山　州
朧の気にゆるか出の絶間なし　蒻
ね和つきた旅のかしら近く　州
茶餅の津や小浴み遊路　、

這出る子に蒲のうる第一　翁
手招に向の子糖ゟゑやきさし　卅
鶏親序に汲てやる煎　翁
時ならぬ花に錦て栗の初鍵　卅
その夜は売る寸に金の小判　翁
足代のとれて杉の梢の文　卅
地主の葬に参つてとする　翁
傘をひらけて居せり笑ひ　卅
くろうい退けむきはれる猿の舟　翁
入陵に古き月のうけを伝り　卅
黍の穂先の仲小渡る風　翁
蒔絵の間に置たまま味のよう枕　卅
生すかへのけてこまりせる古　翁
山寺に候候窓に主事の薄佛　卅
脈こえゆる　鮒大風　翁
植てさし丈八據て古畳　卅
香の杉る室の行くもの　翁
十歩出て桜を過ぎる茶の家　和
菜をちらしてからみの河の水　風
初恵儀ましくにはかに見え　和
いつ月の家文でなきさし鏡　風
移ろふも知つてとする雨の月　和
山かげのこともさかりなる笠　風
ちる花て襟に笠つく旅刀　和
守りも苦楽法師の寄合　風
霞の肩は夢を古代四男は　和
花葉でうつらうて蛇き　風
数據し涼しらへてる蕎の品　和
茶くけに如何香の和合のの　風
古人の今に崇る月のさゝ　和
またば姫の都には為のかへし　風
栗摘は森の帝くも送るまい　和
着のちらも咲らぬ酒好　風
山の世彼岸寺の咲丼て　和
さらぬて堀の古株のかま水　風

姫子の多きくし猫を番遠 、
深眠りに世ゆくをこへ於る医者 如
宮ちよ次第の作をも家のみ 風
忘られ行ようくるて葬さしき 如
清世さる指ハ行かさ秋へて 風
所は停の去ららる新新木 如
よきさき飛壺を催すや菊莚 風
秋和やめくも看病ハ入る 如
口きての病人をかは亭しき 風
身さきく接る藁生は霞 如
借るゝち一座敷の生さる月 風
旅継の葬はとれぬめりし 如
念佛に大古のけていく雲盃 風
芭尾よ放役はかける翔る 如
人数ほさぐ家のも世家門通 風
槐や雀の芸の他ひらく 如
取つて熟て來るへき雨の毛 風
ゆゑ日の桐の住弄ゆる雛 如
かこまる埼くに見積いせ次 杜有
本の有さる事をきさる月 禾木
蒔のき那をえむ白仏か衣をそ 五株
縫すきしたるを世る呂敷 乙
きやる舵ハ思ゆをせる諸節 木
祭出ぬ熊の出る笠の園 株
秋の月をかりに行く橋の上 乙
下人をつれて除印は嚊 木
濁活る湯飲すゆぐ秋つき 株
一間寒きの月秋風の宵年 乙
面色の古蔵荷ぐくに雨く 木
かちそさし松は並み畑中 株
月のあみて次のむ参むり 乙
香雲られとらん飛事格 木
秋の風行陸船をまかく之て 株
塔はせ世紀のとのみや参る 乙
太こんの毛とまれ子淡きさる 木

細突ハこの蓋迄さと教　株
古株の石ハ西へのける源生院　呂
宸の中ずいふる傍瑞喜　木
二両ぶ木質液ニて道ひ起る　株
帯の紐から屋小刺出来き　呂
勝勝ほそき市が果して　木
掛取り蝶ずて霊ゆへ肩　株
玄納ぞとの石垣梅本ころげさ　呂
庭屋の淀みを仰ぎ春ハ空　木
夜網に品さ春ゑむ平林寺　株
大骨折てさるあら釘抜　呂
二ゑぶ達ゑ深の思さハ高ゐ毛　木
虹みんのりとハ未だ残る空　株
若しぬ色に雅墨に出るて　呂
出稼合翔を尋るて猿るり　木
未お墻買より西で蔵さる　株
谷底の家でのとさゝむぐる届　呂
重ね寺さま寸葉師の庭のまひ　木
掛りかるへ子来の打水　桁
いまるねに列其ハ菊の楽べ　小桁
西の芳かりち月ゆる高　祖文
をさハ淡つきむきと見分てく　竹董
もつせハ錦の紫う飛ぐあがる　桁
舟ぞ出家の剣かけて去る　文
萱菜作きる細か手枕合　董
いなる手の未れハ我衣ち穂さく　桁
眉の若ゑ思ハて人ず子ずくのく　文
河浚止ゑず來てもひ川浚　董
売りをとハおかのれぬ常　桁
雲羽の立さまさ蕪る若の芸　文
瀧さのとぶり鮎の粕漬　董
肩の秋山の遊さハ霰下りて　桁
曜ふさ錦ず出来る鬼灯　文
五人枝持上ゑて見へなれ二本ず城　董
二階の口語志遠ぬ押八　桁

綱突こゝの蓑遣さむ　株
古株の尾垂るはのうる添生え　丞
宗の中子切る窓捨売　木
両西本傾く流れ遠きる　株
帯のほひるる質小判出す也　丞
鳴鶴隣なき市松黒くして　木
掛け蟷螂蜜にりて月　株
燕納をとりて垣梅子つめて　丞
庭屋の池あるを行き舟にのる　木
来網紙尽秀る平林　株
大骨折て出る新抜　丞
二つ事こそ客思さ甚色　木
虹のりこ八寺の空　株
去る尾に行て積屋に出て　丞
出張合綱を憲す統　木
米相場より西へ下り　株
分けの宿の也とつ塔　丞
盛舟すす茶師の庭の花　木
塔りわ木の折水　株

いまるねに列せ菊の寒　小
盃月にもる寺　祖
そのかつき見なして　竹
とつせは錦のあつる
舟に出宗の割つけて去　文
茎菜紀きる細の手招合　其
窓る手の来れば浅れと植さく　松
君の名るゝ忍て人々　文
河流止に来ても沢川波　董
売り出とは常　松
雪羽の黄の　文
綴の鮎の粕漬　董
月の秋山の霜下りて　松
曙鉢に出来る鬼灯　文
五人抜持上て見二本成　董
二階の口押八　松

むまてハ浪の汲田の畔より　文
田螺拾ひに鉢提て出る　蕉
来合てちからを捨むおの試　松
子を抱く人へ方位気配り　文
太つくハ嫌ひといへる山の名　蕉
交代ゑハ門方一字ならぬ　松
縁梳の金雲に困る蔵の深外　文
疱瘡病して一炊据く　蕉
深居して数のひよこを育て居る　松
本をと定めしこまき家の方把　文
居ヶ候反古の漏浅拾へて　蕉
行くハ剣この峯にわかるく　松
秋更しハふ路もあるに月の岸　文
まれ庭にも烏毛掛ける　蕉
初鮭をと宮へ納る人の声　松
日和のよきに報ゞ詰ゝ寵　文
出り切に出る娘を書信て　蕉
額のし振さへ惑も風はつゝ露　何
去年まてハ此家も傍の家の味　文
霰のうちふ難をし山　蕉
蕗山や着ぬすへき時の立　乙良
宗卿の下く風に冴る月　夜桐
禁出しの芋売捨ひつゝ笑　良
おめての宣消をとさゞてやり　桐
一すしことふ広ゆる橋の先　良
楼に一間まかりける緑の日　桐
ゆゑ浪金入舩に流を持　良
傘ありやうたハ咲ていかね　桐
廓ていけりてゝ春やさゝる息子株　良
牡丹の数を咲せる人せい　桐
蓋霖門つきよる茶深物　良
恵子舗まへ宵くる月　桐
溝田も蕎麦てあひ浪時子掘　良
踊ゆへての手洗濯もする　桐
坂下にとまり往見ゆる桂井侍　良

東明りのきえぬ、雲隠　桐
掃きはる庭のちりもまだ甚　良
翠めく人よ引く女の荒　桐
酔さめハねられぬ水もやりつけり　、
迷惑さうに嫁は泣出し　良
いやふくし多福の宿と出来上り　桐
茶業畑に綿を植させる　良
間花とと来されハ法の障られ　桐
利発娘ハ留主のきゞわる人　良
新ち卅さハ胸の内と外　桐
ましいとも世にぬ鶏のさゝめき　良
山加茂の荷札余りなく門番に　桐
足手かゝらぬ居風呂の下諸　良
猫見るのまにもたゝいわの照　桐
翌日の志ゞえを早先く当州　良
藤蘿荒のこきもちかく座に来る　桐
おのふまもしき関城領り　良
本納とらへまゝ人々口又と利　桐
いかすまての夜納物の世とり　良
ひやを吸きらまゝ木の散安く　桐
猫居も蕨も芽ぶかれの世る　古
明月や眠ハ扇をねと法とる　古
宮あり一のしかけふ玉様の真　紫
明まりつく嬉蝶に蝶のひつ見　古
張箒のかまくり冬葉もむ流　之
蜂窠て机の虫も嬉敷き晃　古
董物ち兔ともにうれしゝもち　之
彼岸井種のとゞまる障も遊　古
一両前き町の嫁さゝち　人
安房とふ和子ある小部屋に　古
療も水きある酒のむし飲　人
餅茶子蓋も山崎の接待　古
印浪あるうふよりせる船頂　人
明安き月と秋来に夜もり　古
写菊に鳴く花も其の都鳥　人

扱ひの宿て宵の中なる身なり　む
声高うとしめる鴨の降るさの　人
咲むに籠れて家も雑書して　む
湊は汲みちには学の餅賣　人
捨利て何かわかず宵口の内　む
肥えは泥らねば淡水の流　人
つくつくり恥そて見らしぬ笹の松　む
浦の路の光くるる文右衛門　人
嘗て水附まくり上る素の　む
樹の作ことのむしやらやとけさ　人
末町は高き障く家も明暦も　む
飯蒸や鹿くて岩屋寒ふ　人
生季鋪に降る葉さくらの空　む
綿類に吹く雪鋪られて増る　人
八方作のまけたる盆の月　む
陸ひ八幡の踊子外　人
長うとぬけ扇も与風鐃　む
細うこまみの喜ね言段　人
年州也やる与出に着
蔽せんうりは女の中なく　人
葛峰しるとも時る出為雅　む
袒ま衷八さまる賓残　人

山の後宿るる殖て見ひ起　伯遠
秋の日ほそく船乃底焼　紫伯
代安の分降るる月待て　来木
錦も句ひのよるさも寄そ　遠
青のえて嵐終返て行證　伯
そくく志すしはとの了字存　木
水仙の花も山むきく活涯　遠
ひるく小性ら毒口なく　伯
了是の結納なゐもなるけ　木
先破りも流舎津瑞帽　遠
出るくとよめて姉き緑の鍬　伯
催の若くして出のねる慕筋　木
二の月の低くて雲もまた見覧　遠

西国筋へ見けくよんハ稲　伯
字がなの傍に筆法流る出来す　本
本繪合組て僉奉き侍　遠
川ありて七草すゝむ見え報　伯
借てくれさる方晴の膝ハす　本
八条も彼岸ありて出開　遠
足揃鬼のもてなさる人形　伯
熱茶に切剣くゝる埋火さ　本
もしの続をありちり水麻　遠
中将よみ婦はで見すうき世　伯
濡りくもあき撥子弾雨　本
祇園会結綾鉾灯の文置り　遠
天水桶に浸る町結名　伯
狗子よ狩で猫の袴くゝく　本
高て四升よ入る米の出　遠
旅の月すゝき志の記に柏泊芒　伯
店の雑ハ好くとの沸しく　本
わらくに壽川にしま婦さる　伯
手まくに浅の匂漆ぞ屋
被生の傍に旁席ま出て　本
よん営を鳴も飛くきりく　素
かれ見の間に花の姿のり　伯
はしめて霧も水に結帶　本

鞠も丈のあるす錦縫　幻芝
狗飼揚宝取出の月　丁知
採時ますれを稀を跋おて　芝
古宮のふりと古きり家　知
弦音の的場につく霰の町　芝
物ハそこよけと居り茶の会　知
舊網織さやらく細を侍る　芝
世君の紗をかとまくを生公　知
拂底家桂枝をめると拂途　芝
陣屋の河鹿を渡る河岸に　知
千寺の笈をかゝって佐後也　芝
素湯のかれん生蜻蜓くめるき　知

稲一穂菊の器に宵の月　芝

思ふ所にちる木の葉ひやゝく　松

鶏のなく時雨に叶ふ新酒　芝

民ゆすてゝ高名宗の達者　松

枝にされ出方仕に出の隠持ひ　芝

何うち宇津に指て見る笠　松

六十の春うら安ふひたと隠す　、

閏月のよる出料の紙　芝

あと遠いまの井の宇津家の夜　松

松もとて初音も盛る笠　芝

陰出し慈胸のやすき紀伊網慈　松

秋深て駅にてつひ　芝

網取る物に行くやうなり　松

出所松も写る　芝

繁肴のつけ以仕る物まま　松

古以併くつけし黄の　芝

面黙て見物を盛　松

鶏八直き浄せまりり　松

浅いう宇浄尽く椽　松

入ての船は多く出る空　芝

宮されの出ぬの実八出足り　松

谷家の虚無揺る腕棒　芝

〆くねまて出八入殊出甚　松

つれ手織のかゝく茶風　芝

秋立や塩に浮き鶏の恵　壺果

まさ迎ふ千秋かる二日月　呂川

旗震ひ花も実に宇治　青

升のもからね桂霧黄く　川

鋳代の水茂さる宇の方　青

ちからく空の入り出て　川

足絹のくる出八遇に度々入り　青

大元の業よ隣の気色の末　川

郡銀物のかへて小蘇刈る送　青

菊行もよるゝ船の浮み　川

引合手たる口遠き河内布　青

戸棚さへ也と何もなき月　川

鶉鳴のむら萩くゝる道入口　尭

よくあてし香のちらしさき　川

ほ休りハ粽折ほどの仮栫　尭

履打祖父のとなむとしや　川

大名まゝつる殿程乃も量　尭

水口紐ある帶結ぶ向　川

藪入を一家内の打かへて　丶

りのなとの伯母にも侍　尭

栗楢其をのけ出紫千葉たる　川

要害峠の呼く出り入梅時　尭

羽二重の綿子が隠し小紙居　川

末廣よのふ粧ひを見へる　尭

ちらくと椋の実こぼるゝ門の際　川

所白河の咲く萩にしら乳　尭

月の秋の内にね銭を借て　川

いつ成る鉄通る川　脇手　尭

飲さしの茶くも傘を打て舟　川

二かいはおちくゝ陽射の縫　尭

畑井の作りて豪の名付け込　川

鳶子雀のたれハも白かす　尭

物忌の捻を翻く宝蔵精　川

呉をとも丹き気の挫く也　尭

新夕めも丹あきむの咲白ひ　川

負くらくと蝶の葬ふき　尭

荒れ家へ小路迷ひや寄程　清甚

垣外にあれハ渡のくる月　丁和

四十前に一回の晩稿くらみて　甚

行捨に付る庭のとり除さ　和

是在家の風に来風不味精り　甚

此居てゐ今に来ヒを覚める　和

おもての盛に破る紋尽て　甚

荒物つまみてくらく小流　和

つひと一味の人に勝せし迷　甚

よめねらは出からゑら象かみ　和

庭の木にかゝる雨の栗　蕪
ぶらりと出る白昼の猫　知
紫雲をたなびく遠舟のうち　蕪
見えかくれ扇の文もおほろなる　知
秋の月鹿は出番をつとめけり　蕪
茶をのみて春のわかれの雨　知
折くれた草も丈夫に咲なく　蕪
このさみしさ家を出てひとりき　知
高楼の台から大きな西の果　、
我折て見する妹の筆　蕪
さゝなみの所に浪を浴なきて　知
霞ぬけし夜ゝ桃林に暖　蕪
画船にはひくらしける楫の音　知
おちこちの灯もとる遠き古禅　蕪
大ぶりの湯呑一つにつきのなを　知
池の鵜に戻る精性　蕪
書読も楼閣に上る寒鶏　知
薄にふれる枝に振かき　蕪
十日余り雨に会ハ旅の月　知
刈るものゝ中かうし蔭し畑　蕪
積本を取答にし細き竿　知
子忘るゝとくたちおほふしるね　蕪
袴の捲の掃除のつまに寄る　知
行衣の二つたらん二福　蕪
山よりもおちくる川の声涼て　知
窓に脊をかく衣をも寒さ　蕪
矢を放く花かしての春〳〵　乙良
中絶して八あまくも山彦　西曠
月さえ蕗は青麦水打て　秋帆
杉の森に深篁して出て　良
雲をむなしく一陣の下り中　曠
足袋の何やらの中を不動　帆
吸ふて届る也に利る玉良　良
古よりその国にはたゝねか人在　曠
浙靖宗の堂を殺来て何て　帆

きゝみるけふ聲のせんさく　良
安堵なき旅寝ひめ付り子　暁
待宵ぞ合点させる河の月　帆
庭に千鳥も英流む深ゐ露　良
盃を添へ給ゐる市前　暁
落つゝぬ菊か地もうる近る　帆
取時療りの淺く六條　良
道者のもろ友語りき吉野　暁
凍りの神風をうけ流天神　帆
厨子あらぬ崇高をなせる匠　良
一線そ世分る以勤番　暁
棋料の庇をまじ荘巻ゟ積て重　帆
水なる風呂の楽同して来る
手まずらて従者のもとれ外に降せ
讒言て勇猛剃刀
戦の陣志ゐゆくさしつけて
玄つのしきて雲関子の
人をともて宍積間屋
庭なそうのきかる利用の一おゐ
指を歩そ勿結ぶ亭るつ月障
近く時をえくてうまし莚の音
浮屋に浮て碌一樣利
仕法の替ゐ宮仕蓮替
海をもねうぬ日掛の行ゐ縁
赤つくりをする縁の極出し
咲きに百料理の汲緒に　暁
ゆきうみけふ花の花春　帆
草木ぬ秋に声行る秋の風　禾木
ゆふ月あらしのあちこち泣そうと　杜若
西瓜割る信濃と岩の面影して　遊澗
追るゆり花水をうばい状箱　本
おもふ通り寄をえ流る車　之
そ降さくぬ方のうかさる　澗
二たびのうち見わる後番鶴の声　本
去りし後々に遊び麻つく　之

丸[illegible]は寺[illegible]をあつかりてあり　閑
拾ひて垂てつけたかんざし　木
[illegible]の[illegible]庵の僧　丢
いつも納て[illegible]かくさき　閑
笹の葉[illegible]の寄　木
合羽の袖[illegible]けり　丢
川[illegible]のそと[illegible]峰[illegible]　閑
眠[illegible]の中[illegible]　木
預りて[illegible]の枝　丢
屋根[illegible]常[illegible]　閑
此寿[illegible]　丶
仙台[illegible]　丢
おりしも[illegible]遠[illegible]　木
[illegible]　閑
長尾の隠居[illegible]　丢
焚火の上[illegible]　木
[illegible]目[illegible]　閑
[illegible]　丢
[illegible]　木
月を[illegible]　閑
梅の[illegible]　丢
[illegible]　木
[illegible]　閑
竈[illegible]池　丢
[illegible]　木
坐禅[illegible]　閑
小の[illegible]　丢
[illegible]揚[illegible]　木

庵[illegible]木槿[illegible]　幻芝
[illegible]の[illegible]　下笠
み[illegible]月の[illegible]　丁知
[illegible]　松楳
ひと[illegible]の[illegible]　笠
[illegible]牛[illegible]　芝
[illegible]　楳

稽古碁盤もあかいき忘てゐる　松
千住へ送る舎俵の初入船　笠
菅娘ひのミ藥あくなき　笠
よそ見てハ志れ乃てなる物思ひ　松
行来の福も寄せつける矣　操
秋立や武士かさきの浪花行月　笠
鬱ぎつく判刀結路　笠
初汐の上の潮しもあつくなる　操
唄の声もする香の長持　松
米屋へ出の活居掃よせ　笠
くやしさもおく裏の夕虹　笠

手向くるものみ浴ねや松風　金用
垣の木槿の落き一面まれ　錦長
水をとる京に見ゐる風花　相堂
西行ハ菊活箱をむしる　用
猫の出る陰しく堂の津や今く　長
油菜をさみるさし帰の出花　堂
冬の夜今宵居蔵の座に川ゆく　利
形の寿悪なも倉掛く私　長
酔とゆし調子の高い小室節　堂
ゆり起されて財布ある　利
蝋燭は安かりける森の下すゞ　長
きらくと月村岸のつる喪　堂
張合て離縁せる屋敷町　利
撞木の杖手あるゝ中老　長
泣猿の吐はなれ行気あく　堂
稽古もせぬに揉み胴突　利
八百八町に一度もふくあも　長
旅のかりあぬ留守を抱出ん　堂
ものゝ浪花東に行るゝき　利
村中寄ての鏡まて見る　長
丁寧に婚結むたる相の筋　堂
渋茶さへ待兼る府言地家僧く　利
それきりと河の森巻を押まかぬ　長
あかるさ一日寄てならる恩　堂

居さへ行けて立派な賃扇　羽
船の櫂子もうつきに成ぬ　去
花に近き宵に聞くなと仕る啼　堂
茶すゝ居も華ゝ数白　羽
枝葉に稲を捌く月の影　去
しら雲に隠れは露にはきすてる　堂
備中すけはしき力を出しすれ　羽
羽織の肩に小葬の柳き　去
乱れたる信濃犬の残り来り　堂
前ようやく生し暁の業　羽
咲むにはけに燈のもさ（芸）　去
おいたらくまの小舟組り　堂

新家露庭

人逃ぐて思ふ事を晴らし露に暮　丁知
月も八朔のつきにねぬ窓　内楚
鴨鶉秋をも知の小様にて　去
末の刈花も見し畑つゝつく　楚
峰は八雲の雲のうちに問合せ　去
小盥の村に瀬の行きる家　楚
去りとして恩ある船は水棹　去
咲きよめさに左あるほ帳合　楚
旅うち袖よりに妻も泣かれ　去
すゝ雨まてハ雪ハ提灯　楚
行き送る船裁つて舞子船　去
氷生をうち何さ宴象をもちて　楚
ふ性まも合鉢さふ梅月の秋　去
四五人等の新宮鷹ひく　楚
さよにさも此は角力に踊さく　去
座書は風も立脇る屋根　楚
清ら空ら根ふせ何む咲て　去
扇子蝶も耕ふ牛の背　楚
眼も洗ふ蜂蜜も表ふ咲く　、
秋田出産の紙ハの丹並　去
衣の出荷売もと居枝子干し　楚
眉も知りねとかへるめのけ　去
蓮の糸を渡る仏の絵の夫　楚

蝶に追しよせて並ぶ穀　古
幸ひを告し松の呼よして　埜
今せの亭主も飲む宗祇　古
越のいるともうら艶を持たり　埜
袂つゝ幼なれ硯ぶらくる　古
かまく入其角の露も秋に笑遊　埜
ちりみいしさて菌出つらんせ　古
菊をも世よ砧の槌をゆるされ　埜
中くみしぬ白すぼ色まさん鉢　古
西鯨よ桂むちて浜塀田り　埜
石いすこうゝりの海苔　古
淀川の舟を舟なへとりて　埜
儀は白ふ様の日行くり　古

踏先をいが咲くやせ香の月　碧山
水をあるゝ鴨の洞さき　貞山
炭俵も釣屋の口に寒うして　流芝
除の室之まふ森極てし出すて　金池
花人の花出る山も花の揺らぎ　南耕
菜の花かり行てさゝぬ菖蒲　碧
底まで凉る夜の涼船の内　貞
ひよりよつく恩もまし桃榁　芝
粉めさみよつくせぬ摂り　池
往角に見ゆる富士の籠え　耕
猿岳に雲て白河芙蓉　碧
明さうさうも暁きさる無月　貞
村にも合ぬ祝ふの城の梅　芝
ようしの節第いかりぬけの浴　池
成努る且能てかすの世く暁　耕
明義のあけて亀の子茶ほ　碧
浮唄のむるゆけるきしかけ桜京　貞
松の人よ通ひとく初年　芝
月わてる旅にてばにさる屋霧　池
急をおれ花を祝ひ付る　耕
追付かは遊そをきま群島　碧
利生ちなめな流れ鐘音　貞

雉の尾も恋しくハ生ぬ妹の手　芝
小車のとまりに我を濡しても　池
蕎麦汁もらふて樽をはかす也　耕
よひかはゆきこの女する枕かな　碧
近江路は湯温泉ゆかしいの井　貞
まつこれの名盃茶の花盆　芝
上弦の月は時は気もつよれ　池
秋を老その関のいのり屋　耕
こつてりの梟睡切れて月也　碧
宿の中まつくを播る葬礼　貞
まつある来別の衣被打結り　芝
一吹出る押出しは東風　池
跡の寄ける代る男まちて出し也　耕
骨折れこそ番からら　碧
女帰ちたゆるうこ浦の音　夜桐
屋敷しの月は押る夜寒　乙良
代風ものしみ操をうるせくて　桐
菊枕の外ゐ何か当ろく　良
旅籠屋の当る夜は深ふかくかり　桐
源氏てあうたぬるも雪の朝　良
左せのしの口やかせ昔の嚢　桐
猿のまゝこのかたお手虫　良
なき交の降るをしく深くみ　桐
縫ゆうち消る出火の薪　良
荻の手紙かとされ出し別し　桐
出羽通しこ月の雨の門　良
癖ありて浦出る猿術系　桐
寺でも荻ろゆけ給る新縁　良
宮もへと深く是れたぬ舞台　桐
きかれもちてゆぬ花の戸　良
おかり拾ろか道の行の風　桐
畑へ下りする歳暮　良
残花に来宮ゆ花の風　、
まちと広の言しかみさき　桐
本時の通る夜の恵の桐　良

誰のうら恋しく人は生る娘の事　芝
小春のくもりは残せと滋くまで　池
蕉翁とはいへり挟てかゝせし　粹
よみかはのをこの世る報本　環
近い須磨温泉ぞまたいの井　貞
まつ宵ての夜盃若の金盃　芝
上弦の月は時は日気もつよれ　池
秋を寒くる潤のいゝの丹屋　粹
こつぼの鼻緒切れかゝる匠　環
富の中生まれを侮る葬礼　貞
早稲来刈の古殻打綴り　芝
一吹もを押出し東風　池
跡のみか代々男子をしさせ　粹
骨折るてを番せしら　環
々啼も夜中なくなく遊後音　夜桐
屋敷しの月は明る冬の空　乙良
何風も以になに操をさとまで　桐

菊瓶の中も正何か寄るらく　良
給料尽せ當ちも淀凌ぎ手つかり　桐
冴え寸あらに嫁るまで雪の杯　良

車休めてふくる口きゝ　桐
たゞ椽と庭のゆするゝ鹿の　良
巨燵のうちに媚る眉炭　桐
莨桶の蓋に名付置ふ程つけ　良
左官の子と似た寺の詞なり　桐
駿篭に乗呉かりんにつかれ　良
見ん処てらよりは長く以樣丁　桐
神の町さへ夜に下さる薯の内　良
ごまと俤して糖ぬくしあるる　桐
透風を障子那けて家合屋　良
出みくるまくらすまむ思の秋　桐
積さしと錦き衣に哄好　良
蜣完るゝ医者のぶ郵忍　桐
活と海老を押する残雛　良
志先の町よきなのまきや菊当　桐
行の末ふわしぬ雪のかゝる雛　藤
能尻の鴨の代のえらぶ門　菩
もまれて親のすりよる姿　垙
移ろふ赤らめゆふ暮の空　藤
宵の雲月の出際に吹掛し　菩
すゞしき冬のこたつも芸留　垙
打よるとまた袖ぬれるゝ海　藤
見る人の家のうち寄せ来る寄　菩
おしつけて遠く来る旅の夜　垙
いつもの縫の風ふと見なれる　藤
一本も居ない鴨川の下上り　菩
夢時の茶ひきに若の附出し　垙
ちそうかる柳も見えて流れ　藤
せい秋の傘の雨まくる明　菩
二つ三つ軸给ちし種瓢　垙
僕つゝら弟子叡ゆるふ　藤
わんのふたとひる切山つばき　菩
双つ羅の毛並そろひける　垙
手まへやな芸へ出月を後菩提　藤
嶺も内輪とかんゆる内方　菩

つめしき屋敷住む重包　堤

芦折さゆき川岸揚る唄　藤

折ふし八ゆらせる松の陥出　蓍

掃出る蓍子葉の寵との　堤

入側も出世ましと整合せ　藤

さつさくとまん祝福のかく　蓍

恵みぬ育た隣の岸菊襟帯　堤

身をおつしらへ通ひ大八　藤

かちもう隣宮月に興がり　蓍

おもひの外に谷細の川角　堤

河魚鉤の丸きく猿も打仕て　藤

庵さ書以綱つけてある　蓍

平生八立切て虚魂口　堤

身軽く虚近東風吹ける　藤

出歯引き雲て田保赤く　蓍

椀来て桶の水梅の主　堤

風に林まで続く枝　寄稽

卯の花や庵にかかる宿　資香

岸までいつも落ぬ淡彩て　稽

揺る稽もかり情むれ　香

いつもの扇むら扇高まり　稽

策立出屏紡屋のくがり　香

茶大根も手く付の信まで　稽

出宮以譲代女房　香

挨拶のくもに勝もまつけ　稽

母やらも今しぬ義理へく　香

吹過風譲りくまき紀伊海で　稽

不二回行の二ふりに来る　香

流くゆる面の宮付月の七日暑く　稽

青葉の嶺くやと寂く　香

手前の様で五人口　稽

出おくる塩子賀の河まる　香

既かの気の風く乗て蕊　稽

妻保つ業る縮の吹きの　香

圏の方おぬと出生及其の外　、

つゆしさ屋敷住の錦垂色　堤

若竹さめき川岸揚錦唄　蘆

折ふしハゆらせる松の油虫　葉

掃出す落子葉の花くらの　堤

入側も画世をはなし整合く　蘆

さらさらともまん祝酒のもらく　葉

忠ねる有小庭の出来る松當待　堤

寄風かへしそらハ通れ大八　蘆

かもうし傳宿目に與て里　葉

おかひの水岩田稲の川向　堤

御魚鉛の丸さ揚を打付て　蘆

庵まで出以綴つけている　葉

平生ハ言切て血網店口　堤

寄軽く肩通東風法はる　蘆

虫菌給ふをに係ホすく　葉

提来し桶の水加み立　堤

風之林其屋は以く数　字禅

菊畳に急ぬ嗅なき　鶴
足代を手繰てゆけ博労講　雪
兄弟ぬ妨嫁嬶なくふ　鶴
垢離さへあつき旅汗の柾も味　雪
追しみ明を思ひ出ゆく空　鶴
宰相が折のはじき流まで　雪
みかへらひかえて侍の雛送　鶴
よみ吹の絹を流る祢宜井戸　雪
猿の変へ大和へ追ふまい　鶴
月さす窓に古き荷椿　雪
うらみ八今へなれぬ滅なり　鶴
咲やらもしてある侍の打る菊　雪
火入をや傾かむ灰のこぼるる　鶴
巳刻前佛檀の磨き物　雪
雀の聲ハいつも旅中の　鶴
村里を通ふて出の立ち　雪
水田ほそく妻ぬ山新　鶴
若水の消えとて妻を萌　禾木
出ける野路を帰　古来
二三四ほと孫の湯屋て　木
何所もしとの袖傍此札　来
明月の通りに晴るる千鳥　木
身は明るい姿て新味　来
根性の見えるて商取　木
京大坂ハ夜の見物　来
清酒は宴にもなき迄　木
投出すてそれ来ぬ筆　来
躾より旅へ帰子硯　木
素知りのは井水　来
過風の跡きよめる二日月　木
捨ぬ燈のへの雁の声　来
扮りの二夫をじき五響　木
床下裏にはさうハ冬　来
寒に来て宿の雪　木
寒さてのへの雑の市まで　来

さら／＼と通ひ路もなし出来野若　、

標結窓に縫くる衣の戸　木

ここにて本患治ゆ拵枕　夷

代様とみてそうけの命以　木

我ものと言ひし女姫の添寝き　夷

ゆくへら出てよの一抜毛鐘　木

換続にあとも樺ひ家累紫　夷

拡つまくるおかけ八聡の衣　木

吹あらし鳴やくまとてやる施屑　夷

天秤持て居合はしける　木

肉の枕新破題を寄せし　夷

障よりまふ下りし氷霜　木

明き門の露さし落とし含散　夷

禅り塀その篭よ所白　木

身は軽しおもはける供嘆　夷

雪ところに尾の地雲語　木

小猿手に名色郭まんの生葉　夷

猶信し蔵りうへ秋立　木

咲も衰ぬ庭芯の接秋風　南枅

とまり籠の揺く露浮　流芝

河岸螳螂の立ち出搦む　呑池

俵にあらぬ橋越る　碧山

市ある庵の源渋ゆくに自の道　貞山

老ぬ旬ひの花に葬葺　枅

以りに通ふ検見の下向く　芝

そ志り苦敷てゐる土の雲打　池

商人のとかく軽くなる小路さし　碧

結ひ覆ふ日あたり断立　貞

入相を疑ふ網にかゝる世に　枅

いくら生てもまた鎚く筆　芝

生半な物のうへ私用の鉄　池

宿の古おさ強遠く落下　碧

縫の牛結絵ふ抄ゆ懐も状　貞

出局よく結むえ良いひ次　枅

日ゝよ寺るも御砂女蛇の峰ある　芝

釣ゝ峯の鐘うきさゝしき　池
生憑蒙ハ於ハ参も賊ら来　碧
丁雉の手本八のくら如く門玉　貞
筆のおける最新気遇まし　擢
来る日八あわ夜も旅さね　芝
みそらも深き立ち寄とへ　池
枝のくのけ八花き失くしき　碧
梯先く出書き掃の府通り　貞
積みて二合結ひて八実鉄　擢
盗むくける出村の年首来　芝
好ま好きたる鏡の燈籠　池
宵結首の雪と北ら有の晴　碧
つよく咲ねれ秋の風青　貞
南乃花結筆海か染め如く御　擢
足長くいやて筆手にさせる　芝
砂よ傍流の海著書きへ　池
大きれ石の様よくつまる　碧
手植の八くさ月のかさ月下　貞
あかれ咲く様の花の橋落　擢
茂たかくめ々たる方に々みまさん　西晴
きる寒り積く帽のくのくり　秋帆
さし絹まき流る花れ外おいて　九良
錦ほとめ先る月うけ　晴
柳枝の名光りまゆけとへ夜をとひ　帆
生別道晴々手新海の行る　良
ふ猪手八来て小禄宜の押つくく　晴
錆はこもかし鏡の兎かまし　帆
雪手彼雲の舞台つ月城後獅子　良
傘もめく好ミ雪なるてつく　晴
攻兵をやさみ雲さる木端綱　帆
別き兼骨結ひてや夜お展発　良
月の雲漢すくもそそ八月　晴
窪地蒔て房の作りつく　帆
秋先ハ湯女もあかく村洗湯　良
宵の花咲く燕の花々湯　晴

釣一蓋の錏るきさらぎ　池
まち家ハかるハ參も賊を来　碧
丁稚の手本ハのとらぬ門出　貞
筆のおける最期条通るし　群
来てる日ハいまかねハ枕さへ寂さね　芝
みさらも太深子を夜くすかきおし　池
板のくの什八石々去くしき　碧
稼先へ出来る錦の本所りり　貞
積て工合結ぶる丸実綴　揮
殺せてく付る出村の年貢来　芝
好きぬ寄去る鏡の暗鏃　池
宵祭昔の宿とおる宵の晴　碧
つよく吹秋の風音　貞
南方衣結東陽かさぬ仏拂　群
是彼くいかて業子いゆする　芝
砂よ生の深の通海若菩て　池
大きれ石の堤まうつまる　碧
言はのくいのくさ去の下　貞
右わり揆く接る家の持参　揮
注もあくゆきる鳥あくなる　西曉
きる家り積て椙のつくり　秋帆
さし旅手去れる若の札母を出て　乙良
疎り色のある月うけ　曉
棚極のた光ろ計をこて夜出し　帆
生別道場婿子新婦ゆえる　良
ふ積子ハ来て小袖室の拝つく　曉
積ふこそわき鏡のぬきし　帆
露子作て舞ふの新城浅獅子　良
傘もの女子空結ちくつく　曉
夜鳥めをも出きる木綿　帆
別て年骨結ぶ後おる座敷　良
月の雲深くもつる　曉
産地高て馬のかりつく　帆
秋先ハ満女をた寝む村洗濯　良
宵の声[illegible]の声　曉

さし肴八むさと空の根太椀　帆
ちらちら雨に桶に拵る生海苔　宜
搗結の棲やう蜂の巣を張す　曉
何の危世ら志ら出臍子　帆
美しさふは山王の祭礼　宜
そこを過てもきしる車井　曉
蕎麦成武蔵[illegible]雲[illegible]　帆
気香もやうや橋を過[illegible]　宜
殆たらるわふにいろねのやまる　曉
炭置便も先のこ動[illegible]　帆
借財も住持[illegible]の付　宜
奴豆腐ハ皿のあまし合ひ　曉
目代[illegible]　帆
刈跡[illegible]稲[illegible]　宜
暁の[illegible]　曉
[illegible]窓前[illegible]　帆
[illegible]　宜
[illegible]　曉
閑[illegible]　帆
咲[illegible]梅[illegible]五加木[illegible]　宜

君の押[illegible]　丁　和
微[illegible]　双　居
[illegible]　和
[illegible]　居
[illegible]　和
為[illegible]わする　時　居
新宮[illegible]　和
せ[illegible]一百ハ若柳[illegible]　居
船[illegible]　和
法[illegible]　居
[illegible]　和
升[illegible]　居
袖[illegible]　和
被時[illegible]　居
[illegible]　和

五穀をまぜて売る流行せり　居
柳箸の雑煮ゆるゝも初春　知
きる程は皆畑よりゆるゝ物　居
精出して中刈仕舞の咲とき　、
酒に酔ひつくのまね拍子　知
雁うつり手札と譲る土産物　居
いとまをいふて寄せて念珠数　知
三方は菜園ちかき進り　居
お通りの後の其名ゆるまる　知
賭的のくわん銭矢の隠し金　居
農夫は足も吐を耳りと　知
あちこちと仕着小袖の単帷　居
かくし井戸の涼みくく金　知
明星につい咲く落る月潤く　居
出水して花のれ咲萩　知
本から汁かけ古代蒔絵巻　居
妾への金は古くて望る　知
いつもお守護幸図生あけさし　居
雲のちつて嬉はなる居　知
生き姿は家を見ると出待　居
ゆかり許さる処の行る祭　知
茶屋へむきむき尼僧つれとの　漢物
柳は雨が斗に立てる　漢岳
毛羽織を奥の重ね出来たる　物
釈迦も入ほとけし海のさめ際　岳
所つりや雲に浮く天井月　物
本の数々夜明す勢つく　岳
噂して清ん氣けり秋の蝶　物
紙以で書きくるゝ不眉　岳
作の船いつも山家の末祢　物
近づく猶生ひ青みある　岳
味ぞ何百人合せ東に羽織　物
甘煮やかの月の猫ちら　岳
女夜の関寒て出舞る風前　物
菊根分して花に植ける　岳

苫葺様さへに嵐をしのきて　抱

木もそよく仕舞に時雨れ　岳

熱田の丁寺守ちる雛の宮　抱

蚕の支度にかゝる東風　岳

うくひすの鹿縫は鶯の巣守けり　、

あまさかやさしれて証来けり医者　抱

東表に合はうられ石場縫　岳

夷講過ハ多ハ下宵　抱

宮様参り縁さ乞猿楽付之　岳

茶も買ふて仕舞ふ針箱　抱

千の内出切く粗末鉢焼　岳

椎の木つしまて積雪の蔓　抱

たらふむ吉さへ咲き家ふ　岳

深川ハ町はなての一筋　抱

猪の作乃子を給そ月の秋　岳

角の東く分ら風はけりけり　抱

荻谷の形も崩されて抜出し　岳

くきく出ゑぬけて推行　抱

蛸合さ物子られ首つりん　岳

坊の杉水の上く西ハ凄　抱

咲桜ふも年一ヶ所のく　岳

横たく奈もそて押うける衣　抱

鶴の梅何も交しぬ白銀　禾木

雪おちらく叢たさへゝ　幽室

家業清き経済の内のそは世　木

かな数で十種とこ覚る　室

暑をしく秋秋さけりふ蚊月　木

婦も蝋燭も一汁の帰　室

はつぬるく来さぬ濡　木

出くはつる紺屋職人　室

二三貫花場通ひは藤掛　木

はしまる出そて桶の上　室

なかのこなと世話子標はもる散　木

声の夕く鋭の古池へ来る　室

月押さえ安けるはあり雲　木

毛見のすみし田はうらうらの傘一　室
紗綾と黒き絹や羽織し着ひ　木
縮緬ほとの店の悪　室
わんめうと京町口の出後て　木
宮しろの猫さかりやと聞　室
けさ暮方錢くるへの手役に付　、
精好布に置しの衣　木
宮仕舞に昼こりの四季手　室
蕣の垂くなりける旦那　木
降りの雪まさしくに年の暮　室
咲ける花も後のし消る桃木　木
秋の夜す半秋頃りに鐘を撞　室
持佛の光のてもしらるつらの参　木
櫻柳ふめの世て首花の紀後儀　室
寒鉄淀しの御さん手にくも　木
黄葉の金箔掛て月ほり　室
生く咲の藪は茨の姫かひ　木
温石もらう作りなかのほうかり　室
台風花の所の葬　旅先作　木
鞘をさまり田畠に細のきよと　室
住よき竹て立るる番所　木
昇ゑて孫宜の家るすむの民　室
大盃をくつるすの虹　木
菫花者く表める雪の寺て候　業
ちよつと出て今年の蕗の芽　業芳
書済て堀くく根挽て　業
代りの用やる急に見つかく　芳
師掃の申刻め床を待る月　業
言入りて夕への膳のもの　芳
何織の幸くとう歳の暮　業
人参して四季の陰くらひ　芳
給帰て部るる医の法寿封　業
子のは後を偏も存さぬ　芳
ありてと文るに済る根有剃　業
歩くおのと世る渡し場の月　芳

毛見の衆見はかりの入傘　室

紗綾と馬に積ぬやはし蔵ひ　木

縫屑かゝる唐店の恵　室

わんゆうと京町口の出嫁て　木

宮こゝの猫まさかりや土産　室

此時分鏡もうつゝの手保子付　丶

鵜飼は闇ゐの夜　木

身住葬ゐはなこける曙寒　室

蔵後の姿へ見せる繕霜　木

傍のくさきれいに年も暮　室

收めるそばのし消る狐火　木

歓にきと言秋輪りに鐘を撞　室

措佛の女のさしかゝる居　木

機柄わりて居合てた彩儀　室

塞状腹一の御まんはこもぬ　木

棗葉の金看板も円ゆり　室

まくらの枕は書る嬉ぬい　木

温石もろさ何かあるなはるあり　室

はやきを燗徳利に隔てゝ　叢
鰹一本貰ふた家の秋　芳
菊の花いろいろ咲けり蜻蛉莫　叢
落しゝ衆の影が札　芳
人先へしとむその組申り　叢
押取て笑顔を作り帰る　芳
義太夫丸で百度て仕舞　、
子ら皆みなして畳る一座　叢
市に出る木偶の下地を拵て　芳
鵜のしらせる飯や煮　叢
待兼て始めし祭の霜鏡　芳
採薬の歯の描る播　叢
明稍のほけて已めとの喜兔　芳
てきんも来て霰降らし　叢
へたの寄合船を運び出来　芳
四国へ一度も見ぬとの定　叢
去年に肉の出来の勢　芳
[illegible]　叢
二人して畳く物を出花[illegible]　芳
親も来て年のめで満ちる　叢
所から来た[illegible]氷も足　芳
縫の裳て味もなくての流　叢
寿抱か今蒸夢[illegible]出　芳
露の風を店盛る実　叢
七日[illegible]出[illegible]鮮先　丁如
座[illegible]雨[illegible]　言山
折々は流の売を飛てて　得蕉
飯握りて[illegible]迎え樊　如
江先も[illegible]月の窓　山
西仏のつるしとめて重　蕉
新絹も古く濃出た中内　如
真の[illegible]物売　山
降つゝく[illegible]世[illegible]と　蕉
[illegible]日余　如
[illegible]腫稼あり　山

ゆふなき烟気ぬら手ぬれて　業
嫁入の番は座の宿秋　芳
華やかれハ名くる鶯の精霊真　業
旅しく雲の尾の屋が出れ札　芳
人先くくとむの縄田り　業
切りなく笑度もく揚せ場屋　芳
数入丸て百本て仕舞　、
子毎うかくし墨るの産解　業
市にある木偶の下地を焼て　芳
鶏のうとらす鍋が府煮　業
猿蒔て扱れぬ桜雪のかき足跡　芳
旅去の空にはる為乃播　業
明掲のこけて已めくの者の色　芳
守さん子春て霰ののほし　業
へんまの番合船は連り出来　芳
四国ハ一度も見ぬとの空人　業
去年とハ肉の出来ぬのかす教ず　芳
古は侍のしのの砂こと　業

旅の御遊のおほえ出る　蕪
望の夜は月まとかなる露さむき　和
鰯もとくうれぬさへ秋寒　山
寺もよらてそを遠へ行小柴垣　蕪
藁刈かへのしらかふ体なる　和
拙くと病後思ひ出来ん　山
様体もつゝくる初午は今　蕪
人数に余り耕る鍬の恵　和
ちらけし筵をそつとまく手　山
かたらぬ女子の来て移る院の奥　蕪
永田の秋に京のくすりきく　和
茶屋に変る寺衆を携へて　山
姪つくろひのたえぬ墳　蕪
船つなき小虫清ひの夜明　和
筆を沖の春み通りけり　山
井の中の虫蛍の毒を出しけぬ　蕪
菊ひつよゐ屑継は書細　和
片側ハ秋の行まくれき月（月表き）　山
浪のうへ一畑並ぶ宿　蕪
畑物も大抵ハ売る風祭　和
綿ハゆるみ先ともぬ小盥　山
去年の尼やつくる庵の留主　蕪
耳ハ撥ても鳴を忘れけり　和
恋ハ宮さへ見れとあけし寒空　山
妻の名を付は見てる隣笠　蕪

山の竹ハ尺ても箒也冬の水　余池
わすれ〳〵年経る叢隠　井梧
手細工に蝋の経緯（タテヌキ）深く上て　保之
彼のめはに飾の礼を思ふ　池
月は宵下雲迄ハ晴わたり　梧
木槿の花はかつ散落やう　芝
案内に出る多数の秋寒　池
冬の風牧郎のさはりとせは　梧
挑灯を消しなきて舟を待　芝
舊くに宿るは京出の里　池

別て来し蕗の子貴ふ新らしき　梅

仕切あつける一番礼諸物　芝

物のゝ藍葛降る月明り　池

峠より出しさす谷の紅葉　梅

まくら元の足ゆく藤のゆかり行　芝

此所へしまでハまむも四五日　池

当去移さる浴衣つまぐ彼岸後　梅

もとりく茶屋をこえ流の香　芝

百合の根ハ出代わるに極ゞ世の色　池

大工さゝのくみつける餅　梅

お袋の虫にあれはてゝのり　芝

言出して後ろへ忍ぶ春の朝　池

寂しき家に芒の風の吹あふ　梅

鴨の羽音に渡つてしぐれ　芝

ましらも来ての甘き古き梅　池

てらあつて湯の立あ像　梅

川として幟の先へ出し雀　芝

月八日也てれも多い鐘　池

ころがして佛へ上げる饅頭の餡　梅

江戸の芳紅噂ゆく　芝

菜はりて貴族伯父ハ三先　池

宗匠をめてかゝる菅替　梅

以てあ本と借出して壺　芝

鍋しく魚の鱗ときす　池

一吹にまつしくまの撒かく　梅

後の丹を吞るぜのはくゝゝ　芝

手のひら出かけて柊の内　岩推

茶もちくまさ繊ぞあ秋空　紫人

江戸の京姫の路地を出　推

氣性者旅の支を仕りる　人

請人のひらり塵さ川の月　推

茶店置ハ動かけし魚　人

九年正の偏に入る縄のつる　推

押切判の石にまいる　人

三味線の世を恋を忍ぶ姫君　推

別て来し森の下道清新寺　梅
仕切たてける一層結構の[illegible]　芝
物の〻蕣稲咲る月ぬり　池
悦より立出さ誥の紙きく　梅
ましく家の足袋の嫌のかり行　芝
比ちくもせハきも四五日　池
世当詩さ心ぬつ[illegible]く彼岸過　梅
もりく[illegible]をて和泥流茶の雪　芝
百合の根ハ米代ものに極ゝ世苑　池
大工をこのみつける餅　梅
古翁の咄はなれハはてのり　芝
菖出ひく続ける居れ　池
宮〻宮に真塚風の晩[illegible]　梅
鴨の羽音に擾つゝ[illegible]り　芝
ま〻紙を売ての[illegible]る[illegible]　池
て盃みくつく漁のさわ[illegible]　梅
川としま機の家〻ふ蚕[illegible]　芝
月ハ也アくら多い鐘　池
三ケ月て漂つゝや[illegible]の細　梅
江戸の[illegible]時[illegible]く　芝
業は[illegible]貴[illegible]伯父ハ[illegible]　池
宮[illegible]めてかゝる簪替　梅
[illegible]水を[illegible]出ま縁て盃　芝
絹[illegible]のかれる[illegible]　池
一晩ま[illegible]の散れく　梅
後ら[illegible]其のりくに　芝
手の[illegible]の旅[illegible]の内　岩推
[illegible]　紫人
江[illegible]の[illegible]地を[illegible]　推
氣[illegible]旅の[illegible]　人
[illegible]唐さ川の月　推
[illegible]ハ[illegible]　人
九[illegible]延の[illegible]のつる　推
押切判の[illegible]　人
[illegible]姫[illegible]　推

色移えさくあせし法の箋　人
寺の経水出し宿の月はなし　推
追ふて鉾の先にて取りまける　人
婦房の跡も月に舞ひ取りて　推
かはりゆく帰りぬ約束の秋虫　人
此ゆれぬ如くに向ふ南蛮船　推
鄙ひし唄て豆の粉挽ひく　人
ちんからと膝まもられ近衛の器　推
植こうつらと若みしめちる　人
凡苦しさかり結つ迄に網代　、
汐干は紫の十香共垂るゝむ　推
六鉢て今は女人に文出来　人
冷たくなりける祇經の上　推
陣和して古き貞女の通ひ路　人
乃けてよりし墨の名に水仙　推
件細の付て拭かしに煮　人
海のやり取家宅の極　推
きりもなく宵庚申の人通り　人
有るへくと風見竹吹　推
須のさまき袴の緒まくら　人
其の中で錯若ての人形　推
古ゆくてもり倹もと名字告　人
艶ハ和泉まで付る広書　推
花乗けしゆめを大かはら新る　人
お城の古雛尻もゝくの　推
菊の花も秋時の出に似て付す　人
よれ添ひの日寺葉かり摘白　推
見届けておくや茶の初桜　尭潤
須見かへせとおつまの若川　青我
材木も表は儀に積上て　、
菊六ツ時の江風呂は満済　潤
格子のうち好む青き月明　、
菜をも摘捨る紙の野数　我
開きん江おもん仕舞の盆之白　、
よく人きれし声の婦お　潤

冬籠ゑさく寄せし法義　人
壺の六経水出て今や水は淺　推
追て鉢の先へ行ば寿る　人
蝸牛の殻も月に奪はるゝ　推
かけ置く噂ね縁の紙虫　人
昨日なる如く江戸町南縁寮　推
鄙びし唄て百姓の紡あひく　人
ちんからと眺むとれ過菜の器　推
植こみつとき声かし出ちる　人
凡書にきさ刻り付つ遥に細道　、
白手拭笠の十香出垂ゝむ　推
六韜て谷の根さ人は文学華ふ　人
谷よ末かう付る瓶緒の上　推
傳称こさも兵多の通可数　人
見付てようし葉の多く水仙　推
付網の結さ手拭かけて煮　人
酒のやうなる家宅乃海　推
きりもなく宵庚申の人通り　人

悪さめの古屋住居も蟋かり　、
巨燵の上僧人合ふ手の筋　我
船頭の因果咄しの念の入り　、
松の鳴るに青くしし吹　閑
小本左に薪子峰に嵯峨の月　、
唐からく極のさゝゆんさし　我
談をこに涙く支き鳥の鐘　、
むらわかく面もわかく　閑
絹綿の涙取つる出代り　、
抓こ居たる雛のおまへり　我
勤ひの孝く小乗る無人　、
慈悲の燒く錯顔もする　閑
資は森の秋越の大師参かて　、
掃除も人を級の拘る木　我
門に寄りのそうくるる医者の寄　、
又様すくくまされは行　閑
学の義傳授ん歿の志かさ　、
夏むちくける新墓の寄　我
多さも数好に迷ひ勝ちに咲　、
たそての小月に縞の尻撚　閑
牧童に渡舟一荷持つかけ　、
きつく角力は好な小男　我
洗濯の花く成る宵の雨　、
夢ともみなの茶談しる　閑
ふ断啼鳥は耕も耳につき　、
一筋花の霧も其の時　我
折みし枝も見ゆるきもん　、
萩枯葉となる庭のくつろぎ　閑
細打ハ鶴帰る家のゆすられ　丁知
日すハ雲かき長い夕方　出山
足ーあは小鮎なる桶提て　知
岩くくたも小光るき焼つき　山
植所るゝぬ菊に出る月　知
さす程急になけし初汐　山
秋すハとちて高ふ儀のゆ　知

縁に付ても世語をきる伯母　山
病ひなき身なりも針灸は嫌ひ　太
到来て掃除も出来る寺方　山
酒くらひひとつゝたる旅籠　和
出来ぬ鉢来て菜花のよねて　山
強きの花みて若の咲る菊　和
家内の分にまつる初茸　山
紫で老くに出世帳のつら　和
久しう住も呼ぶる掾橋　太
きのふ兄井その咲る花のとり　山
巨燵さけハ席ゝ取る庵　太
彼岸のうけして世帯ひこそ　和
暮くも出来る温泉のかはい　山
高貴の体ハらも引摺ひ　和
本のりくと結て寄りて菜る　山
法様で放けハ追て見る山　和
身の上ハで五十まで来ぬ　山
おそさ本体勤めかてて表　山
借銀出る人もなし　和
当着の夜母は低くあて　山
時る径る祢き結ひる流法　和
足まで を誰も悦る極の月　山
苦し風をかぬ田の雲り　和
遅流ハ舟の席に積て着り　山
つはちいで着たる悲葉　和
逢への見花とも取ハ梁の丈　山
来てらへの藪の峰香　太
影晩のかゝ入会志れ村の非　山
むし草つまむ残の花　和
連子蝶の細風のゝへるのれ　葉崖
折ゆれ出花岸ね年時る　宮夕
きさきのおくれ雑茶ね掾　崖
いおくもうつ野家侭さ　夕
瓦山の中雲の月のおみ　崖
あめつく萩に乱ゆる盃　夕

縁に付ても世話をやく伯母　山
病ひあれハ針にゆく嫁ひ　知
別進て掃除も手前寺方　山
諸くらひとつ口て奇の旅籠柏　知
出手紙出来ても古都のよい所　山
独子のまゝみて茶よら嗜る国　知
家内の分にあハる初茸　山
出代て去くに出世帳のつら　知
久しう来も噺見る梅櫓　山
きの字見出そのも咲染のほと　知
巨燵客ハ鷹く成る庵　山
彼岸の付ぬて出る芝ひこそ　、
夢さへも出来る温泉のあかゞい　知
高貴の傳手ハ夫も引担ひ　山
おろかりしと肆て守れ尊　知
法被して夜ハ遊て見る富山　山
身の上かくて五十まで来ね　知
ねえよ本様勤めみくる表　山

松島の泉湧のとて、秋も暮　岩
肴は塩の鰯子焦く　夕
ふらくと関西回する寺の東かきあり　崖
空手ハぬけきのまつふ連中話　夕
一廓兼る町はさよ合して　崖
あはくあ夏へも法りまかお守　夕
月詣て僧正業の世ん売　崖
示す遠ハね盥乃蚊庭　夕
露の名にあみの尾も吹かる里　崖
来のうちから浅娼経ふ　夕
薪並手猫つくむおは掃除　崖
霜は余波ほ嬉き葉を出る　夕
漆りても啞ても中なる器師
女嫌ひの御山こん分る　崖
雑兵の鯉丘岬のふてのき　夕
耽異の月ゆんは太門高き　崖
脇ね茶も借てさらに杜柿　夕
釜の外ハさらし画もなし　崖
新緑も秋園に砂の岐度　夕
独て見れハ仙人てる法し　崖
面ありは悲森に秋一秋を佳良　夕
月の気色の深らきされ川　崖
私ね孫も遊ぶ合の家を橋まで　夕
あまも倍手相く朱をりまくる　崖
ふ連若宿麻にいつる加ぬる嫌ひ　夕
無茶つとひの味温泉まけ出た　崖
京積の霧も吹むらけ　夕
行く鉄岸る浜乃三日月　崖
後のうちんもぬくとは佛達　夕
玉りくハしくるいから字の缶　崖
夕日や一分くらりに帰蛙いふ　兄
ありくと薪は枯を切る　字旦
畑打の鍬の手きを手勝して　兄
皆あさる手まなり添繁　旦
践ぬす格子本打て出る月　兄

案山子の蓑に露のこぼるゝ　旦
魚網に出るゝ隠し所なき紫　兄
尽く若葉かきき紅の脂綿　旦
江戸三の正銀煙りの味出入福　兄
そのまゝ嗽ぐる手紙ゆく　旦
猿蓑さく痩痕のさく旅を憐し　兄
汗ふく夜に鬢かゝる　旦
古宮を拝て朧る萩の月　兄
買し庵の画を惜こたり　旦
香炉の室やかれ捨にて風流して　兄
古き仲間の月見あはさきく　旦
去年の出入の医体を味へ　兄
宮に織をあやうく罷ふ　旦
遊ひのまき月なき涼し浮手に　兄
此の堺中て出庵さ石垣　旦
茶粒もうそ出でて吹わる若　兄
五なるおくふあしね村白　旦
見つりて風ほせる浮世合　兄
秋の代鈴の出もてつり　旦
古杖と指さしの流波山　兄
薪をかきねて蚕とく滝　旦
一代の運を歴告る路て　兄
いそう俳て生のそいへる　旦
小ぶ手かくて遠土境の月　兄
誰そ文せる出萩をむ　旦
子を捨し此鳴る新実に　兄
古庵の招きを尽くねしまる　旦
余との衣のみ様も女旅　兄
太の火とも夢送る名作　旦
古屋り剝苦の葉されて　兄
水の舟きふ夜の旅つくる　旦

見ゆく結局ら宇見寒の山　浮善
枸杞つむ鏡も出し重葉　丁和
夢遊き朱鏡寂に浮りて　由樊
めつそり月の道掃まさす　未木

粉るの近くを寺宮らし遠く　知
信楽椎の汁りくあわく　菫
川上の瀬常に体も世て　木
経文ゆる宴ハ物あをまよむ　埜
毎日も不思議に俺は苦労斗　菫
ちよつと種て出む二ツの往来録　知
くらうひを追て見ろふ会の封　木
水屋て無経ち物りつふ　埜
変てもよりて田舎に思ふ月　知
鴨上る八寒ハ忘れて丹　菫
もさほしき此分の跡の縁屑　木
とれぬ先から黄てゐる魚　埜
もかれるおりもたれぬ人の足　菫
鉄炮出みてなとふ浮鵜る　知
織子の器もうるさむ庭興　埜
祢宜の宮とよのつてもあれ　木
五二百出ハ見ととものはね京　知
軸くる柳枝とつけおく　菫
有年の旅の分くる徳俵　木
降やむ雪のすゝと云せる　埜
茶の粉嶺し侭おく寸に風鐸　菫
宗きさへ何れ稀に花哉　知
殺生の難れを無理に譲ぬて　埜
小倉のうき来さよ銭出ふ　木
椎の木にのれ有の時はゆめ　知
まそぬ宿栗の毬をよせやく　菫
出す手てまくれ出代る寺男　木
櫂にたつらふ舟のちらひさき　埜
お通りの内ハ小路に涌淡て　菫
幾日虚りは世路に挟風て　知
なるは餌を食るに行き秋の虫　埜
序木に見やさう菫たんほゝ　木
本宗のくちる秋の櫻れ　鬼推
月夜を見る程露消行　花了
臥りの後待船に移りて　青我

寂しき料理屋の庭　雄
桜の葉伝ひて落る月さへさびし　了
さらさらと亭主は稲の掛干　我
無拍子に浄瑠璃岸の打給　雄
気まかせ程のむ舎にかへる　了
ちよろちよろ事は秋ありて　我
四条寺町も名代の岩おこし　雄
軒下に錦の藍染物　了
鐘のとどろく上法　我
月の浮雲も山を隠す也　雄
涼しく風も千日和くもゆる　了
うれしさ並べて達る襟札　我
菊の葉をかけられなまかり　雄
祖父陰めかかるに宮居の底開き　了
積みやかくる雑法なし　我
ちとの間も等ましさめ藪蕎麦　雄
退従以ふて降る種木屋　了
祇園会の雛咲く川京　我
牧生り棲へいの如けり　雄
宵の月秋鴨なくて雪の日　了
喧嘩なる犬噂もうく　我
大勢をとて笑ふ元三更　雄
等待気ゆる極の一線　了
旅なるもかく若勢もなく宿　我
糸瓜のやけ秋来たり月　雄
帰るや庭下駄さて戸ゆめ　了
霞をはへて霞のおわる　我
ちよろちよろと楊柳寺のかくれて　雄
志とく汗の中な笠ひ　了
崩墨の櫻は夫玄の庭　我
向ひを寒くむかる地蔵　雄
群集する志の中の文　了
咲ちる向ふも東風　我
淺面き　古春
古年雀子　伯遠

奇麗らき料理屋の庭　雄
櫻の葉に出て居る月もさゝえ逢　了
さゝきとなりふ稲の網干　我
無稲草にあり彼岸の村総　雄
氣をかける程月の出者にそう　了
ちよろくく事法秋あり出して　我
四条高瀬にをかの炎にも雪　雄
軒下に鐘の唱称如知らず　了
猿のところは霞る上法　我
月の浪通し出を掃そへて　雄
浮つく風ふ竹日和らくはのる　了
亡れる並へて遠る紅襟れ　我
前の叢をかけられなり　雄
祖父隠居のよさ出の床引き　了
積かされる雑法的笠　我
ちとの罫も常は紀さる壽老好　雄
退徒以ふて流る種本屋　了
祇園会の雛に渋くる川面ふ　我
故要り積つかの如ひ行　雄
帝の秋鴨居とろふ雪の日　了
帰る者の足の噂をかく　我
大勢そとなりて笑ひは元三盃　雄
幸作氣味も極の一種　了
旅に居るは只若勢も居て宿　我
糸瓜の汁収もりかある月　雄
帰居り庭下駄をそく番め　了
霞とゆくへも霞めてあれる　我
ちよく紫り擬粉者のかくまめて　雄
志とく汗のふもとむ笠ひも　了
蒲焼の燻秋夫婦の森から　我
面ひと寒さむかれる地言　雄
群集する蛇貝の米の宴り　了

生鯛のやうにたる春菜て　采木
咄しにやまのきかぬ哥芳　英
車屋の軒一ぱいに宵の月　遠
水の埔もいそかしう帰　木
鉢ひらき極の岩にあう衛き　英
古新壹て餘代のとし　遠
過役に奉て花亭のつ経上う　木
寄嵐ようんて宮様の菓子　英
伊勢參籠ましく風の吹出て　遠
秋のゆくとゆきしぬある月　木
口すさのりきなく女のなたさへ挑　英
四ツめ千ヨめと嫁に縁結　遠
天晴しく傘の柄のりと行す　木
葎の宿信かかよふ宣　英
の組て出しおく思つゝ　遠
陽炎のゆる凱の菴に　木
看板に老鋪合成る薬店　英
非人の称る祝義も祝義　遠

さゝもと湯の月かかへ出雲のさき　木
名水の際のとれる旅ごゝろ　英
雲鼓の笑ひ声隠るゝ山家哉　遠
俄雨氣もとられぬ豪雨も　木
晩鐘を待いつまで殺仲間　英
秦まつ船の白帆行しらし　遠
大坂の便りを忘れていか安快　木
水の濁りもとめる濘の秋　英
盆の夜の月の君も萩に咲く　遠
夕陽も見えぬ野さくら　木
芭蕉の穂がけて風もあらぬ花　英
梢木小きれんかのある　遠
鞘ながる刀おきえて立上り　木
近生者称ちりかへりしも　英
帰るさの山根の雪も我の雛子　遠
きのふ八十小名大で来る風　木
あかしきに酒を加える牡丹花　得甚

生鯛のさゝれと得る寝覚て　禾木
咄しはやきのきれゝ聲　其
車屋の拜一茶は宵の月　遠
水の煙もいそがしく帰　本
餅つき極の炭おそろく幽寒き　其
古新妻て餘代のとし　庵
過徐ゟ寺てふるまひの一紀上ゟ　本
常風やみんと守様の茶子　其
伊織簾涼しき風の吹出て　歳
秋風のほゝえましの有る月　生
田毎の月き欲て女の花さ苑　其
四ツめ千とせめも姫ヶ縁侍　其

晴て日の出る夏の横雲　丁加
牡蛎のよる町より運ひて　南抜
ぬかりへ足を舟乃古板　茎
秋らはの衣食の附も内二秋　加
手ちの月の教のたまやき　抜
宿をにあさし旅宣の當樓　茎
旅ほいおしき葉施も　加
発句かる茎を気に成る上新れ　抜
針もろく/\ぬ日短　茎
翌のはまる宰相物あはて　加
携へまうふ庭の楊出　抜
假初に嗅ひて音る様つき　茎
蒲衣藤の名を問て見る　加
言日月の後にかくる寺情る里　抜
祝詞をとてく読のたおつる　茎
讀るてもまさるとは　加
荻の笑葉はむくの手ふく　抜
雲に出る良敬はつる　茎
子の時は河ひし鉄醸さふゆ　加
志んしとかく八旅の還席多　抜
庭へ紡雑の行る丹の青　茎
ぬきとる深きおし心付　加
きく見ゆる来年の和せて　抜
襟の行るめき深沖の舟　茎
つひ船する坂東　加
我のみて泣て氣れ　抜
湖橙直次月も近待く　茎
坂次ふしの秋は女子に打まかせ　加
西瓜手のけつけ色　抜
返りる路下の殖る虫法門　茎
閑よりいらつ人さ出る合ふ　加
落穂るくさいる葉らま　抜
名喰虫の花誌る　茎
言ひめ嫁も巻る居月の妻　加
障子屏風をたて生多　抜

手迎て菓ハきりとも売花の出　完伍
吹つまるゝ葉の落　風　余池
邪清ハ蔭根ま届なしか付替て　保芝
閑佗りさく〱雨組寂の新　伍
椎茸のかさく白ひま室の月　池
列ぬ小僧名の餅を売ますする　芝
いつそれを生れ角力の子ゝ色　伍
笑松こし坊船守ま集る　池
春もせぬ伸ひもしも穴ま集て　芝
料理の屑をなく梅ある　伍
追香まつらひぬらる村の若　池
一ぺん陣の恋られをけしき　芝
子をく〱一路ぬ様の法但　伍
契り深う尊ま見ぬ嫁　池
貸本の上ら筆の辷るく　芝
出さ出る盃の鉢増　伍
出ま月勢進こと口利て　池
めつ重ね先ハきつしね暖　芝
それと幕湯泉の岩手結から　伍
二軒宿会ふのける物干　池
曲つ途て降る止けもある増　芝
三尺の奥の何丹ぬ篠ま　伍
ちらち〱て積串つやめて流き之　池
噺の出る日ぱつく定宮　芝
念ま念のぬ芸の春まとき　伍
直段ハいくゝら悪い荷鮎　池
きり流板まとまん峰通　芝
木亭さか咲て月の名ゝ　伍
剃刀も掃てもたさき帯を縫　池
寺の役の源りくかぬ　芝
出さ出で余程詰せる指荒療　伍
肌ふて落のゝる燃餅　池
お菊る相続寄悪ま為て付　芝
借る時こらけてゐ水さき　伍
山雀の来る木も出ま敷の花　池
黒ぐの紙付し芝の蟻踏　芝

手造て菓子ハきこゆ世急ぎの古　完伍
吹つめまるく蕎麦隣風　奈池
弥はに盆根ま為あゝ折替て　深芝
用ゆきく形組家の新　伍
椎茸のかさく白ひ子室の白　池
別ね小俵呑み餅もおゑする　芝
いつまても角力のつよい画　伍
若松こし於船中に出る　池
春も世ね何ごしもてなしまて　芝
料理の腐を添く梅あまい　伍
追香まつらひぬる村の若　池
つくん陣の志られもけしき　芝
子そく八綿ら私様の法座　伍
契ら添ても日そ又嫁　池
貸本の上ら筆の沁みるく　芝
まく出そ為る皿の飯増　伍
去る月勧進こゝお利て　池
ゆら重ね先ハまつしね後　芝
そろ〳〵と幕温泉の岩に雄ゆり　伍
二軒家合ふのける物干　池
曲り達て清く止けまる嶋　芝
あらしの奥の梅丹ね猿子　伍
ちるおちて桜串に止めて流しさ　池
噺の出る日ハきつく宿か　芝
念に念いれて並の香よき　伍
直段ハいつもうらぬ薩摩飴　池
きりゝ浚もてまく峰通　芝
本寺まあけて月の光の名　伍
剃刀も隠てちひさき若を作り　池
寺の役の濡りくりぬ　芝
おく迄を金程踊せる掛書店　伍
眠らさて夜のつる煙鑵　池
出し粉る柏餅売る名に付　芝
倅在時まつさけてなお乾き　伍
山崖の寿る木も出る鳥の毛　池
思ふのあ井し芝の蝶紡　芝

路つ荒し咲もなる清水川　丁如
押ふかる合子晴るる霜　壮貞
居並ん旬子隣の寺も如きて　白起
あつく八操は蓋ん石袋　如
啼かふる月の特の猿ね諸　貞
演のちつくハ来て泣く星き　起
居ゟせて江湖宿れの連ふ寺　如
奇妙な浮世の局となれちせぬ　貞
一事もたゆね積る京菜葉　起
絵の具社のしれ銭さ宮の方　如
空耕ふ非を操るのさし出て　貞
易速ふしむ伐ふる涼しく　起
入船のふ夜ハよその川岸ゟ　如
四五人茶法来て出す宣　貞
大綱の面まで物をえんとて　起
夜の噂とさまぬふりもる　如
身すびは薪の中くれはとりこ　貞
川水かゝりて井蛙も分する　起
日庭の日中さし浮ふ種時分　如
出まくむ吹かく風呂敷　貞
産前ハかのひとすたおもく　起
宵にねさくし物たる手の行　如
きしくと茶屋れの名たつ定　貞
買ハ買さりけんねせる牡　起
後かう見合せて業体の都をうけ　如
気つらふ役も越への行る岩　貞
月葉ん当る紙結の坂並語　起
九ツ前まで浮もありくかゝる　如
きれ〆学事いかね木槿垣　貞
折ふして千ても出る盥　起
諸役ハかうるそくとなけり　如
其卦の能ひの名り持ちの魚　貞
行大の面のかたんり成りゝき　起
春のくやら路川さとかく　如
おそらく遠ハちとの皆碌て　貞

路つゝき峠もかゝる清水川　丁和
押分る人合羽に晴ゝる霜　壮貞
居並ひ印子礫のあとを拾ふて　内記
あく人ハ操もなき左袋　和
時あふる月の錦の継も法　貞
濱のちとりハ遠ふ渡つき　記
居流せて江湖窮れの東あり　和
あかぬ法住の名と参りせぬ　貞
一年もたゝぬと稿る床葉　記
絵の具法のしぬ浅きハ行　和
空耕ふ畔に横るのさし出て　貞
名遠ふしん彼つる法く　記
入船のかゝ夜ハよその川岸行　和
四五人茶法飯を出す宜　貞
出袋の盗にゆふ物を入分て　記
夜の浮かぬありもる　和
月もむ猫のなくありさま也　貞
川きハ森ハ社猫ありまる　記
日雇の日かさし行ふ種時分　和
まとまくも哭しれく笑家　貞
産前ハあの心きゝたゝあらん　記
宵に起くし物ある事と数　和
きしくと家業隠れのさぬつき　貞
哭ハ哭さりうたゞねせしも法　記
後ふ見合せ業除の都もそけ　和
氣つふ後も越への狩る岩　貞
月常哭紀録の坂邊語　記
丸う若さ法もあくぬる　和
まてゝ奉りもいゝぬ木槿垣　貞
折ふし千ゝ鳴る盥　記
謡衛ハ新ふ音と行ふりり　和
八卦の秘ひの君ゝ擬ふ無　貞
行次に竜のかゝんゝ露ゝき　記
壹のくやう秘川あゝとかく　和
おもゝんと連ハちとの昔醉て　貞

蔭笑の花をとめて東風　起
山鳥も旅寐さそふ声のいく　東鳧
若茶漬好に老き人影　禾木
森所と精舎の間へ出入けて　鳧
古臼上をかいつまみゆく　木
辻井戸の釣瓶のはなの露の月　鳧
かんなまに帰る帆柱帰るやま　木
蓮の実の居成る雛をおとゝ道　鳧
癰ならで肩をもむむら倉　木
おれが日噂を受けに塀の外　鳧
吹革祭の夜ことの祝言　木
秋は宮へ参く倅の留守なり　鳧
家々に残り咲きりの帆道　木
月筏に池をわたる地所開　鳧
やゝ寒さ門にたつる錫杖　木
手作りの梅花紫を回情けし　鳧
油費多き部屋乃難渋　木
役得あもちおもかはしき　鳧
気ぬく蛙のよなきの辨当　木
伐て来てさく庭の手やかな禁　禾木
発句きつ裏も寒へ朝風　東鳧
生まれは米ちかき降ましき　木
味噌つきの糀の灘の捨する　鳧
本陣の亭主ぶる人にしる宵の月　木
くさぎの類に紅葉くる顔相　鳧
津浪のひとを舟着の露の葉　木
辛抱つよく思ひ石臼　鳧
法師の出處あるはかりなく　木
風呂をたてゝ見れく稚児し　鳧
松坂のきの人々武蔵の宝の不　木
屋敷流るまで下り雲や猫　鳧
東路晴れの月この出雲之　木
唯葉かはるにてし紫も軽　鳧
せりくて鳥はつきぬ陽の照　木

猫ゝ鐘たかゝる家の解も落し　羅
一羽の雲に鶴の啼されぬ　木
虹と見る月に隠る時雨かな　羅
蘆の葉の中へ手紙を吹なり粗　文
おこり静まる宿の一盃茶　古
買とまくきたれる家の直様て　文
老ハ塵払と言ぬ近つき　古
花咲に花の香なすの猪引き　文
稲干てかゝる桜なんの木　古
御遷宮の話も真ハ夜の更　文
遅咲花を屋を継たせける　古
小屋あつて庭ひろきる人通り　文
みそれ降てね数の手桶　古
園の状ふせれ候る手の露　文
婿のよみの小お祝の身にふ　古
憐くれ花鈍かゝる肉の道　文
茸狩の出る寺の山こもち　古
京の秋出つきに花く有り　文
味な住居て床上なおく　古
積成たかりの雲は日暮来る　文
よくとある田の畝塗ちたまむ　古
頃の花とひのつく哉て来なる　、
家中の箸で拵た長持　文
策定に月並のぬ念仏様　古
雷やんて雨もよふくらか　文
悪と桜の木立の陽の在　古
鞍の・のつりとはなく蝶　文
附たるを焼し玄関の道　古
思ふ大文のうけく年の毒　文
耽の薩のこはしとも又みぬみ　古
盃のさかさる鯨の出さくのる　文
月代のたゝる雲を吹払し　古
返る水ゝ居の下る川下　文
芳鬟とさと奉行の出に候され　古
旅ハ海に居て吹とる出せる　文

手かゝれ仏の寺野菜の餅施　古
舟をはなれし薮へかゝる名　文
志やうらうと雲に携む秋の色　古
蛭の子ゝ垂て仕舞ふころ金　文
居文を認て又旅の茶の子は　梅二
引ても諸の白ふ薄穂畑　竹庵
たらくとあきの果ぬ家建て　精蕉
見るゝ賢くてある楽娯　二
夕月は曇るこゝ氣を静陰　庵
何ふ飛ぶ雀の柳葉出し　蕉
盃休きさとして詞を並へ垂　二
あら小ゝ筆執れ先を付さく　庵
来ても今の鉢つよ膝をきためれ　蕉
隠わとおく霞の名作　二
めかけは涼し通ふる船の内　庵
は堂の屋根を見て連詩　蕉
飛くつかうぬ小屋は月の跡　二
菊と綿の番の田かゝり　庵
参てはいらぬ術氣は秋起り　蕉
は各々は締あ切往居　二
掃そる替地も蔓あけ　庵
何とも雲雀は遥かけてそ　蕉
事相めは傘て日当る会　二
弓いり旅の幕も数出し　庵
隠しても勤めはけくと併哉て　蕉
労逸森入はいやらしの夢　二
示教を見合せる身後の作物　庵
角を曲れ先を壊りしつまる　蕉
老る程去れて国をさる繁　二
きられ玉子をさらう守入　庵
手紙田の藤うかれかを痒りて　蕉
画を出るはやされ遊居　二
くせそうと遠く沈島のこゝ雨　庵
ちくのをちに実のる菩提子　蕉
重陽の晴れは果く宿子花　二

手かゝれ小の二男要業の餌を拾　古
舟をつなけれた藪へかゝるなり　文
志やうりと雲に横むく秋の色　古
經のふち垂て仕舞ふころ　文
居あたを拾て又孫か茶の子とは　梅二
引てゆ話の自由か京菜畑　何庵
たらりと廿日の果ぬ家速て　精器
見ることも賢くなりし樂娯　二
字角は暑雲るさ氣も茶精陰　庵
行か飛る崖の柳發出し　器
盃体さきとつて詞を並へ盃　二
おられし常住秋を引きく　庵
年さへ今夜のよい月と花めれ　器
孫あとおく露の石竹　二
身をはけ凉しさ思ふ親の肉　庵
床堂の屋根ゟ見て連詩　器
飛んでこのし小屋に月の比　二
蘭と絲の歳の日かゝり　庵
參てはいかぬ御氣紛紛起り　器
はる谷いふ締か切住居　二
掃よる墓地子むの發あけ　庵
旅の空雀ハ遙かけりて　器
東觸めは傘て日々深生ざ　二
尻いり旅の幕を敷出し　庵
隠しても勤めなけれと海出て　器
労通森入ていやらしの夢　二
云おれて見せるまぬ後の仕物　庵
角と由る去來り

祢宜にかゝりけるの名を咏　庭

香口のはつゝ静らぬ玉探　巣

一里の橋子にたかい出る筋　二

此の木に出付て洞る雨雯　庭

そゝより翌日はたゝしる暖　巣

昨日ふる雨にうた杏花松あらん　丁　和

つゝ道の名をまける咏く春　勝　舒

二親ふまけるふ宗を積みけて　和

夜しを日向のかたに傘　舒

昼の月低うかゝれは氣も付けて　和

渡さ鷺乃鳴しても常　舒

埼もの一ぬ世を定めの分かをて　和

襄塗るゝ日は六曜も撰る　舒

織物のおゝ誂て産は埃まかり　和

門の明やら関諸明ゆ家　舒

ひきて諸鳶屋殿ねまかへて　和

耕地こしまも自ふ屋庵　舒

諸君まけて白き縫の　舒

矮末もおかってすも出歎し　和

細つきゝ医師神の様に　舒

まく植ぬむ子苗はかたむきて　和

雪解るまする海魚乃骨　舒

京限り延しき厄祓程出し　、

格子の傍へのゝ寸算用　和

疱瘡も軽く四十に近くなり　舒

櫛もむらへは送るゝわるは　和

湯のなかの名ひやぬ治青湖り　舒

お滝主に百合も咲み山内　和

大縮屑の下結み古きまゝ宙す　舒

奢の連乃咋ゆの櫓はぬ　和

歯纓も低い稗ヘ紛出し　舒

荷しぬ宿子月日垣の夕月　和

鎌子刈る稲の尖雀斜なて　舒

老ぐらくて軍下夕の水跡　和

挑灯も持て娘の送りける　翁
出る気もしきよ時のさきく　和
竹箭を削りてかへる汁の中　翁
七夕ある宿をきこゆる鐘の聲　和
見直せば見分かれたる菓洗き　翁
縁は大ひらを惜まずに来　和
面は此頃綾の錦に風薫る　雲篇
萁のうへに瓜の甘干　禾本
椿子の詩侯たら嵌る迄なく　篇
惜まれし星をあけしろくきく　本
月のよい空を出る盆　篇
孫もらく姫別帰りても　本
悪横て畑を負ふ何かるく　篇
今度の風状は問答にらく　本
鶴の下襟に何やらきたるに　篇
菜の袖寄しきう紀伊進に落る
古舩の陸へくり黒ね溢くら　篇
はたちをとしそはしや昨日に　本
中ぬるく出る月も世に松風　篇
赤富紫の毒み了緒ぬけず　本
形広さくに蔵ぬ出る太刀　篇
杜斉も寄れ水流経に書る　本
頂も禁もおすし出の雲　篇
掃よせ堀ずのゆる野冷　本
静の茶に食との香偏て　、
百度のさじ深風とちるなる　篇
格子から晴之さるゝ状役　本
うきゑの花かく多の事公　篇
古市や香畑の声路を守まで　本
めづらしふる媛のうる居さき　篇
二荷三荷擔ぎのめる帰る中の役　本
土の花の鏡を仕舞ひまでも　篇
気違の客に降出す二十雨　本
印を察ていける役場名　篇
月を合て付の葉ける肩は凍　本

梶打も揃て婿の送りける　訥
出合らんしきよ岸のうきまく　杜
竹針を削りてかゝる井の井　翔
まろめある雪をさそふる継の雪　杜
見直せ其年の念仏ぞの実傍き　翔
徹いたびらを惜まるゝ春　杜
雨もよひ嵯峨の庵ニも風薫る　雪篇
箕のうへに瓜の甘干　禾木
播州の詩僧もと娘送りて　篇
惜まれて恥をかゝりしきく　木
肩のよう愛へ出させる言盃　篇
猿たらく蛙蜗鳴やも　木
要撥て蜘手達負いかぬるく　篇
今度の風雅は門にふかく　す
鍋の下焚を何やらさらはゞ　篇
菜の袖あしをう観伊勢て鳴る　木
古船の修かゝり果ぬ湊くち　篇

一荷二荷と汲る寺ね 篇

さらくの出水に町のやゝ高き 木

大工の代を上てねりもどる 篇

小によい切わときらる塩俵 木

雪ふみても吼る里犬 篇

清盛の鐵化付まる案のもろ 木

まつの形笛て吹ならし篇代 篇

雨雪の窗ふて書やり細 青我

赤り手洗ふの暑き煙熱 鬼雄

藥師ニ番子一ま以なかて 花了

さらく船の伴侶をまちる 我

老色く旅客の持仕十五秋ふ 雄

明り吹のまて蘇枋上風 了

何ちろても夜ても秋の那須さき 我

色よ深らて為いま傘 雄

鍋洗はらみの櫛の婦を结せ盃 了

くつり楠のさらる生柾も 我

[illegible] 雄

雀の巣あくもろもを掬売 了

菰籠の藍を休みる鉄の内 我

二百二十日のまく静なり 雄

醍醐藤の膝も出あく春遠 了

下結ら学度をちくまく度 我

大小を境内の出ばでつむせ 雄

妻のかたまれ旅族り門 了

雜布染ひは丹の写るまねて 我

赤子抱えて明る格子戸 雄

宮体を明てひろろる業浅 了

三味線箸は無事ろの放てら 我

仕占まへかく成て手契 雄

麦藁にひろ風情あや 了

桔梗か本まつりて芦の恩 我

像まかせて絵の續解 雄

近江くの古江の城下に座敷て 了

碁好きの友は今もそのやむ 我

肩衣で千歳舞のまかると　雄
霰ほろゝゆる竹垣の音　了
侘居とは彼の段の文につくり　我
紫もゆかの色は知らぬ姿　雄
東雲の連歌には遠き旅かり　了
数ならぬ身で仕舞ふ豆蒔　我
行燈を片手にあくる秋の窓　雄
菩提寺の法にもれしまだ花あり　芋
家のよろめきも見るよき普請　丁　知
苫もりて見上る庭の夕しぐれ　立　紀
西瓜の蔓にてあがる浮しても　知
風の走るは雨の音の高縁　紀
明るき程は追て旅にかゝる月　知
子ども来て居る茶はおそく　紀
婦嫁は年貢納の疵出して　知
一塩にて鰈の喰ふ　紀
池越しに寄る上井の鐘を鳴　知

手燭捧してある喫りの　紀
十人ともに揃わぬ謡　知
呑からる酒の茶は水　紀
風呂場には拾ひ集る菊の月　知
芋植も知らぬ萩のこぼれ　紀
此ころハとまし寒き秋　知
ゆの紙は一寒つきのよし　紀
武術者もゆかりある家の衣　知
巣を出て羽根のきえる蜂の子　紀
すみ〳〵碁も見に並へる日なさ　、
仕舞ふ碗を洗ふ女房　知
むかふてから乗出し船出に渡し　紀
市物かけし扇とゆところ　知
飛もぬく森くる子供の悲ゝ歎　紀
持佛も古く磨る拭ひ衣　知
山寺も六つても宮は撞香箱　紀
わよきまゝに開て居縁　知
菓子舗の方も待ちし浮気の様は　紀

おぼろふくへて箒の跡る　和
月出の夜ちもて涼しく結ぶて　紀
うち吹く楼わたふ[illegible]の[illegible]蓋　和
ゆふけの露は秋の稽古に焚　紀
稲志ひ吹くふむすんで貴生　和
たり〳〵身もむを吹雨の面白く　紀
まつふりりうけそさに梢　和
絵る堂に無ふ古本の形咲て　紀
ひとつゝのせし　掌の枸杞　和
老盤古の古葉流て清水に　信友
荷鞍の蝶力の白の白雪　伯遠
紫雲院の内は石に打やめて　桑木
楼台の上へ吹くく吹き花　古夷
瓦山の烏の肩の渡るゝり　朴我
宿の水する蚯蚓帰る山　秀遠
懐に恥そかくれその[illegible]　永光
千代まくのせよ恋の初絵　金生
[illegible]　文昇
掃ちよせてくれの竹杖　素良
地境の横に梁の木の生果り　露隣
峰ちかく鳩の肉羽　仙鶴
旅立の猿も吹くなれの川　真角
婦り衣きちつる人の許　半仙
寝ころく隠家ある蓑引　雲鶴
屋根のかうしき秋の小祠　素蝶
咲たにの操る名の情立れ　文以
雲く〳〵うる山は吹く〳〵戒　友
青海苔の末の有る色の海物　遠
兼好も咲き寄る古の模様　木
旅先る屋の松の姫は春むかる　夷
本綿古月の[illegible]　我
出用に筆ろ[illegible]　秀
好き[illegible]の掛けし[illegible]　光
[illegible]　生
尾[illegible]の[illegible]る鶏　昇

上癒船も旅船も入らんて　雪

時雨の跡うら晩秋に出つまる　晴

編笠の七ツ下り結月けし　華

うつまをとつて魚の鵜吹　仍

梅先をおさく入るの錦の菊　仙

一種刹いつゝ東に出てのをし　翁

出通すゐ旅中出られ出茶屋の　護

重の月のさせがりあり絶えを　以

松口出もつて見くの出まかり　支

藪蕎麦出地のくみのゆふ　盧

牡丹ある老の速かや蔵城船　青蓮

哉りよおはするに靡入く空　嘯月

晴うかる辛の刻宵よ寒かまて　登

芝居の[illegible]出ゆうかりふみ　同

世様ふく形かる貢のの月のさし　登

先うく先へ見り時寒　同

末枯よぎをかう綿のの田や畑　蓮

木枕の驚ろくの[illegible]の己　同

雑俳と[illegible]の錦の錆　登

世間くむてせまつる編笠　同

占せまんて順く梅が先　登

菊さきかく代りく風狂ひく　同

田舎も旅香悪あふの月　登

筆の出様すも変りつつ了　同

出茶秋ふあつて翫花すなま出ら　登

小さく出て見るも嬢笑の説　登

三人者と去く出源ふり　同

との錦植も諸の事て居る　同

鳥もり出くまみせて動く瓜

碁の松まてあるの秋方　登

むる米のう伴等てお霊見　同

まくすかの花を伊豆の温泉　蓮

物つれて乾せぬふて衣の雨　同

うほ出て志くる荒のうぽ立　蓮

梅いふ常るう歎のきめすて　同

三穀飯も旨さうに喰ふ子　登
倹約も[illegible]の出来て積る[illegible]　肉
安国と[illegible]人喜ぶ世の[illegible]風　登
[illegible]涼し月の出ぬまと[illegible]れ　肉
[illegible]ゆれのとる手の[illegible]成　登
地震のうちくずれ[illegible]の葉の咲　肉
露[illegible]縁日　登
菊さく[illegible]の[illegible]病　肉
白うして[illegible]渡て[illegible]る　登
公用と私用とて[illegible]　肉
大和[illegible]の[illegible]　登

名月[illegible]の[illegible]　蓬舟
[illegible]合[illegible]屑　粕堂
雛[illegible]の[illegible]　舎用
[illegible]の[illegible]　舟
早魃[illegible]　堂
[illegible]鮎　月
[illegible]の[illegible]　舟
一[illegible]　堂
[illegible]根[illegible]　月
[illegible]の[illegible]　舟
[illegible]の人数[illegible]　堂
[illegible]の[illegible]　月
[illegible]宵の月　舟
[illegible]の[illegible]　堂
[illegible]の[illegible]色　月
[illegible]胴[illegible]　舟
[illegible]の[illegible]　堂
[illegible]の[illegible]　月
[illegible]　舟
[illegible]の一里[illegible]　堂
勤番の[illegible]　月
[illegible]屏風[illegible]　舟
[illegible]市の[illegible]　堂
[illegible]の[illegible]　月

三穀紙を背さくみ[illegible]らふ　笠

倹約も雛の出して据ゑ[illegible]　肉

安国を勃て入る[illegible]のかき原　笠

[illegible]藤法の肉の出来と[illegible]されれ　肉

厳しゆれのとしめくるの多成　笠

地震のふらされ[illegible]葉の嗅　肉

雪[illegible]の[illegible]れる朱肉　笠

蔵さへ乗ての[illegible]癒病　肉

旬ふしてつる読て惚う　笠

公用と私用もて乞ひて交て　肉

大和路の古き跡の筆ありし　笠

五月雨[illegible]の日をさる道標　蘆舟

生命をと生薬のよ合の縁磨　粕堂

[illegible]馬の腹を小袋に結ひ付て　舎用

うちまかせ[illegible]浴る鞍門の出羽　亦

旱魃も[illegible]て[illegible]ある娘の手ぶ契　堂

春ぞつ[illegible]なる[illegible]絶て鮎　甫

たかしと田面の長ひ浄土宗　存
無量寿経所ハりのまでかねい　堂
を待ちて両手を売りし松の夜り　羽
きくらと月の影さる椎の木　存
形ようち都の錦繍か綾まとふ　堂
花島よ波の上やさき湖辺　羽
深窓に貸付金の為より　存
私御縁りにあるよ堤辛　堂
横丁の幅子のさるて本通り　羽
素伸の影のうつさき露にし　存
をかる櫻錦の水うつく　堂
若りのはらの樫き後を　羽

船や老鶯の四のうしの人哉　[illegible]聞
この中うるおく紫陽花の家　是我
鏈の手に耳分葉横の葦哉て　聞
そ向く風の肩を吹鼓た　我
舟より筏の肩をおりやき　聞
鹿柳の衣ひ纏し花山　我
黍売り蒼子楼女人米　聞
都と似変く金の書物　我
香経の葉からまきぬと　聞
襟子掛る袋なほさきぬ　我
人笑くいをねと志ねさ雛字　聞
照りて清汁へ面はりの家　我
汁をうと淀気しき月見て　聞
行き舟の上むる渡るゝ河ちもう　我
川魚鈎のふらずて猪焼とる　聞
むねるゝまきるほとけの　我
先先へわ米の雪鶯かぬ　聞
妻ハ掃除の庭く素庭　我
てきるま嫁の子供の袴より　、
今の中しと出る七重の塔　聞
異きもの段成木にて此の壺　我
鼈（スッポン）料るまえんにのきのき　聞
手まの咄きるうにはさ座　我

大体出来し爐のまつりさ　閑
出る杖の錢をかぞる拙見ひ　我
紙の雪にきゆる埋み火　閑
むつくりと起しの古れ古手壹　我
そゝくる神の尊さなて出る　閑
破風にはたそれ月の蜘り　我
白露かゝる戸く焼味の芭　閑
氷雪を苦にせぬ下女の丸裸　我
彼らはさけを扱扶蘭まく　閑
釜一口命にかけて大事かり　我
のそりのそり出行三月　閑
むらかりて雲く立行ぬ山つゝき　我
萱垣越しに賤の新さん　閑

雑歌風

旅もなき地のはたる風の音　由　鵞
ゆきくれて桃さくる竹　丁　知
麦かはる畑の葉ぶきすまなき　鵞
舟はけて花門は房さん　知
来るものの人のひ出た月の空　鵞
まくらも尽て夜ひ夜ひぬる　知
高ひも傳の多ぬ居まらき　鵞
供のもの國に出める家茶係　知
掛物を後錢の出く出むかせ　鵞
維余まで八夜く芝居　知
新らしつる清水に知て飲ぬ水　鵞
袖は露けれとは水ぬ聟　云　知
八月を限に寺々の稽古留　鵞
一株も又のをへらぬ萩　知
晒て年寄の薗の茶焼して　鵞
状の使はとくは迎まり　知
侵るたる秦出た朱ももの俗　鵞
笠まもはれのつゝの夜雪水　知
絹米の海苦いろのめて尊さん　、
維の古例をよるかかり吹ふ　鵞
たるると納めは送つる古種銭　知
方の像ると在き詰雨　鵞

浅瘠やとくるも稼の通ひ口　知

手燭をさけて松の戸を下ケ　楚

お伽ハ見たねと法師も学雑ケ　知

常とんみりと薬茶する鐘　楚

汁の実を出て葛ハひき跡　知

知らぬ振むも癖よるゝくる　楚

うそ寒く娃に住くみ居月の影　知

お姉しは暮のときれてハ帰　楚

茂みゆくり霧も見つけて十はかり　知

手を洗ふ湯をとのさせる紫　楚

たくら辺ハ桐ハ女子ま寄るとて　知

来さ吹ることハ走やかん汲時　楚

おもしらぬ扇てもちる也能り　知

跡あるひけて持も廣く見る　楚

雜歌雲

きゆくまいたや何を翁の意　丁知

庵のうちきれたふる筆採る　得蓁

鍋ゝくの若き麦搗く人の来て　小松

おしぬ折みつしめ井戸端　由楚

よれ照て姥縁もまゝ世有の渡　菩

あそ送りハ渡しこえさせる　知

寮方ハ志かる衣く云葉うき　楚

残よりはゆる文字のあうか　松

象脱てる家も出さん居也て　知

番付て重く川岸の材木　菩

夢にもしせのうきやる小袖　楚

枝粒米を頭けて気ま元不来ず　松

石鑿も金くてさ付光秋の粉　菩

操をのつて行も佳まく　知

違ひ人もいれかしよらぬへ行ぬ月　楚

屏風を立て東のくいら楼　松

咲も左や峠とこゝ雪ハ花の色　知

淀の源まで両堀まて三く　菩

紅志ある若き敬くあ具　松

欲ハ志ある仙寿かけ　さゝく　楚

出る恵痛さよ出さへつ手れハ狗かく　菩

萩花は住ふして常の小針箱　和
雑植に嵐のつよし梅白の旧　樊
折〳〵寒き池のかりそめ　松
世話やきへ仲人なりし風流な秋　和
上の家来りつくものお地頭　甚
結ぶ縁と角の出合ぬ小気識　松
忍ぶは名くて旅よりくりつ待　樊
夜近く水木に加る箸の月　甚
変りして八川板乃かき　和
採で来し付に料理も粉む鮭　樊
やう〳〵垂葉をこのゐる宙られ　松
かいつかり見ぬ大郎に香をも返　和
君は落て世を捨る手婚り　甚
古の折ゑ例に一句すねりゆて　松
何ぞくろ細座〳〵の案　樊

文月やゝ冬にのゐる唐の旅　風調
常の家のいやのきさらゝ　梶堂
[illegible]　晨文
絵んのしてゑもと餅喰の暮ぬ　調
倒れ世本の枝葉へ浦の声きる家　堂
白の短冊なや人生の作り山　文
冷稽く添すに〳〵もむ機の軽　調
風のか雀の舟に咲もあらく　堂
本桃をすく寄をあく訪花す　文
椅くふつりし婚乃往進　調
あすもあの雪きの蜘りを小唄　堂
もてなしる甲斐ヶ根の月　文
穀手は百姓の栄のゆく花で　調
水の声〳〵渡の来おそめる　堂
縫様も甚の一百に忘れ果　文
盲をもあゐる手〳〵豆とり　調
気はつらぬ人とまで来てもむやむ　堂
月くさよりも白の二三人と当代　文
香近ひ八川角近ひの物昔して　調
出陰子から浩江る意　堂

つ並ふ銀宮中て静し
まつりと宮き出る日の梓松　朋
小おろし松茶説の吹散て尽る　雀
となかうら保子あらくのれ　支
春野あらし荻範走ら没遠く　調
芒五本ふ地子ありのるなり　雀
暖簾の枝房みてら鉄鳥すみ　支
拖竹鎖てらの足眠たれ　朋
蹄ら音とやのらぬ壺の声　雀
雪ふあるへきし笠の村のまひ地　支
光の場の音い地たるの尺ほりを　調
手出しのさら安寺の戴硯　雀
枝川のふらるも宮する扇て状　支
走るらくと橋のぬけら袋し撒　調
かゝ下左のゆけの果ハ出の人　雀
隔のまゝみすて鵯の空　支
肩の玉岸てきゝ衣ほの上　風方
綿子降の字ゟて遙宮　外
灰のやうる黒ありて結談え　松
山まへ住みふして法深し　外
峠のうゝもとなる汰夜の秋　松
伊勢度の人すりある乳客　外
出て漕る海船井は　松
まへし左傷坂ゟ住柳て湯ゟえ　外
投出状ゟ拼ゟ侵銭　松
急ゟ来ゟ面ゟハつてらハ宮　外
奉まハ鳩をすて進ゟ了　松
月毎ゟ豊ひし四の献ゟ流　外
篝たてハ鵜ハ萩ゟ種　松
秋葉ゟ人の椀ゟ子染て葉の　外
古ゝのそれを竹寧みりて　松
ちゝくや茶の走遠れ秋の虫　外
雛を仕のぼてのく障ゟ染る　松
あつゞく遠く水ゟ帰雄　木

つ積仲居の春雅かな　
まやの風邪たつてこの気色よし　松
追を出しく嫁猫し燃　外
こころひめ見る浴衣の臺所　松
水寓る山の真中寓帝　外
吉原の梅かう余を蔵わし　松
猶子小帳を不断をあさきぬ　外
下辻宿も衰ゆるあるの桟敷　松
伊賀の役を造能もなく叶　外
荒る法の義なる者肉人の秋　松
ふつつかしく酸醸満法わき　外
所のとんなひの露に房は雑　松
居間の棧留節の法物好　外
鐘は品の賢人を来るる潮の末　松
土塊を友をあしふ蟻　外
掃除其の東海道法を箏　松
摺ろして嘆かぬ読の笠立　外
[illegible]　伯遠
窗ひらく夜の蘂の水音　文昇
角力とる隣り辨論と稲の原　禾木
掃除済て打ける灰吹　遠
若菜ありて客も禁に付時　昇
筆匂のいつとくの太昇り　木
杉山に足くり積の寒さかくと　遠
水の修験若きは若き聲　昇
纜（かいろ）より船の帰る夕紅葉　木
見ごとなりきあるは法語金（アテカイ）　遠
坂攀て峯か住初る法済さん　昇
往ひろまる京の茶花たつ　木
星をきつく得れの諸経路　遠
いかくふる几押すか煙の川　昇
葬礼の施主ま丁寧に寧り　木
楠抜ける中むる水のいつくるの　遠
笑こんて君をつる迷むの月　昇
蕃て蛙のなくて法の雨　木

兄者ゟあへて臨時の衣替　遠

はしご無尽よりて成にむさ陣　昇

庵すゝき野で和尚の隠居寺の　木

財布落かとさかる石年　遠

出ても也え殿の庭に泪も　昇

大當テナイさん俵煮る　木

きつくさき天串山の猿　遠

猿の皿やりや顔猿き先　昇

乃ゝ仏餐あきら妙妻　木

俳りきせ好子奉公さびしる　遠

屋風呂の湯も霞有　昇

かゆくさつれさ世帰　木

針立の身す羽織を染かね　遠

遠出今丁度よく隠れ　昇

揺椀のかゝ仕着せて　木

雛合のゝ羽さき　遠

八重一重さかり　昇

伏見からの湊　木

乳もらひに雛本の形かたへ　双烏

合せて唐紙を張るこの風　ふ後

絵宮子湯筆紙たてゝ無尽せ　烏

明ては屋敷札わたる役者　後

町方も武家も月の友え好　烏

咲まれ扇も捨て近好嫁　後

毛見衆子をかれはえる程林の寺　烏

派手菩をたち移りて断ツ　後

打割てきみを道ちき物あそび　烏

乳のみ子厨猫る藪尻の家　後

錺柿不図晴るゝまるつ猿子　烏

ちらく後にあの川の水音　後

のゝ後月出る　烏

下戸もありくのする新縁　後

湯元にて角力遠見物の風の縁　烏

元手つまみ　後

学者院のさ　烏

人倫あてのうらまく去られ出家し　淺
峠の茶屋を焼とや娘の人たかり　、
まだその子は勝は檀栖　烏
困窮をさいては拝せぬ女夫石　淺
ゆゑうら思ふれ絹を裂店　烏
あたらしと雨にぬれ根あり雲　淺
枯野りて萩のおちられ菜　烏
熱井戸は銅鏡の漏れせて毒割　淺
維新云ふきたや紙錦　烏
京生れ母子つれし出立旦り　淺
晴る夜こそ賴の活け取　烏
風神も月も大角は細照り　淺
寒ひあれしても光る鉄の柄　烏
手細工に孫市屋あるを渡しする　淺
眼の疹鳥も四九子施して　烏
遠雷きく蝶の時は捨衣裁　淺
こなれて薙髪に権ゆさうふ　烏
古の枝折ゆくと家の樹に好まれ　淺

[illegible]苗代　烏
名所てふまゆみなり鐘新　鳳朗
出船を送る岸柳の蔭　寿宝
まづしきも碁の結ひ無村て　風斗
木家名茶をたてゝも寒し　朗
若柏袖をとる治るや家村時雨　宝
衛法綱の進物に来る　斗
子供の弓豆粒屋ゆくは講の花　朗
つはる念せぬ慈めとうた浄法　宝
なまさ中をすてと帰て旅幼　斗
嵐しく浅の宿屋の欄　朗
鎗立た鉾と出陣の月のあかり　宝
念仏もとうさ山のふもと来る　斗
小姓用女の不蜀織の袖漂　朗
陸安にある娼叔父の兄　宝
雪雲の霧く思ひ疾封かる里　斗
祝うさくて鮮社施し　朗

人影の姿まで見ゆる桜时　宝
地ゟつて出た若法師　永
よく咲に消て一ヶ寺の雪　歎哉
枝くりゆく庭は黄香　可大
海の碇芦の螺蝶はかなき　哉
稽はとしもとの秋の暮　大
入時は月の上がり手雪を添　哉
踊てはみるも耕す地蔵　大
米出も時さぐり出た孔るゝ　哉
代まで出た居浜の舟　大
鍛ても終の世は数々合た　哉
突破りさきに熟の鐘　大
声高くなる豪扇は逢ね帽子　哉
みかき数は清くなる月　大
出た潮に舟の漕出す若葉　哉
散りくるく小役の出羽　大
人通の[illegible]　哉
松庭に妻は伸ぶるむのり　哉
隣ておかでは八ぶんけて出す空き　大
若しれぬ世の後先ね山か本和　、
病とさしかゝる近ひかす　哉
舟閣の舷涼めぬ鰯陸　大
わかれく娘のいとゝひかなきゆき　哉
稲さし添えうけは橋の一柱径　大
ことくにもひる春法は裂　哉
水ぜも先生かゝる春秋　大
古殺の出その清くしからぬ　哉
新来粗も介は陰あさくなき呑　大
声ぬ生むのゝのせよろふ　哉
水鉢の水も行やの宝のむ　大
存分出でをつけまかせ蘭者　哉
妻くとうやに霰にかく　大
丸以て虫を照して割る　哉
遠安に棟は上進大蔵ついて　大

大釜法師とこのは居風呂へ　哉
冬しまれ月ハ浜ハ阿ら屋の雲　大
畑一枚鶉つける跡子　哉
宵寝の法師は蝶に増れ　禾木
表いそのゝく付しる水青　青我
門構一の花に菜の葉くけて　木
白う飛一る碑ふてこかく　我
八月に来ても暑い月の雀　木
本の宮浄土の中編芥出花　我
法ちらこちて咲さちく浪彼岸裾　木
残ふりのゝ骨折ふゆきん　我
惜ゝのあのして哀よ赤く荻　木
古れ茶の袖もとトこ浪荒掃　我
さらくらゝ白き霙の降まり　木
のゝ精そ蛇く汁のつやさ氷　我
朋の首もかへきる月の出る船　木
そうへそのそくさうしふる福堂　我

好うらつしめて濃る四十雀　木
不ふも羅綾も時ての一つなり　我
貧風呂の下焚きつもちいふ　木
おもぢいめらく数入の状　我
市の雛一つぬろへ老これにけて　丶
格たかり川の五位の林主　木
此ふく処も揉て荷て言入　我
数拾ふ舟の稀まかう戸　木
侍家の気よ也ゝやくに過　我
蔵箱乱をなさかりつなまさ　木
小屋掛の此みて餓よ座なり　我
暖簾こしに法然をさかく　木
羽香よ薫も合猫も従逍て　我
此う河くるもののふきゝ此半　木
飯鐘の絡くつ月の池わらう　我
秋の出開ハ此高かりあく　木
雷盃よとけも亀よ執鹿逍　我
下冀ゝ衣のたらく急本た　木

一軒のこし浦も磨やみ　我
稚き結ふ点のこゝろ業くし　木
嫁迎しきらや晴る空の色　我
勝くもてはやさき嘉の蕎麦　木
明ては減しぬ餅和は柱折　水竹
昧れしや本に麻のうら皮　清楽
猩（シヨウヂヤ）抱る揺籃の花の笑ひて　舎池
又旅なる牛の横に思ふ　三岳
白南の能男の肩は人参り　楽
鬼竹のなま雅は渥氷断　竹
破て箱らなて繰りくらん　岳
間に棒行くゝあはる柱本　池
蓋へつく海の背も紡ぎの葉　竹
娼なさも選ハ深く居る　楽
人のまて根出けやき霜符　池
法はぬ寛めきつくるや雲　岳
かけ柿もかゝるへの通し鏡　楽
新さう結月野なり　竹
志のありと夜の路しくはる侵　岳
鶺かゝりてかつりも咲　池
小笠も葛て矢来のつゝきゝ　竹
松月てこ月をさ紗き家の子ひきまと　楽
薮にいへぬ所をく云ふん笑　池
遠くくふれとらぬの手はなら　岳
見る午よりつきて合出犯疫病治　楽
志ろき事なくて家の入秋　竹
きらきらと操作の紫葉十五　岳
あらまと出行あは詣　池
如うつらぬも出せぬ墓稲　竹
及て出く鳥もこゑて舎呑　楽
供書老は言むて雛まと待つ　池
誰も中る乞ふ紫花なくし　岳
かへると月能は陰やくう　楽
溢れけしくつくきめてもの婿　竹
万子合せ出しけ舞へ捷けて　岳

大坂中ハ蒸霊文ぞ付合　池
ちらあへのいつまでかねなが快　千
暑りたる話を和よるの　桒
咲う桜さ長短の春ょ出て　池
手ミふへる雛の巻り出ん　岳
蕎麦の粉挽業や業や塞子る　来池
まゝ口字で八字まゝ入りけり　清桒
ちり生ハ野に伊勢のちら崎て　遊宇
洪水ての二ミ法まし遊びぞ　釈外
材木の耕屋でありま人参　桒
未嘆うなる大かは良　池
房ぎ出し小窓花のまね秋の風　外
外く出るのの嫁の気晴し　宇
達者ながら宿は悔の庭除く　池
稲場ちら来る海の催促　桒
何山と律生と猿しなたひ道　宇
御ト姻生ともろし遠かまひ母　外
掛もあれ位の峰内つきに筈の月　桒
恋人まれあらぬ柿は出来　池
放し気遣先をりて小ありけり　外
家起ありつらもの子の操嫌さき　宇
蔵うける根堀のむのうれ筆り　池
釘きる者財の事おきまき出　桒
蛇こ飛て江戸の気めまく変るら　宇
天逢しきうがかるな筒　外
何ぞ角そしてまず掘り窓の痛　桒
綰の仕出して殖る活言場　池
さ付くま門の女ミ夜の来て　外
備りを呼り味噌乃大味　宇
妨りの俵り費をる風呂の下　池
剥出て仲法の屋ま極まる　桒
近江路ハ皆送れさ折治め　宇
玄の不肉ま出て恋をれる　外
吵炭突法しそるもへて来り　桒
売ら売てなり蝋燭掘さ　池

大服中に荒愛さしけ合　池

世をあへのいつまかりし峯が峠　升

暑りたるし語る和ようのつ　樂

收ら捨ても姥の松は茂て　池

手にあへる雛の巣つ先　岳

茶壺の粉葉茶や冨子多　季池

ましの宮でハ寒きくへりけり　清樂

きれ〳〵と集て出る日本銭　外

大さくなつた所ねてり付　宇

先ぶれにつける不動の使者　池

蒼のまゝ直を志称るも一年　楽

なれなおち付て隠居も仕出見　宇

精料する出も書は惣菜　外

燕子をまつて啼めて雨ふる　九起

雨は水鶏の宵近うに来る　映門

豆腐売々は声も近く通て　起

はれ〳〵と以て〳〵やり拵塗　門

月入て舟の便りは無事な舞　起

捨拾ひの古画を以てやる　門

ふく薬くは紫扇出せはやる拵　起

済〳〵と格子庭を隔てゝ　門

おりおとを仰けて村の音も無甚　起

背向の白綿の綿は茶とれまで　門

うらかれてまうて秀れ不似走　起

ゐそり〳〵と候の茶も売　門

肉くさき法衣と参る旅の人　起

雉の羽並は志る衣林精ぶ　門

銭五百銭る二十日は称すて　起

積る浪うすく沖の白雪　門

寒き仏月秋に青秋に涼さ　起

此数も定め宮毘沙猿掛　門

寶生立も末もしとは年　、

前門出されては弱くなる　起

再帷のもちの葬礼の名も猶　門

収ちも法花の家の神月遊　起

業房者はかくされ下座敷　門

命の延る命は乳風呂　起

晴りて遊ひて法妙法　門

積り八幡慈悲のなもの臨に　起

三人へそえなあかけ禮　門

宮は柱打燈を立て消え　起

島崎千鳥る月の昇りけ　門

枯葉の中にとり残す瓜　起
轆轤に番をつけねは来ぬ所が　門
氣のつまる暮に屏風をたてゝやる　起
丁夜よりそ斧ふりも大杜る　門
逸れ雛の為に猫かり行く　起
七の宮治とて鷹さ衣の衣　門
かゝる光を数のよくよろ鐘　起

仙窟樓眺望

大空の夜はちひさし雲の峰　風郎
涼風待みゆくゝ汁て　姫山
掃子振子供の方かしるそ　晨文
七色は菊の大造すきく　素波
一里浮て先より起る月明り　山
袷重ぬる汐吹きし川　郎
夜櫓のそつと来る松の中　波
同し調子て浮きる獅子舞　文
午時飯のめぐる遅い表統石　郎
甍へ慢明ける圏乃妹　山
乱停て下品をさる珠数の房　文
またゝく内に白くの淨来る　波
の月の路にかさゆく旅の人　山
萩は庭より葉を摘て出　郎
先つ気の色に心をかゝ寄来を　波
抜かりなく舩は下る川口　文
撰まれて章蕎構を穫しけ　郎
ねむく仲るのむ菜乃文　山
唐楊を世すく寿産の吹やん　文
若労もありけ於女は悟きこ　波
粉をは雅の詩のまゝ書明け　山
ゆり起されし風呂の花升　郎
積ては夜のまかされ森の堂　波
畳ふる吹ては寄の謹釋　文
綾殺ちやと来迄風の乃楽に湊　郎
吹大くゝ霞を起ありけ乃　山
菊の枝をかるよせる艶を気　文
命さしあけるかとり統上　波

入り際のこ月夜の花咲　池
やのくとる鴨の子行水離れ　外
出かけ雪の茶屋の出村ゐ　升
兄代は隣の藤の寓への人　池
膝へ手迄くるあみ境の衣　外
利の字る葬の提灯掛る見　升
等根浅出る大津の絵　池
茶くすもて晴見える出し下米　外
月のゐ茶碗子様しかへるか　升

天保十三年
壬寅春

松軒

書肆　江戸本石町十軒店
万笈堂英大助

三都發行書肆

天保十三年壬寅春新刻

京寺町通松原下ル　勝村治右衛門
心斎橋安堂寺町　秋田屋太左衛門
同北久太郎町　河内屋喜兵衛
通油町　鶴屋喜右衛門
芝神明前　岡田屋嘉七
中橋廣小路　西宮弥兵衛
通弐丁目　小林新兵衛
同所　山城屋佐兵衛
同壹丁目　須原屋茂兵衛
同四丁目　同　佐助
浅艸茅町　同　伊八
本石町十軒店　英　大助

[illegible]

[illegible]

中[illegible]郎

[illegible]

大